第３節　これまでの調査

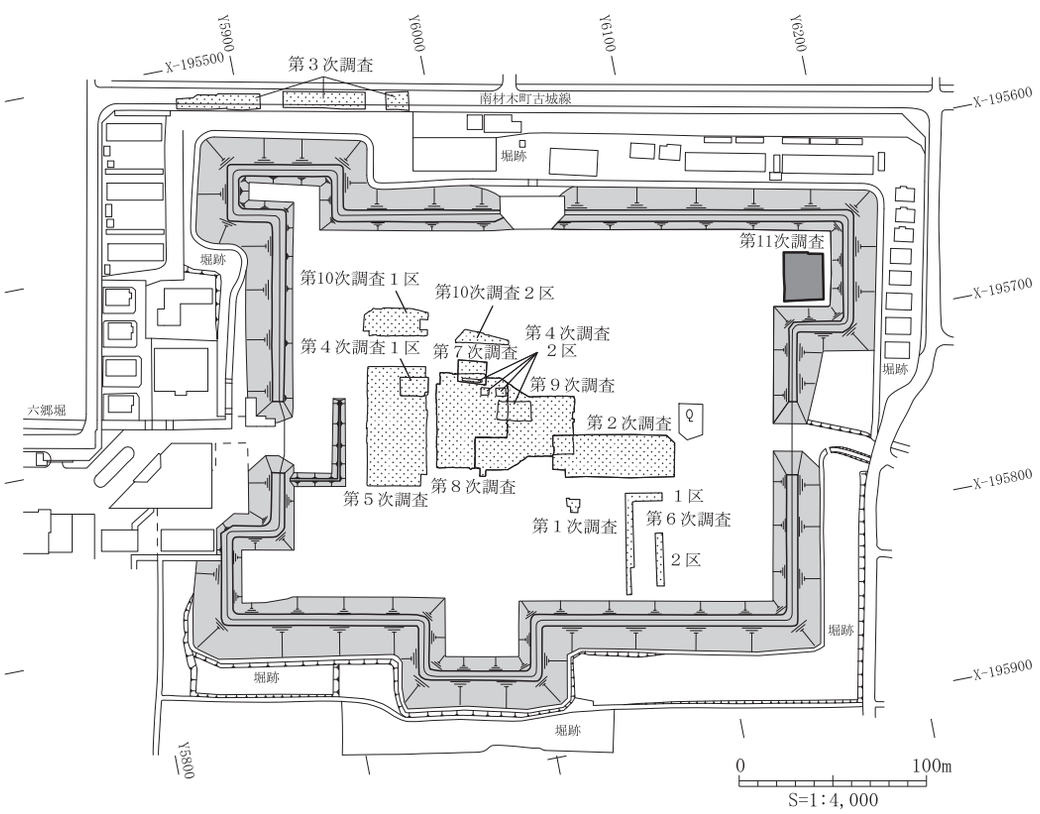
若林城跡の発掘調査はこれまで第１次から第10次までの計10回実施されている。宮城刑務所全体改築計画に伴う調査は第４次調査が最初であり、第１次から第３次調査については今回の一連の調査以前のものである。調査区は第１次、第２次、第６次調査の調査区が城内の南東部、第４次、第５次、第７次から第10次調査が城内の西部から中央部に位置している。また第４次調査は第５次・第７次・第８次・第９次調査と調査区が重複しており、第７次と第２次調査は一部がそれぞれ第８次と第９次調査と調査区が重複している。今回の第11次調査区は城の北東隅部に配置された「張出し」内に位置し、城中心部から離れた当地区での調査は今回が初めてとなる。

第１次調査区は城内の南東部に位置し、中世から近世とみられる掘立柱建物跡１棟のほか、柱穴の可能性のあるピット群を確認しており、その一部については若林城に関わる遺構群の可能性が指摘された。

第２次調査区は第１次調査区の北側を広範囲に調査した。検出遺構は５世紀後半から６世紀初め頃の円墳１基、平安時代の竪穴住居跡４軒のほか竪穴遺構や土坑などがある。また近世の遺構としては瓦がまとまって出土した土坑が１基のみで、これが唯一若林城に関係する遺構と推定された。しかし第１次、第２次調査区の位置する城南東地区においては、若林城造営に伴う整地土や廃城後に形成された畑の耕作土層などは確認できず、城の遺構は明治以降の矯正施設の建設や解体等に伴い削平されたと考えられ、その認識は以後20年近くも続くこととなった。

第３次調査は城外での調査で、若林城北西部にある土塁と堀跡の「張出し」北側に位置する。調査では城北辺の堀跡北岸と張出し東側では塁線に沿い南側に折れる堀跡の屈曲部を確認した。この調査では城の堀幅が明らかになると共に、堀の形状が若林城廃城後に描かれた幾つかの絵図とほぼ一致することが判明した。しかし調査区の制約から、堀の深さや断面形状などは不明で、出土遺物も上層部から出土した近現代のものがほとんどであった。

第４次調査は事前に実施した城内16か所での試掘調査の結果をもとに、西側地区に２か所の部分調査区と３か所の試掘区を設定した。調査では多数の円礫を充填した建物の礎石跡を数基や石敷遺構などを広範囲に確認した。一



第４図　これまでの調査区位置

部の礎石跡については明治11年（1878）に建設された房舎（六角塔）の建物基礎に壊されているのに加え、礎石跡の構造が仙台城大広間と類似しており、さらに推定される柱間が江戸時代初期の柱間基準とされる６尺５寸と考えられるものであることから、これらの礎石跡が若林城の建物を構成するものと判断するにいたった。

第５次調査区は城の大手とされる西側出入口を入った正面に位置する。調査では大規模な整地土上から多数の礎石跡により構成された大小４棟の建物跡のほか、これら建物群の周囲に広範囲に敷設された石敷遺構や各建物外縁に巡らした雨落ち溝跡などを多数確認した。建物群の規模や配置、周囲の石敷遺構等の配置から、これらの遺構は表御殿の一部と推定されたことで、これまで失われたとみられてきた若林城の遺構が良好かつ広範囲に残存していることが判明した。さらに１号建物や３号建物については構造や規模が仙台城二の丸を描いた『御二之丸御指図』にみる「大台所」と「焼火間」に酷似しており、これらが二の丸へ移築する以前の姿と推定されるにいたった。また遺構上層には廃城後、城内に設置された「御薬園」のものとみられる畑の痕跡をほぼ全域で確認している。

第６次調査区は第２次調査区南側に位置し、確認遺構は平安時代を中心とした竪穴住居跡や畑跡に止まり、城の建物跡等のほか、近接する第１次、第２次調査同様に整地層も全く確認できなかった。ただし西側に傾斜する大規模な人工的な落ち込みについては、後世の絵図に描かれた園地に伴う大規模な池跡の可能性が高く、また東西方向の石組み水路跡は第５次調査で確認した水路跡から繋がる同一のものの可能性があると共に、これらの遺構が城造営時に造られた施設の可能性も指摘された。

第７次調査区は第５次調査区北東部に近接し、調査は一連の矯正施設建設とは別に、遺構確認を目的として国庫補助により実施した。調査では建物か廊下の可能性のある礎石建物跡１棟や、その南側に展開するとみられた別建物に伴う雨落ち溝跡のほか、これらの建物間に周囲を石列で仕切り、石敷を伴った小規模な池跡を確認した。

第８次、第９次調査区は第５次調査区の東側で、城のほぼ中心部に位置する。調査ではほぼ全面で整地層を確認し、第５次調査で確認した礎石建物２棟の東端部を確認した他に、大型建物を含む８棟の礎石建物跡や、付属する雨落ち溝跡、さらに様々な構造の複数の池跡、池に導水した樋跡等を確認した。また池跡の１つが埋め戻された後に上部に新たな建物を造るなど、若林城の短い存続期間の中で施設の大規模な改修等が行われたことも明らかとなった。さらに若林城の北東を区画するように鉤型に曲がる大規模な塀跡を確認したことで、これらの施設により城内が西側の「表」と北東側の「奥」とに区画されていたことが判明した。整地土の下からは造営前に埋め戻されたとみられる中世の溝跡や、平安時代の溝跡や多数の竪穴住居跡などを確認した。

第10次調査区は第５次、第８次調査区の北側に位置し、城の遺構は大規模な塀跡と雨落ち跡を発見したのみで、整地土も一部確認したに止まった。西端の塀跡は表御殿群の前面に配置された区画施設の可能性が大きい。また整地土下からは造営に伴い完全に埋め戻された屈曲する大規模な堀跡を確認した。堀の方向は若林城と異なり、若林城造営前の戦国時代末期にこの地域を支配していた国分氏に関わる城館か屋敷を区画する堀と推定されている。

調査次数	調査理由	調査面積	調査期間	所収報告書
第１次	講堂建設	43㎡	昭和59年11月16日～11月17日	仙台市文化財調査報告書第83集
第２次	職業訓練棟建設	1,423㎡	昭和60年 7月 2日～ 8月 7日	仙台市文化財調査報告書第90集
第３次	都市計画道路「南材木町-古城線」建設	370㎡	平成11年 8月23日～10月26日	仙台市文化財調査報告書第256集
第４次	全体改築（処遇管理棟・炊場棟建設）	380㎡	平成16年 9月 6日～11月 5日	仙台市文化財調査報告書第292集
第５次	全体改築（処遇管理棟建設）	1,990㎡	平成17年 5月23日～平成18年 1月31日	仙台市文化財調査報告書第323集
第６次	全体改築（仮設職業訓練棟建設）	450㎡	平成18年 3月13日～ 4月 2日	仙台市文化財調査報告書第306集
第７次	遺構確認（国庫補助）	175㎡	平成18年 6月 1日～ 7月 7日	
第８次	全体改築（炊場棟建設　1年次）	1,600㎡	平成19年 5月14日～12月21日	仙台市文化財調査報告書第377集
第９次	全体改築（炊場棟建設　2年次）	1,534㎡	平成20年 5月23日～12月15日	
第10次	全体改築（北舎建設　1年次）	661㎡	平成21年 6月15日～10月30日	―

※ 第４次～第10次調査が今回の宮城刑務所全体改築とそれにかかわる一連の調査

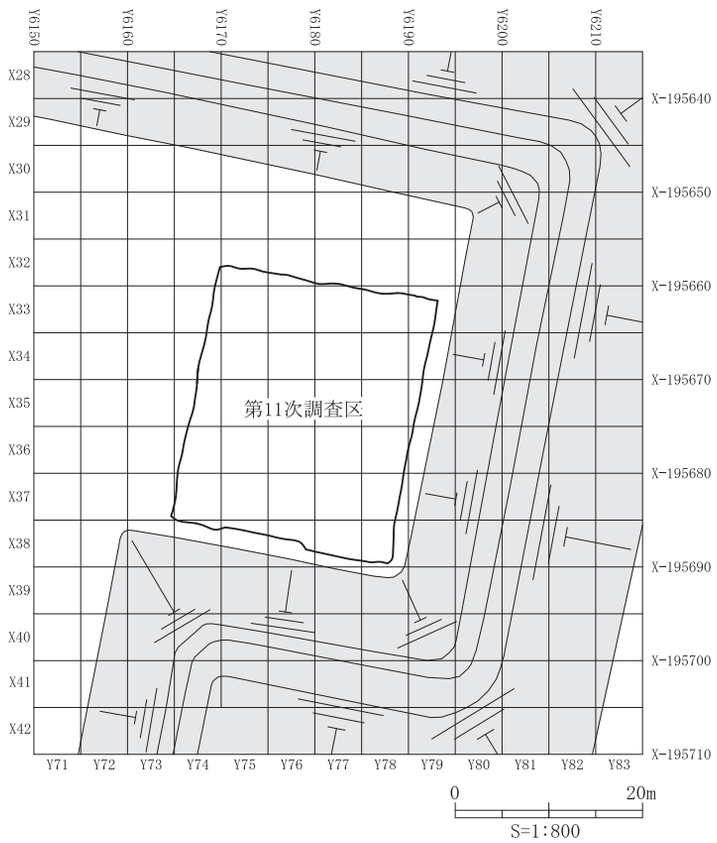
第２表　これまでの調査実績

第４節　調査の方法と経過

［野外調査作業］

重機による表土掘削は平成22年６月18日から開始した。調査区の東部は１m程度の盛土がされており、地表面と遺構検出面の比高差が1.5m程度にもなるため、作業上の安全を確保できるよう、盛土部分は調査区よりも広げて除去した。掘削作業は調査区の南西部よりバックホーで表土層（Ⅰ層）と、近代以降の整地層の可能性もある盛土層（Ⅱ層）を併せて行った。またこの掘削中にも撹乱と判断した箇所については、同時に重機で掘削した。

重機掘削と並行して調査区内に先の調査で若林城跡全体に設定した世界測地系平面直角座標第Ｘ系に基づいた５m間隔のグリッドを表す基準杭を打設し、遺物取り上げの基準とした。グリッドは東西方向をＹ軸、南北方向をＸ軸とし、Ｙ軸は西から東にＹ１、Ｙ２、Ｘ軸は北から南にＸ１、Ｘ２と付番し、グリッド名称はグリッド北西側の交点名をＹ１Ｘ１のように表記した。遺構の測量は第Ｘ系に基づき、自動追尾型トータルステーション（GTS－801A株式会社トプコン）を使用したデジタル地形測量システム（BLUETREND Field com　福井コンピュータ株式会社）によりデータを取得し、測量計算CADシステム（BLUETREND Ｖ　福井コンピュータ株式会社）及びCADソフト（AutoCAD2004　オートデスク株式会社）を使用し、図化編集作業を行った。



第５図　グリッド設定

６月22日から作業員による小規模な撹乱掘削と調査区整形を行い、それと併行して近世の畑耕作土層と考えられるⅢ層上面での遺構検出作業を行った。Ⅲ層の確認範囲は南部と北部の限定的なもので、この面の遺構としては若林城期以外の近世瓦が入った土坑や耕作に伴う幾つかの痕跡がある。Ⅲ層面検出遺構の掘り込みと記録を行った後、７月16日からⅢ層を人力で掘削し、併行してⅢ層下面での遺構検出作業を行った。Ⅲ層下面の状況は中世に形成された可能性のある旧表土層（Ⅴ層）に加え、撹乱や後世の耕作によりⅤ層が残存しない場所ではⅥ層面を確認した部分に分かれるが、これまで第５・７～10次調査等の城中心部で確認した城造営に関わる整地層（Ⅳ層）は確認できなかった。Ⅴ層上面では柱穴跡で構成される塀跡と調査区の南端で大型土坑を確認し、Ⅵ層上面では３条の区画溝跡や多数の竪穴住居跡等を確認した。今回の調査対象の中心は若林城期とそれ以降の遺構であることから、これらの時期の遺構については構造や性格を確認するために一部で掘り込み調査を行い、Ⅵ層上面遺構についても一部を掘り込んだが、遺構保存の観点から基本的には確認に止めた。これに従い大型土坑と土坑やピットの一部は掘り込みを行ったが、塀跡の柱穴は半裁、溝跡は一部の掘削に止め、竪穴住居跡は平面および撹乱壁面での断面観察を行なっている。Ⅴ層・Ⅵ層上面の遺構確認がほぼ終了した９月10日には、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。その後は、測量等の補足調査を行い、９月15日に調査を終了した。

出土遺物についてはⅢ層などの遺物包含層や撹乱出土のものは原則としてグリッドごとに取り上げ、遺構内出土遺物については極力個別層位ごとに取り上げた。ただし基本層中でも陶磁器や鉄製品などは出来る限りトータルステーションにより出土地点を記録し、遺物が多量に出土したＳＸ14については土師質土器の残存の良いものは座標を記録し、小片については土層観察用ベルトにより区画した地区ごとに取り上げた。

９月14日からは埋め戻しを開始し、検出遺構には建物の礎石跡や石組溝などの小礫を使用した遺構がほとんど無かったため、不織布による養生は行わず、遺構面には砕石を細かく砕いた砂を15㎝の厚さで直接盛土した。調査区全体を埋め戻した後、新たな建物の建築には間があることから、埋め戻し砂の飛散や調査区壁面の乾燥を防止するために調査区全域をブルーシートで覆い、９月21日には全ての野外作業を終了した。

また調査時には仙台城跡調査指導委員による現場視察が行われた。

［整理作業］

出土遺物の整理は野外調査と併行して洗浄作業を行った。野外調査終了後の９月18日から遺物を種類ごとに分類し、注記と接合を行った。注記は基本的に遺物の色調に合わせて白色または黒色のポスターカラーを使用し、調査次数、遺物番号、遺構名・グリッド名、細部名、層位名を記入して、ニスでコーティング処理を行った。接合には原則としてセルロース系接着剤（セメダインＣ）を用い、復元・補強には復元用素材（エレホン）と骨材としてポリエステル製樹脂（プライトン）を用いた。遺物は種類ごとに破片数を記録した後、種類ごとに遺物略号を付した登録番号を付け登録した。登録は遺物の形態と残存率に応じて選別し、縄文土器、陶器、磁器、金属製品、石製品は過去の調査に準じて全て登録した。

実測は登録遺物の中から選別したものの実測図を作成した。実測は原則として手測りで行ったが、陶磁器の文様はデジタルカメラで撮影し、トレース段階で合成図化を行った。遺物のトレースはベクタードローイングソフト（Adobe Illustrator 10　アドビシステムズ株式会社）を使用し、ベクターデータ化した上で既刊の若林城跡報告書に準じた縮尺でレイアウトし、報告書用の図版を作成した。

遺物の写真撮影は35㎜一眼レフカメラ、一眼レフデジタルカメラを使用し、人工光源を使用して垂直方向または俯瞰にて撮影した。特に瓦の撮影にあたっては成形や調整技法が観察できるように光源調整し撮影した。35㎜カメラでの撮影にはモノクロフィルムを使用し、デジタルカメラでの撮影データは1,000万画素で撮影したものをJPEG形式で保存し使用した。

遺構図は野外調査後の基礎整理で作成した図面データを基にし、報告書図版に必要となる図面の校正・編集を行った。図面編集は測量計算CADシステム（BLUETREND Ｖ　福井コンピュータ株式会社）およびCADソフト（AutoCAD 2004　オートデスク株式会社）を使用し、汎用CADデータ形式であるDXF形式で保存した。個別遺構図、遺物出土状況図等については各層位や遺構種別ごとにデータを細分化し管理できるようにした。遺構図版は上記のデータをベクタードローイングソフトデータ形式であるAI形式に変換し、縮尺変更、線号付与、テキスト類の入力を行った上で報告書図版データを作成した。

［普及啓発活動］

当教育委員会では今年度に幾つかの普及啓発活動を行っているが、今回の発掘調査においては調査地区や調査期間を考慮し、報道発表や遺跡見学会は開催しなかった。また宮城刑務所での工事の工程上、これまで毎年行ってきた「宮城刑務所矯正展」での遺跡見学会や写真パネル・遺物展示は行わず、代わりに「若林区民ふるさとまつり」において写真パネルと遺物展示を行った。また当課主催の「文化財展」等でもパネル・遺物の展示を行った。

さらに若林城跡関係の講座を２回実施したほか、「北日本近世城郭検討会」や「仙台市内遺跡・民俗等調査成果発表会」での発表を行った。刊行物としては、平成19年・20年度の調査成果をまとめた「若林城跡第８次・第９次調査報告書」や、平成21年度に実施した第10次調査の内容を掲載した「年報31」を刊行した。

第３章　検出遺構と出土遺物

今回の調査ではⅢ層上面とⅤ層上面およびⅤ層が後世の耕作や撹乱により失われている部分では、その下位にあたるⅥ層上面で遺構検出を行った。Ⅵ層上面の遺構に関しては基本的には遺構掘削は行わず､平面的な確認および、撹乱壁面において遺構断面や堆積土状況の確認を行った。遺構に関してはⅢ層、Ⅴ層、Ⅵ層上面の順に各面で検出した遺構を種類ごとに記述した。しかしⅤ層やⅥ層上面で検出したが、本来は上層面での掘り込みとみられる遺構については可能な限り各層に分け記載した。また掲載した出土遺物は大型の土坑から多量に出土した近世段階の同一時代性の強い遺物が中心であるため、出土遺構や層位ごとではなく、遺物の種類ごとにまとめて掲載した。

第１節　基本層序

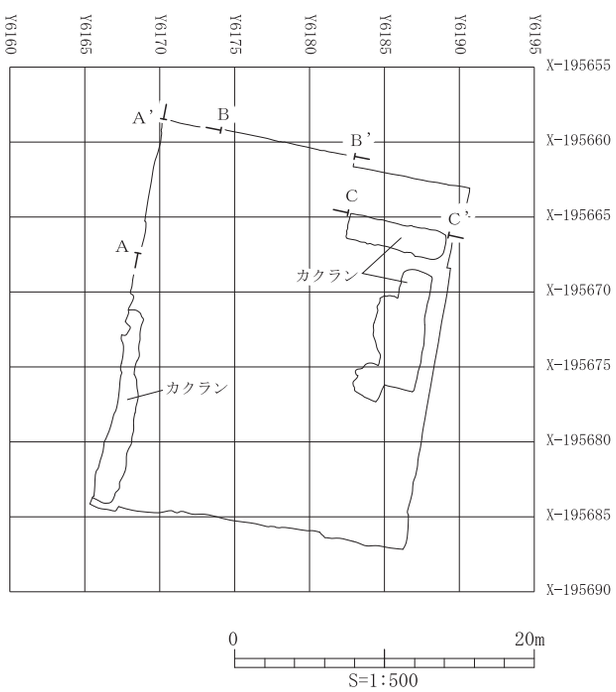
基本層は第４次から第10次調査に準じてⅠ～Ⅶ層に大別したため、今回の調査区では確認できなかった層も含まれている。また細分層に関しては調査区がこれまでの調査区とは距離があるため、従来のものと同一ではない。

Ⅰ層　現代の表土層である。大きくは現代の建物の基礎コンクリート片や礫などを含む層と、下層の比較的これらの混入物の少ない層に分かれる。調査区の東側は現地表面が高くなっているが、掘削した結果、この部分は近年の盛土と分かった。また調査区の南・東側で確認した大規模な撹乱もこの層に含まれる。

Ⅱ層　近現代の整地層で、基本的には第５次・第７次から第９次調査区で確認した通称「六角塔」に伴う整地層やその解体後に盛られた整地層と考えられる。今回の調査区は六角塔から離れており、Ⅱ層は確認できなかった。

Ⅲ層　城の廃城後に形成された近世の畑耕作土である。今回の調査区では均質なシルト質の１層のみ確認し、層厚は最も厚い調査区北壁側で35㎝程度である。Ⅲ層からは近世陶器、土師質土器のⅢや焼塩壷などが出土している。Ⅴ層との境のⅢ層下面は波打ち、撹拌された耕作土下面の状況が確認できる。これまで城内西側での調査区ではⅢ層下面において広域に広がる小溝状遺構群を確認しているが、今回の調査区ではⅢ層上面や下面にあたるⅤ・Ⅵ層上面で確認できず、耕作の在り方に違いがあったことも想定される。

Ⅳ層　第４次・第５次・第７次から第10次調査といった城内の西部から中心部の調査区で確認した若林城造営に伴う整地土であるが、今回の調査では確認できなかった。Ⅳ層は主としてⅤ層とⅥ層を削平して再び敷き直したとみられるブロック土層で、第５次調査では上面に石敷遺構がのり、また第９次調査の一部ではⅥ層との境に基礎地業となる石敷遺構を確認している。今回同様にⅣ層を確認できなかったのは城内の南東部に位置する第１次・第２次・第６次調査であり、同時にこれらの調査区からは若林城の遺構はほとんど確認されていない。Ⅳ層を確認した地区では大規模な建物群を確認しており、このことから本地区におけるⅣ層がⅢ層による後世の耕作で失われた可能性も否定できないが、地



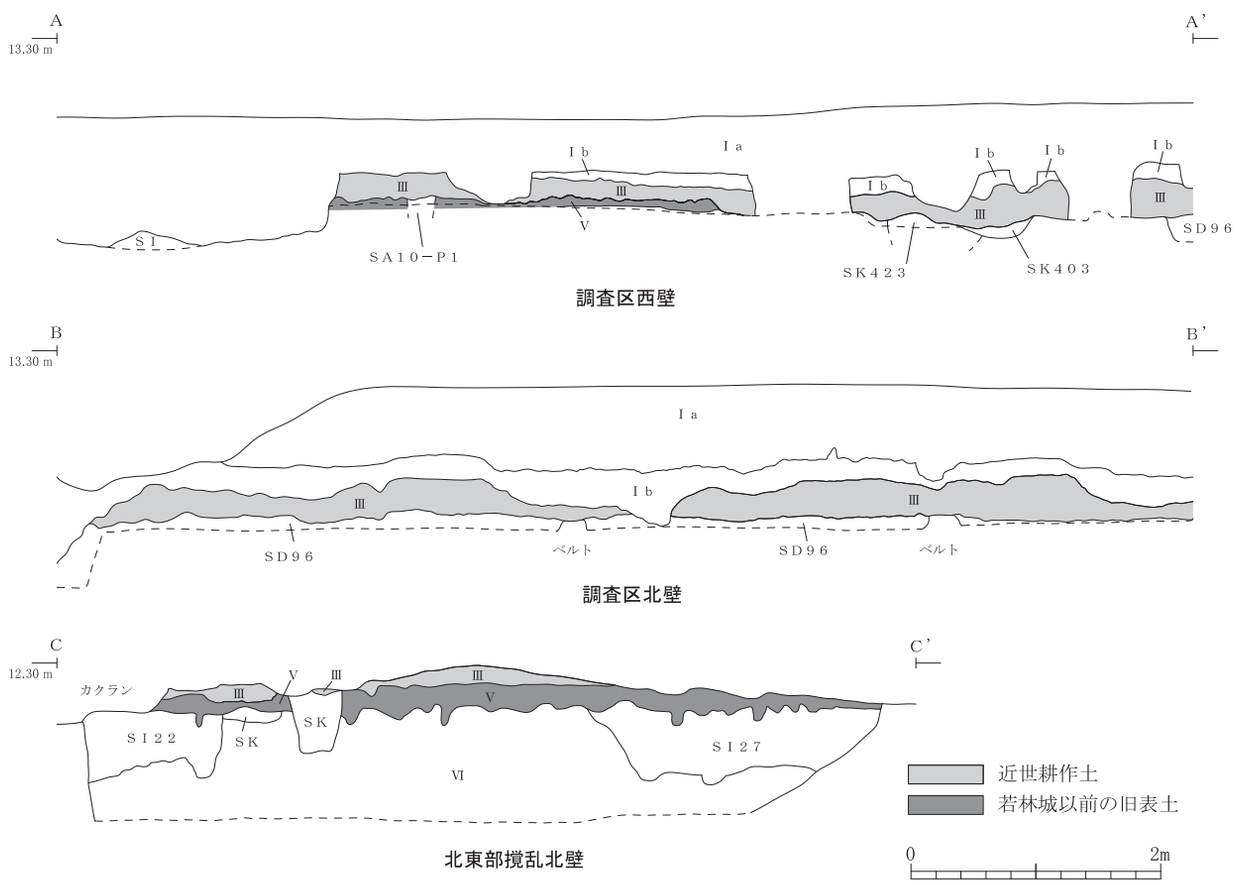
第６図　基本層序記載位置

区の性格からこの地区には本来整地が成されなかった可能性が高い。

Ⅴ層　若林城造営以前の表土層とみられる層で、城内の調査では第５次調査の一部で確認したほか、城外の南小泉遺跡の調査等では面的には殆ど確認されていない。Ⅲ層よりも暗色の均質なシルト質の単層で、層厚は最も厚い調査区北東側で35㎝程度である。Ⅲ層直下に位置することで耕作により失われ、層を確認できなかった場所もある。今回の調査区ではⅣ層が全く確認できなかったため、Ⅴ層は中世から城の造営以前段階、城の機能段階､そして廃城後にⅢ層が形成されるまで長い間の地表面だった可能性がある。Ⅴ層下面はⅢ層同様、部分的に凹凸が著しく、この層が若林城造営以前には中世から近世初頭段階の畑の耕作土であった可能性がある。調査区北東部でⅤ層を一部掘り込んだところ、層中からは土師器と須恵器片が出土したのみで、中世段階の遺物は確認できなかった。

Ⅵ層　均質なシルト質の自然堆積層である。層厚は撹乱の壁面で確認した部分では95㎝で、さらに厚い。層上面で竪穴住居跡や若林城造営以前の溝跡を確認したが、竪穴住居跡の軒数が極めて多く、重複して存在していることからⅥ層上面は面的にほとんど確認できず、撹乱断面等の僅かな場所で確認したのみである。

第９次調査ではⅥ層の下位に径10㎝程度の円礫と砂礫を多量含む自然堆積層を確認しており、これをⅦ層としたが、今回の調査区ではこれら円礫混じりの層は確認できず、全てをⅥ層とした。Ⅵ層・Ⅶ層共にかつてこの地区を流れていた小河川を起源とする洪水性堆積層とみられる。



層位	土色	土性	特徴	備考
Ⅰa	10YR4/4 褐色	砂質シルト	径20㎝以内の円礫を多量含む	現代盛土
Ⅰb	2.5Y4/2 暗灰黄色	砂質シルト	径１㎝以内の円礫、炭化物を含む	現代盛土
Ⅲ	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径10㎝以内の円礫を含む	近世耕作土
Ⅴ	10YR3/2 黒褐色	シルト	径0.5㎝以内の炭化物を少量含む	若林城以前の旧表土
Ⅵ	10YR5/6 黄褐色	シルト		―

第７図　基本層序

第２節　Ⅲ層上面の遺構

Ⅲ層上面で確認した遺構は土坑６基を確認したのみで、これまでの調査でみられた集石遺構やピット等は確認できなかった。Ⅲ層の残存範囲は少なく、調査区の北部と南部にほぼ限られ、後世の撹乱により中央部ではほとんど確認できなかったが、残存する検出遺構は少ないことから、本来、Ⅲ層上面で存在した遺構は少なかったとみられる。また若林城時期以降とみられる遺物が出土したＳＫ396・400以外、Ⅲ層が残存しない部分で確認した遺構について、下面で確認されるべき遺構と認識したものについてはⅤ層やⅥ層の下層面での確認遺構とした。さらに今回の調査では明確なⅡ層が確認できなかったため、確認遺構には近代以降の遺構が含まれている可能性もある。

（1）土坑

土坑は比較的広範囲にⅢ層が残存する調査区北端や南端では確認できず、南西側にみられる。土坑の規模は長軸が1.64～2.3mとやや大型で、形状は不整形のものが多く、堆積土はブロック土を含むⅢ層に類似した層が多い。これらは何らかの耕作に関わる掘り込みの可能性もあり、性格の分かるものは少ない。

394号土坑

Y74、X35・36グリッドで検出し、西側と北東側を撹乱で壊され、形状は不整の円形か楕円形とみられる。残存規模は長軸２m、短軸1.28m、深さ29㎝である。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。堆積土はブロック土を含むⅢ層類似層による単一層である。遺物は非ロクロ土師器、須恵器が出土した。

395号土坑

Y74、X36・37グリッドで検出し、西側を撹乱で壊され、形状は円形か楕円形とみられる。残存規模は長軸2.3m、短軸1.52m、深さ37㎝である。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は狭く中央部分が深くなっている。壁面に根跡を幾つか確認している。堆積土は２層に分かれ、１層下部には炭化物や瓦片を多く含み、２層は少量のブロック土を含んでいる。遺物は軒桟瓦、桟瓦、非ロクロ土師器が出土した。

396号土坑

Y75、X35・36グリッドで検出し、南側を撹乱で壊されている。形状は不整楕円形で、残存規模は長軸1.01m、短軸0.84m、深さ37㎝で、主軸方向はＮ－72°－Ｗである。壁面は他の土坑と異なり急角度で立ち上がり、底面は平坦な整った形状である。堆積土は５層に分かれ、最上層はブロック土を含むⅢ層類似層で、下部に瓦片や礫と炭化物を多量に含む層がこれらをほとんど含まない間層を挟み上下に２層あり、最下層はブロック土層である。遺物は平瓦、軒桟瓦、桟瓦、非ロクロ土師器、須恵器、鉄釘が出土した。また瓦に混じり円礫も出土しており、耕作に支障となる瓦片や礫をまとめて廃棄したとみられる。

397号土坑

Y76、X36グリッドで検出し、北側を撹乱で壊されている。形状は不整形で、残存規模は長軸２m、短軸1.93m、深さは浅く８㎝である。壁面の残存は僅かだが急角度で立ち上がり、底面は広く平坦である。堆積土はⅢ層と異なり明色砂質シルトの単一層で、この堆積土は他の遺構では確認できない。遺物は出土していない。

398号土坑

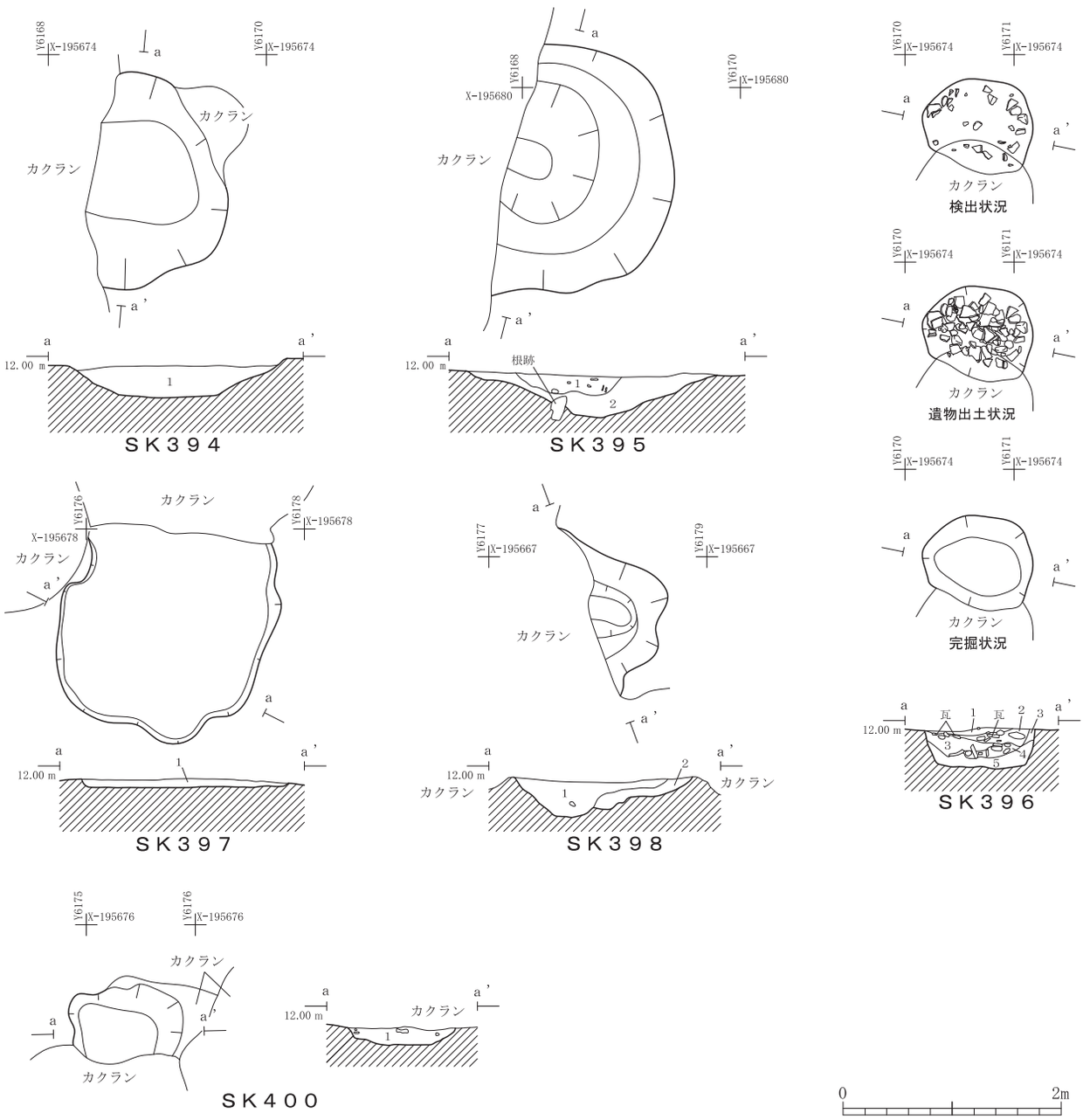
Y76、X34グリッドで検出し、西側を撹乱で壊されており、形状は不明である。残存規模は長軸1.64m、短軸0.74m、深さ32㎝である。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は中央部で１段深く、堆積土は２層に分かれるが、底面状況からみて重ねて掘りこまれた可能性もある。遺物は非ロクロ土師器が出土した。

400号土坑

Y75・76、X36グリッドで検出し、北側と南側を撹乱で壊されるが、形状は不明である。残存規模は長軸1.05m、

第８図　Ⅲ層上面遺構配置図

短軸0.68m、深さ16cmである。全体が緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は炭化物を含むⅢ層類似の単一層で、東半分がグライ化している。遺物は桟瓦、非ロクロ土師器が出土した。



遺　構	層 位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SK394	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	径１cm以内の明黄褐色砂質シルトブロックを含む　径１cm以内の炭化物を微量含む	―
SK395	1	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径１cm以内の明黄褐色砂質シルトブロックを含む　径３cm以内の炭化物を含む	―
	2	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径３cm以内の明黄褐色粘土質シルトブロックを少量含む	―
SK396	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫を少量、径１cm以内の炭化物を含む	―
	2	10YR1.7/1 黒色	砂質シルト	暗褐色シルトブロックを含む　径20cm以内の円礫を少量含む	―
	3	10YR3/4 暗褐色シルト	砂質シルト		―
	4	10YR1.7/1 黒色	砂質シルト	径１cm以内の暗褐色シルトブロック、径20cm以内の円礫を含む	―
	5	10YR4/3 暗褐色シルト	砂質シルト	径20cm以内のにぶい黄褐色シルトブロックを含む	―
SK397	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	径１cm以内のにぶい黄橙色粘土質シルトブロックを微量含む	―
SK398	1	2.5Y5/2 暗灰黄色	砂質シルト	径１cm以内の明黄褐色シルトブロック、炭化物を少量含む	―
	2	10YR5/1 褐灰色	砂質シルト	径３cm以内の明黄褐色シルトブロックを含む　径１cm以内の炭化物を微量含む	―
SK400	1	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫を少量、径１cm以内の炭化物を少量含む	―

第９図　土坑

第３節　Ⅴ層上面の遺構

Ⅴ層上面では塀跡５基、溝状遺構１条、近世遺物が多量に廃棄された性格不明遺構１基、土坑、ピットを確認した。本調査区ではこれまでの調査区において城の遺構の確認面であるⅣ層整地土が確認されなかった。このことからⅤ層上面での遺構には若林城造営直前から若林城期全般、そして城の廃絶以降でⅢ層耕作土が初めに形成されるまでに造られた遺構群と考えられる。また遺構の堆積土にはⅢ層に類似した層を含むものも認められることから、この面で確認した遺構には土坑やピットを中心に本来Ⅲ層上面で確認されるべき遺構をはじめ、後世まで埋まり切らずにあったものが含まれている可能性もある。

（1）塀跡

塀跡は調査区のほぼ全体で、南北方向３基、東西方向２基の計５基を確認した。これらはいずれも礎石を用いたものではなく、掘立柱が並ぶ構造であり、第５次、第８次、第９次、第10次調査で確認した溝状の布掘り基礎に柱を連続して立てた塀跡とは構造が異なる。これらの塀跡の報告は若林城の軸線方向と完全に一致するものと若干異なるものがある。遺構の掘り込みは柱穴掘り方の半裁に止め、構造等の確認を行った。

10号塀跡

配置と規模

Y74・75、X33～37で確認した10基の柱穴が並ぶ南北方向の塀跡の可能性がある。軸方向はＮ－11°－Ｅであり、城自体やこれまで確認した諸施設の方向と一致している。東側に位置する城の張出し東辺土塁の法尻との距離は24.4mで、北端のＰ１と北辺土塁との距離は18.7m、南端のP10と南辺土塁との距離は4.3mである。確認した９間分の長さは約18mで、個別の柱間には1.92～2.05mと若干の違いがあることから、柱位置が推定できる北端のＰ１からＰ９までの距離15.89mから割出したところ、柱間は1.99m程度である。但しＰ１は掘り方の向きが塀方向に対して斜めに掘り込まれ、Ｐ１が隅となり塀が西側へ折れることも考えられ、その場合これらの柱穴は建物を構成する柱の可能性もある。また南端ではＰ10の南側へ延び、調査区外へ続いている可能性もある。他の遺構との重複関係は確認できなかった。塀の位置は今回の調査区が位置する城北東側張出しの開口部分に位置し、張出し部分を区画した施設である可能性が高い。

柱　穴

柱穴の形状はやや不整形ではあるが隅丸長方形のものが多く、Ｐ３・６については不整楕円形に近い形状であるが、不整形となる理由は後世の様々な撹乱による。Ｐ１は北西-南東方向に長く塀跡の軸方向に斜めであり、Ｐ２・３・４・10は東西方向が長く、軸方向に直交し、Ｐ５・６は南北方向に長く、軸方向に沿っている。但しＰ１以外の形状は本来整った方形かやや長方形であり、塀方向とは無関係と考えられる。柱穴の掘り方規模は北側のＰ１～６は長軸0.98～1.31m、南側のＰ７～10は上面の撹乱が著しく、長軸0.38～0.54mと小規模である。堆積土は柱痕跡とその抜取痕、そして掘り方埋土に分かれ、掘り方埋土は概ね２～５層に分かれるブロック土である。柱痕跡と抜取痕はＰ１～４・６・９で確認しており、形状は径0.1～0.15mの円形である。Ｐ９以外は層中に明瞭なブロック土が混入することで、これらの柱は抜き取られた後に入り込んだものと判断されることから抜取痕とした。

柱穴の壁面を確認できたものではＰ２が急角度で立ち上がる以外はほぼ垂直に立ち上がる。底面を確認したものはＰ２・４・８・９・10で、他のものは抜取痕下部に円礫を確認したことから、そのレベルで掘込みを止めている。Ｐ２底面にみられた円礫は礎石とみられ、抜取痕の下部に位置している。Ｐ４の底面は平坦であり、底面の小円礫も抜取痕下部にあることから礎石とみられる。Ｐ８の底面は凹凸があり、Ｐ９は柱痕跡が底面より窪み、Ｐ10は底面中央が低くなっているが、底面が確認されたにも関わらず、これらに礎石は見られなかった。Ｐ２の深さは51

第10図　V層上面遺構配置図

cm、底面標高は11.22m、Ｐ４の深さは72cm、底面標高は11.11m、Ｐ８～10の深さは15cmほどで、底面標高は11.06～11.13mである。その他ではＰ１・３・６においてやや大きめの円礫を確認しており、Ｐ１は円礫が抜取痕よりも大きく、Ｐ１・３は礫の下まで抜取痕が続いていないため礎石の可能性がある。Ｐ６では底面を確認する前に浅い位置で抜取痕の堆積土中にある礫を確認しており、これは抜取痕に混入した礫とみられる。またＰ２では円礫が２個埋設されているが、抜取痕は片方の礫の上で確認している。抜取痕下部の礫上面の標高は11.08～11.39mであり、Ｐ３の礫が最も低く、Ｐ１の円礫が最も高い位置にある。

出土遺物

Ｐ３の掘り方埋土から土師質土器皿、非ロクロ土師器、須恵器、Ｐ６の掘り方埋土から土師器が出土した。また取り上げは行わなかったが、北端のＰ１の掘り方埋土には若林城の瓦片が含まれている。これまでの調査では城に伴う瓦は城施設が廃絶された後の流入であり、構築の際の掘り方埋土からの出土は無い。

11号塀跡

配置と規模

Y76～78、X36で確認した小型の柱穴が東西に６基並ぶ塀跡である。これより西側へは延びず、東端はＰ６東側の調査区外へ続く可能性もある。軸方向はＮ－80°－Ｗであり、ＳＡ10同様に城自体やこれまで確認した諸施設の方向と一致する。南側の張出し南辺土塁の法尻と遺構軸との距離は12.9mで、東端のＰ６と張出し東辺土塁との距離は5.2m、また西端のＰ１とＳＡ10遺構軸との距離は約９ｍである。個々の柱間は1.98～2.12mと差があり、確認した５間分の長さは10.25mで、柱位置が推定できる西端のＰ２からＰ６までの距離8.22mから割り出したところ、柱間の平均は2.06m程度である。ＳＡ11軸を西側へ延長した部分にＳＡ10の柱穴は無いことから、両遺構は接続していなかったものとみられる。またＳＡ11は南側のＳＸ14の北側に配置されており、張出し内においてＳＸ14を区画する位置関係にある。

柱　穴

個々の柱穴の形状は全体に南北方向に長い楕円形で、掘り方径は0.41～0.63mで、今回確認した塀跡の柱穴掘り方幅としては小型のものである。堆積土は抜取り穴と柱痕跡と掘り方埋土に分かれる。ほとんどの柱穴は柱を抜き取る際に掘り方埋土上部を途中まで掘り込んでおり、これを抜取り穴とした。Ｐ１はこの抜取り穴に径25cmほどのやや大きな円礫が入っている。Ｐ２～６では抜取り穴下部で径0.09～0.13mの円形の柱痕跡らしき直立した堆積土を確認しているが、堆積土中にブロック土が含むことから、丁寧に抜き取られた抜取痕とした。

掘り方壁面上部はほぼ垂直に立ち上がり、底面はＰ１がほぼ平坦で、Ｐ６は底面中央がやや深くなり、それ以外は抜取痕底面が掘り方底面よりも下がっている。掘り方の深さは33～68cmで、底面標高は11.16～11.46mであり、Ｐ１のみが他よりも極端に浅く、Ｐ４が最も深い。

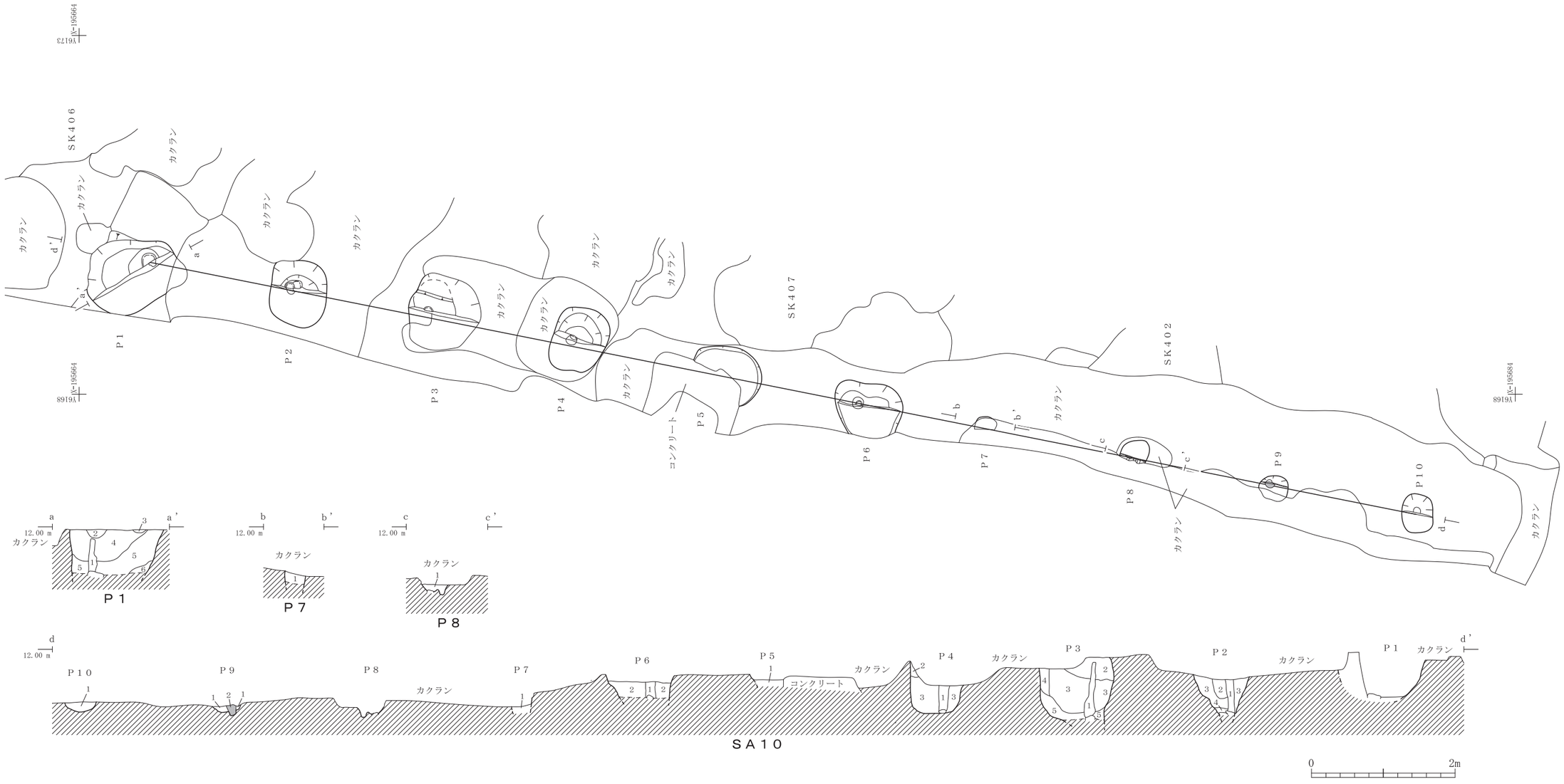
出土遺物

Ｐ６の抜取痕から鉄製品が出土した。

12号塀跡

配置と規模

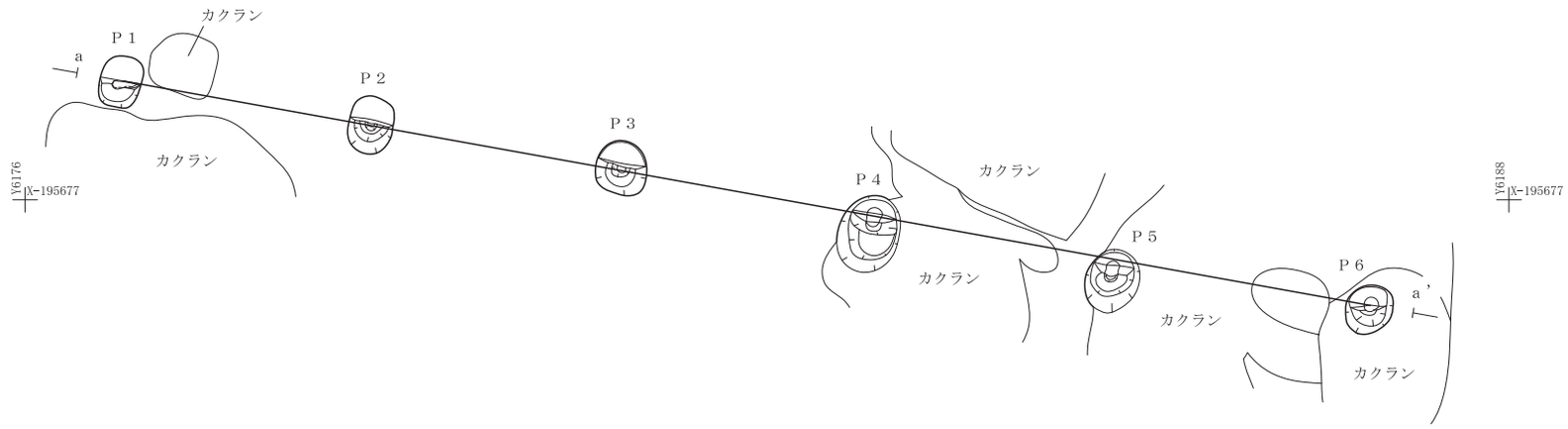
Y76、X35・36で確認した２基の柱穴が並ぶ南北方向の塀跡である。南北への延びは確認できなかった。軸方向はＮ－11°－Ｅであり、城自体やこれまで確認した諸施設の方向と一致している。東側に位置する城の張出し東辺土塁の法尻との距離は15.1mである。確認した柱抜取痕間の距離は2.48mと、ＳＡ10や11と比較して柱間が広い。ＳＸ14の北側に位置しているが、ＳＡ11のＰ１と２との間で交差する位置関係にあることから、同時期の遺構ではない可能性が高い。また各柱穴から軸方向に直交する西側延長部分にはＳＡ10の柱穴は位置せず、ＳＡ10と直接取り付く可能性は低いものとみられる。

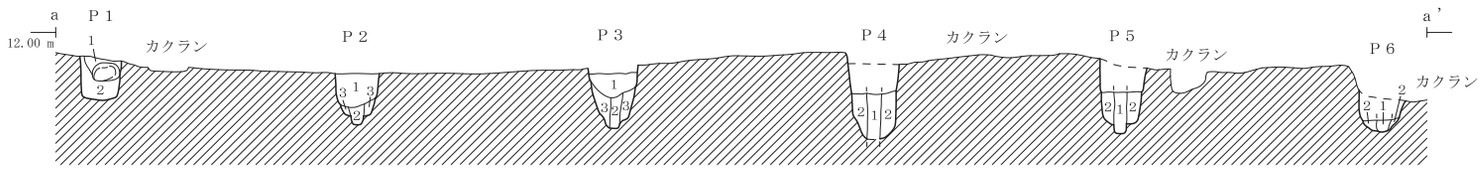


遺構	層位	土色	土性	特徴	備考
P1	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径５cm以内の黒褐色シルトブロックを微量含む	抜取痕
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径５cm以内のにぶい黄褐色・黒褐色シルトブロックを少量含む	掘り方埋土
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径５cm以内のにぶい黄褐色・黒褐色シルトブロックを少量含む	
	4	10YR3/2 黒褐色	シルト	径５cm以内のにぶい黄褐色シルトブロックを少量含む	
	5	10YR3/2 黒褐色	シルト	径20cm以内のにぶい黄褐色シルトブロックを含む	
	6	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の黒褐色シルトブロックを少量含む	
P2	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	径５cm以内の暗褐色シルトブロックを少量含む	抜取痕
	2	10YR4/4 褐色	砂質シルト	径５cm以内の暗褐色シルトブロックを多量含む	掘り方埋土
	3	10YR4/4 褐色	砂質シルト	径10cm以内の暗褐色シルトブロックを多量含む	
	4	10YR4/4 褐色	砂質シルト		
P3	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	径５cm以内の褐色・黒褐色シルトブロックを多量含む	抜取痕
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の褐色・黒褐色シルトブロックを多量含む	掘り方埋土
	3	10YR4/6 褐色	シルト	径10cm以内のにぶい黄褐色・黒褐色シルトブロックを多量含む	
	4	10YR4/5 褐色	シルト	径５cm以内のにぶい黄褐色・黒褐色シルトブロックを微量含む	
	5	10YR4/6 褐色	シルト	径５cm以内のにぶい黄褐色・黒褐色シルトブロックを少量含む	

遺構	層位	土色	土性	特徴	備考
P4	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	径５cm以内の褐色シルトブロックを含む	抜取痕
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	径５cm以内の褐色シルトブロックを多量含む	掘り方埋土
	3	10YR4/4 褐色	シルト	径10cm以内の黒褐色シルトブロックを少量含む	
P5	1	10YR4/4 褐色	シルト	径10cm以内の黄褐色・暗褐色シルトブロックを多量含む	掘り方埋土
P6	1	10YR4/4 褐色	シルト	径３cm以内の黄褐色・暗褐色シルトブロックを多量含む　径20cm以内の円礫を含む	抜取痕
	2	10YR4/4 褐色	シルト	径10cm以内の黄褐色・暗褐色シルトブロックを多量含む	掘り方埋土
P7	1	10YR4/4 褐色	シルト	径10cm以内の黄褐色・暗褐色シルトブロックを多量含む	掘り方埋土
P8	1	10YR4/6 褐色	シルト	径５cm以内のにぶい黄褐色・黒褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
P9	1	10YR4/4 褐色	シルト	径５cm以内のにぶい黄褐色・黒褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径３cm以内の黒褐色シルトブロックを少量含む	柱痕跡
P10	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	径５cm以内の黄褐色・黒色シルトブロックを多量、径１cm以内の炭化物を少量含む	掘り方埋土

第11図　10号塀跡





ＳＡ１１

遺　構	層 位	土　色	土　性	特　徴	備　考
P1	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	径20cm以内の褐色砂質シルトブロックを多量含む　径30cm以内の円礫を含む	抜取痕
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	径３cm以内の褐色砂質シルトブロックを含む	掘り方埋土
P2	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	径10cm以内の褐色シルトブロックを多量含む	抜取痕
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	径３cm以内の褐色砂質シルトブロックを少量含む　径１cm以内の炭化物を含む	
	3	10YR3/3 暗褐色	シルト	径３cm以内の褐色砂質シルトブロックを少量含む　径１cm以内の炭化物を含む	掘り方埋土
P3	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	径５cm以内の褐色・黒褐色シルトブロックを多量含む	抜取痕
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	径３cm以内の褐色シルトブロックを多量含む	
	3	10YR3/2 黒褐色	シルト	径３cm以内の褐色シルトブロックを少量含む	掘り方埋土
P4	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	径３cm以内のにぶい黄褐色シルトブロックを含む	抜取痕
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	径３cm以内の褐色砂質シルトブロックを少量含む	掘り方埋土
P5	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	径３cm以内の黒褐色シルトブロックを含む	抜取痕
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	径３cm以内のにぶい黄褐色シルトブロック、径１cm以内の炭化物、焼土を含む	掘り方埋土
P6	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	径３cm以内の黒褐色シルトブロックを少量含む	抜取痕
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	径３cm以内の褐色シルトブロックを少量含む	掘り方埋土

第12図　11号堀跡

柱　穴

掘り方の形状は両者とも円径で、Ｐ１は径0.84m、Ｐ２は径1.08mである。堆積土は柱痕跡と掘り方埋土に分かれ、掘り方埋土はブロック土が充填されている。柱痕跡は円形で、Ｐ１が径0.16m、Ｐ２が径0.2mであるが、この堆積土にはブロック土が含まれるため、柱の抜取痕と考えられる。

掘り方壁面はＰ１は急角度で、Ｐ２はほぼ垂直に立ち上がるものである。底面はＰ１は中央がやや深くなり、Ｐ２はほぼ平坦であるが、抜取痕が底面よりもわずかに下がっている。柱穴の深さはＰ１が31㎝、底面標高が11.27m、Ｐ２の深さが54㎝、底面標高が11.2mである。大型の柱穴のＳＡ11・13・14に見られるような柱痕跡下部に礎石とみられる円礫は確認できなかった。

出土遺物

Ｐ２の掘り方埋土から須恵器が出土した。

13号塀跡

配置と規模

Y77、X34・35で確認した２基の柱穴が並ぶ南北方向の塀跡である。南側への延びは確認できなかったが、北側へ6.4m延長したところにＳＡ14－Ｐ１が位置することで、ＳＡ14と接続する可能性がある。またＰ２の西側にはＰ９・12の小型の柱穴を２基確認しているが、これらとＰ２の柱痕跡は一直線には並ばず、同一の施設かは不明である。軸方向はＮ－14°－Ｅであり、若林城の軸方向と比べるとやや東側に傾いている。東側に位置する城の張出し東辺土塁の法尻との距離は11.6mである。柱痕跡間の距離は3.75mとなり確認した柱穴間の距離としては最も長い。ＳＡ13の南側へ延長したＳＡ11部分には柱穴はなく、また各柱穴から西側への延長部分にもＳＡ10の柱穴は位置しておらず、これらの塀跡との関係は不明である。

柱　穴

柱穴の形状は隅丸方形でＰ２が南北にやや長いものである。Ｐ１は上面が撹乱に壊されており長軸が0.68mと小さくなっており、Ｐ２は長軸が1.17mとやや大型である。堆積土は柱痕跡と掘り方埋土に分かれ、掘り方埋土はブロック土で、他の柱穴と大きく違い、掘り方埋土に径20～30㎝の円礫をまばらに含んでいる。柱痕跡の堆積土には径10～20㎝の礫が含まれていることから、柱は抜き取られているとみられ、抜取痕とした。特にＰ２の抜取痕の上面では径10㎝ほどの円礫が密集して出土している。また他の柱穴の抜取痕は円形であるが、ＳＡ13の抜取痕は隅丸方形であり、長軸径はＰ１が0.32m、Ｐ２が0.3mである。

掘り方壁面を確認できたＰ２では壁面はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は抜取痕下部で円礫を確認したことから、そのレベルで掘り込みを止めている。またＰ２の南の壁面から底面で径0.25mのピットを確認している。Ｐ１の礫は柱痕跡の堆積土中にあり、これは抜取痕に混入した礫とみられる。Ｐ２は底面で確認したことから礎石の可能性がある。抜取痕下部の礫上面の標高はＰ１が11.43m、Ｐ２が11.21mである。

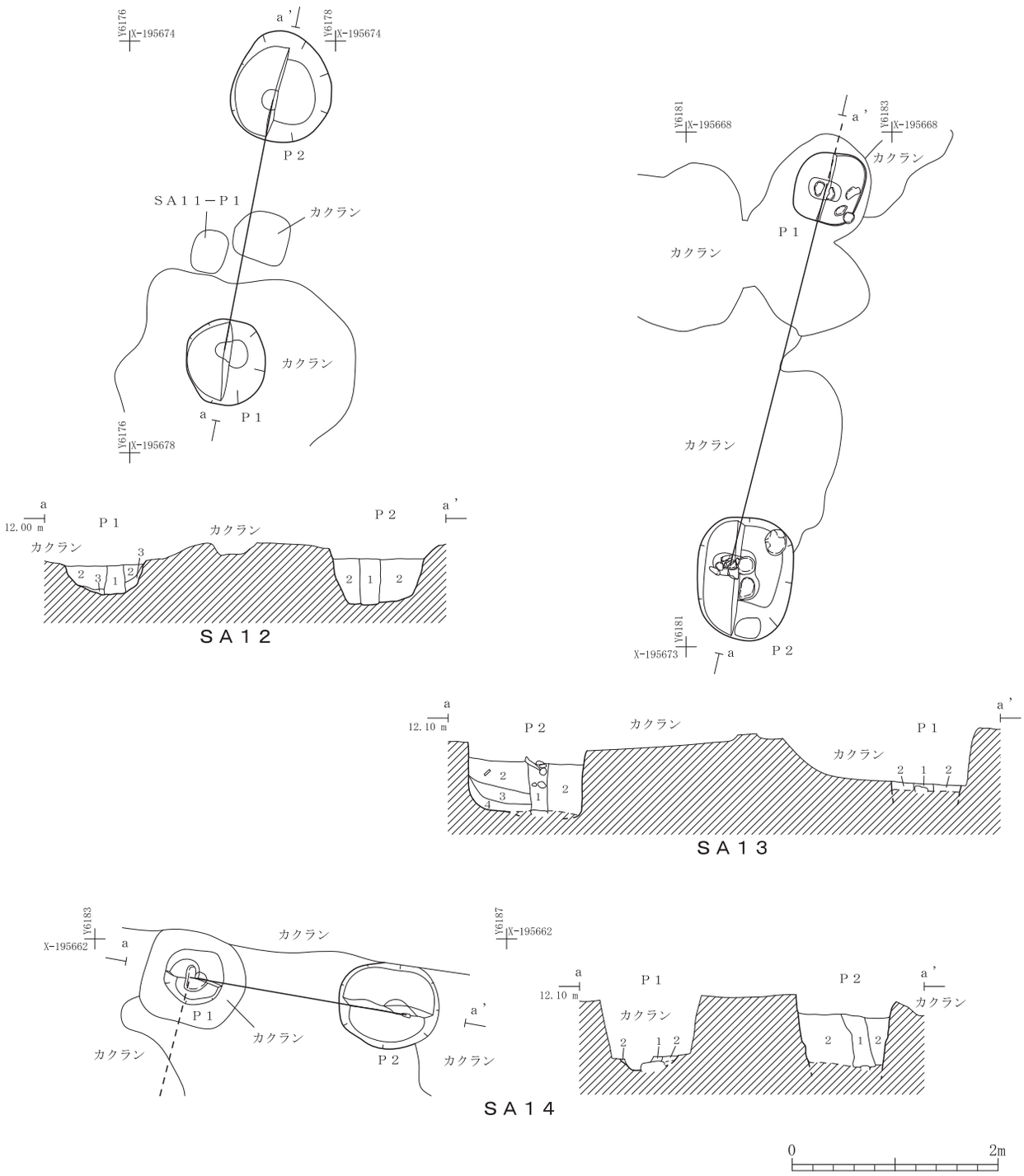
出土遺物

Ｐ１の抜取痕から鉄製品、Ｐ２の抜取痕から非ロクロ土師器、須恵器、掘り方埋土から非ロクロ土師器が出土した。また取り上げは行わなかったが、Ｐ２の掘り方埋土には若林城の瓦片が含まれている。

14号塀跡

配置と規模

Y77・78、X33で確認した２基の柱穴が並ぶ東西方向の塀跡である。東西への延びは確認できなかった。調査区北端に位置するＳＤ96と非常に近接する位置にある。軸方向はＮ－80°－Ｗであり、城方向とほぼ同じである。北側に位置する城の北辺土塁の法尻との距離は13mで、東端のＰ２と張出し東辺土塁の法尻との距離は8.9mである。柱痕跡間の距離は2.08mである。位置関係からＳＡ13と一体の施設の可能性がある。



遺　構	層 位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SA12−P1	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	径５cm以内の褐色シルトブロックを多量含む	抜取痕
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	径10cm以内の褐色シルトブロックを少量含む	掘り方埋土
	3	10YR4/4 褐色	砂質シルト	径10cm以内の暗褐色シルトブロックを少量含む	
SA12−P2	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	径10cm以内の褐色・黒褐色シルトブロックを含む 径１cm以内の炭化物、焼土を少量含む	抜取痕
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	径10cm以内の褐色・黒褐色シルトブロックを含む 径１cm以内の炭化物、焼土を多量含む	掘り方埋土
SA13−P1	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径３cm以内の黄褐色砂質シルト・黒褐色シルトブロックを多量含む 径20cm以内の円礫を含む	抜取痕
	2	10YR5/6 黄褐色	シルト	径５cm以内のにぶい黄褐色シルトブロックを多量含む	掘り方埋土
SA13−P2	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	径１cm以内の黄褐色砂質シルトブロックを含む　径１cm以内の炭化物を少量含む　径20cm以内の円礫を含む	抜取痕
	2	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	径１cm以内の灰黄褐色・にぶい黄褐色砂質シルトブロックを含む　炭化物を微量含む	掘り方埋土
	3	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	径５cm以内の黄褐色砂質シルトブロックを多量含む	
	4	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	径３cm以内の黄褐色砂質シルトブロックを少量含む	
SA14−P1	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	径３cm以内のにぶい黄褐色砂質シルト・黒褐色シルトブロックを少量含む	抜取痕
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の褐色砂質シルト・黒褐色シルトブロックを多量含む	掘り方埋土
SA14−P2	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	径３cm以内の褐色砂質シルトブロックを少量含む 径10cm以内の円礫を少量含む	抜取痕
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の褐色砂質シルト・黒褐色シルトブロックを多量含む	掘り方埋土

第13図　12・13・14号塀跡

柱　穴

掘り方の形状は残存状況の良いＰ２は東西に長い楕円形で径0.98m、Ｐ１は上面が撹乱に壊されていることもあり径0.56mと小さい。堆積土は柱痕跡と掘り方埋土に分かれ、掘り方埋土はブロック土で、柱痕跡の堆積土はＰ１がブロック土で、Ｐ２はしまりが悪く、柱は抜き取られているとみられることから、抜取痕とした。抜取痕はＰ１は残存状況が悪く不明であるが、Ｐ２は径0.21mの円形である。Ｐ２の抜取痕は垂直ではなく西のＰ１側にやや傾斜している。

掘り方壁面を確認したＰ２では壁面は急角度で立ち上がり、Ｐ１では中央がやや深くなっており、底面で確認した円礫は抜取痕下部に位置することで礎石とみられる。Ｐ２は抜取痕下部で円礫を確認したことから、そのレベルで掘り込みを止めているが、底面には無く、グライ化した抜取痕堆積土が下面に続いており、抜取痕に混入した小礫とみられる。抜取痕下部の礫上面の標高はＰ１が11.37mである。

出土遺物

遺物は出土していない。

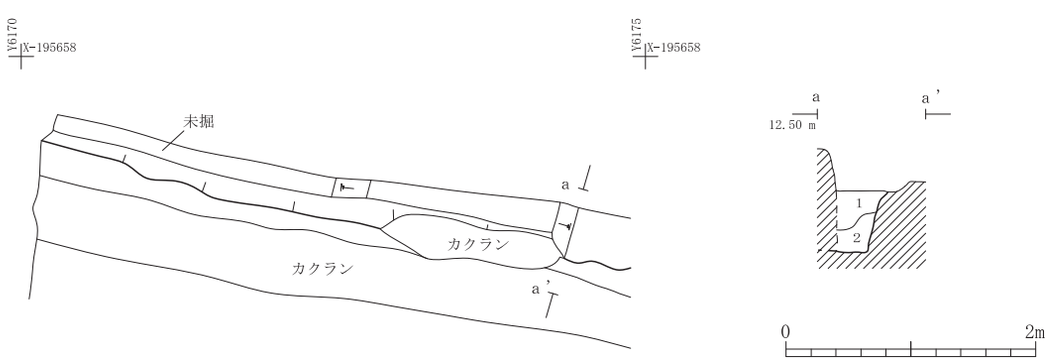
(2) 溝状遺構

Ｖ層上面での溝跡は調査区北端で確認した１条のみで、これまでの調査で多数確認した礎石建物周囲に配置される石組みの雨落ち溝や水路等は確認できなかった。廃城後の御薬園を描いた幾つかの絵図には、城内北半部に鉤型に折れながら西から東へ続く水路が描かれているが、これは今回の調査区まではいたらず、西側で南へ折れており、またこの水路から派生したような溝跡も確認されなかった。今回確認した溝跡については通常の溝跡とは特徴が異なることから、溝状遺構とした。

96号溝状遺構

調査区北端のY75・76・77、X32・33グリッドで検出した東西方向の溝跡で、東西両端は調査区外へ続いている。溝跡は北側に位置する城の北辺土塁と平行した配置にあり、北壁は未確認であるが、土塁の法尻から11.5m程度離れ、東端は東側土塁から12mほど離れている。またＳＡ10北端のＰ１と南壁との距離は6.2m程度である。

溝跡は直線的に延び、確認長は13m、幅は不明で、深さは50㎝である。溝跡南壁でみた方向はＮ－79°－Ｗであり、城の方向と同様である。一部を掘り込んだところ、底面標高は11.40mで、底面は平坦でほぼ水平で、壁面は急角度で立ち上がるものである。堆積土は自然堆積ではなく、人為的に埋め戻されたブロック土であることから、塀の基礎等の可能性があることから溝状遺構とした。しかし掘り込み部分の底面において径30㎝程度のピットを１基のみ確認したが、柱穴かは不明で、掘り込み範囲が狭かったことから他には確認できなかった。



遺　構	層 位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD96	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	径３㎝以内の暗褐色シルトブロックを少量含む	―
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	径10㎝以内の褐色・暗褐色シルトブロックを多量含む	―

第14図　96号溝状遺構

この遺構については断面形状や堆積土が第９次や第10次調査で確認した塀基礎に類似することから塀跡の可能性が高く、また方向が土塁や城施設と同様なことから若林城期の遺構と考えられる。遺物は非ロクロ土師器が出土した。

（3）性格不明遺構

14号性格不明遺構

位置と配置

調査区南端のY74～78、X36～38グリッドで検出した大型土坑群で、張出しの南辺土塁際に位置する。遺構は土坑が東西に３基連続して並ぶ配置で、大きく「西側」「中央」「東側」の窪みに分けることができる。各土坑南端は大規模な撹乱で壊され全体形状や規模は不明であるが、南側の土塁の存在から概ね調査区の中に収まるものとみられる。ＳＸ14の西側には南北に延びるＳＡ10が約3.5mの位置にあり、また北側には東西方向のＳＡ11が約3.2mの位置にあることで土坑を囲むような配置がみられる。東側土坑と張出し東辺土塁の法尻との距離は約4.5mである。

規模と変遷

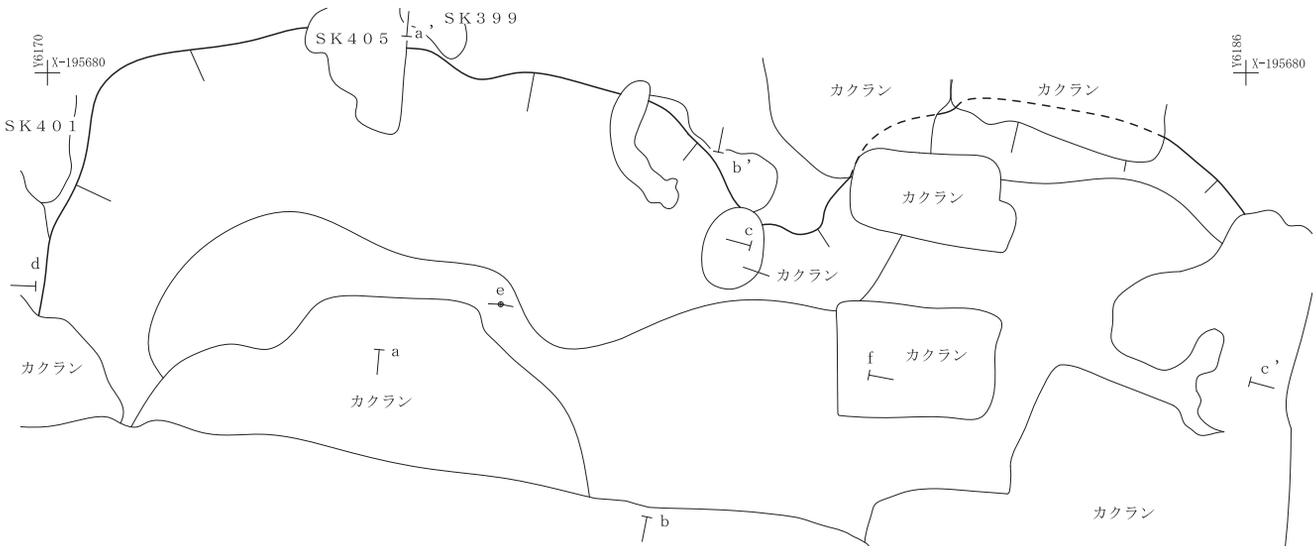
当初、ＳＸ14はⅢ層面で遺構プランを確認したが、撹乱の壁面での断面観察により、プランは後の堆積土の違いによるものであり、遺構自体はⅢ層形成以前のⅤ層面から掘り込まれたものであることが判明した。堆積土は大きく４層に大別される。最上層の１層は基本層のⅢ層が自然流入や人為堆積したもので、多少変質しながら遺構西側で厚く堆積している。２層は中央から東側を中心に人為的に埋め戻したとみられるブロック土で、西側には殆ど存在しない。３層は遺構全体にみられ、遺物や炭化物を多量含む層で、全体に暗褐色となっている。層中にはⅥ層ブロック土を含む数枚の間層を挟むことで、３層は幾度かにわたり堆積し形成された人為堆積層と考えられる。最下層の４層は初めに掘られた土坑の底面部分をブロック土で埋め戻した層である。

掘り込みの結果、ＳＸ14は当初３層上面では東西２つに大きく分かれる不整形な土坑であったが、４層上面においては中央の土坑が分離することで、３基の土坑を掘り込んだものであることが判明した。土坑全体の残存規模は東西16m、南北5.4mである。以下では調査での掘り込み順に従い、土坑群の各時期についてみていく。

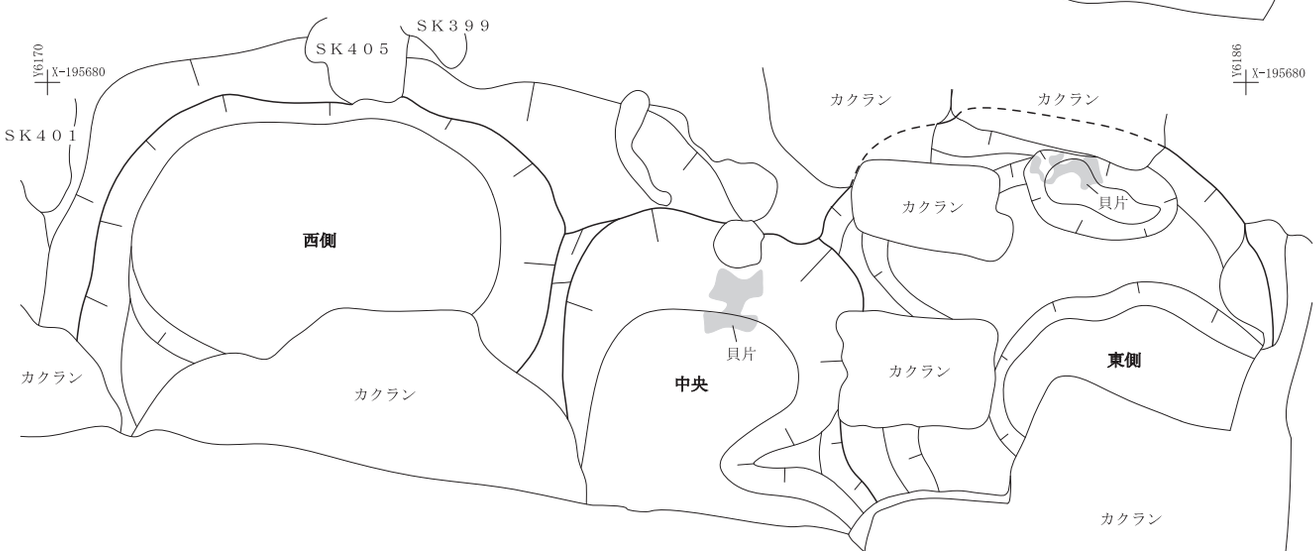
遺構廃絶段階　西側を中心に堆積する１層を掘削すると、ＳＸ14の西側と中央部分はほぼ一体の窪みで確認された。窪みの形状は東西に長い楕円形状であるが、南半部の形状は不明である。残存規模は東西13m、南北５mで、１層を掘削した段階での底面標高は10.9～11.20mである。土坑上半部の壁面は、残存する西側の西壁と土坑全体の北壁全体を通して緩やかに立ち上がる一方、下半部の傾斜は北壁の一部で急角度部分が見られた。底面は南側へ僅かに傾いている。

１層は３つの層に細分され、南側の土坑中心部分の厚い場所では75㎝程度の厚さである。1a層は土坑周辺に存在するⅢ層とほぼ同様の堆積層で、土坑掘削後の近世に形成されたⅢ層が後に自然流入した層と考えられる。1b層は薄く、1a層と比較してブロック土の混入が多い。また1b・1c層中には部分的に礫が多くみられるが、Ⅲ層や1a層ではほとんど確認できないことから、耕作時、Ⅲ層中の礫を土坑内に廃棄したものの可能性がある。

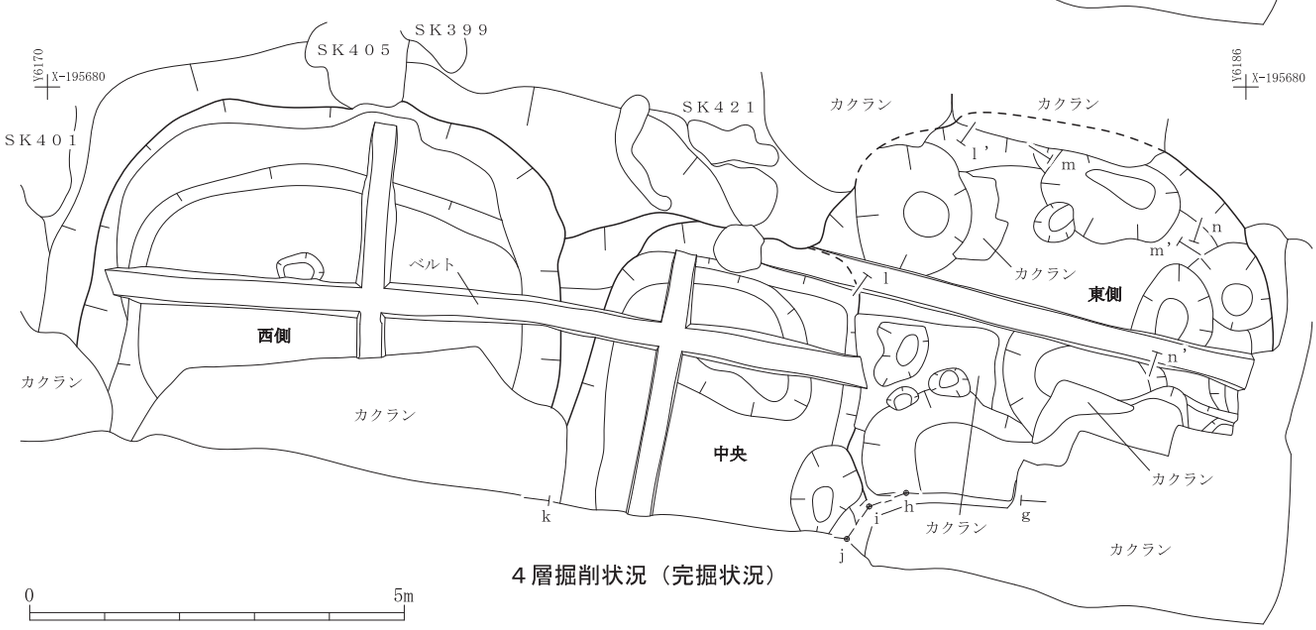
中央から東側にかけて堆積する２層を掘削したところ、土坑は上端に加え下端もまた東西２つの土坑に分離したプランとなった。東西プランの境をみると、下端は西側、中央、東側の３つに土坑状プランに分かれるが、明確ではなかった。各々の形状は西側の壁面が中位で角度は変わるが、全体としては緩く、底面もまた緩やかに南側に窪み、底面標高は11.0～11.20mである。中央部北壁も中位で角度は変わるが、全体としては緩やかな斜面で、底面は同様に南側に傾いている。底面標高は10.86～11.45mである。東側の壁面は急角度で立ち上がり、底面は南東側に傾き、底面標高は11.34～11.50mであり、特に東端の底面が西側土坑と比較して全体的に高くなっている。２層は東側の土坑を中心に埋め戻した人為堆積層とみられ、にぶい黄褐色や褐色ブロックなどの混入割合により５つの層



1層・2層掘削状況（3層上面）

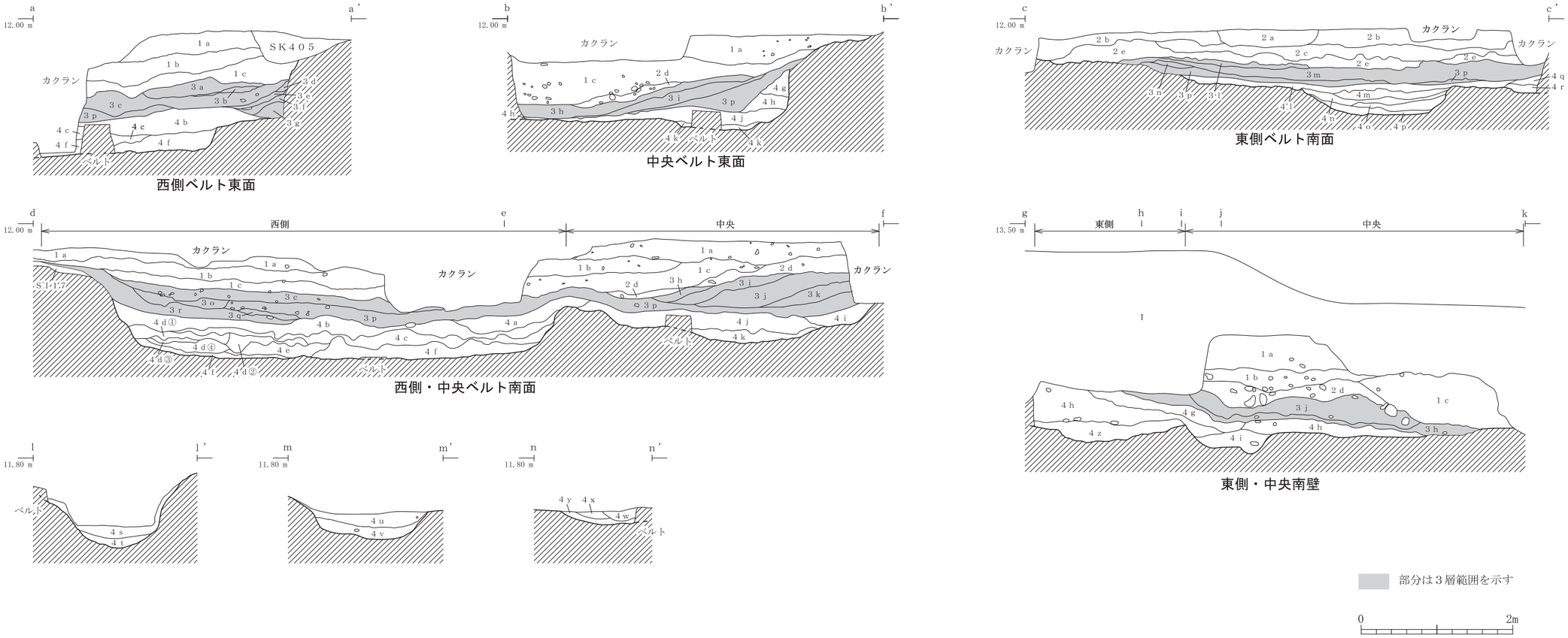


3層掘削状況（4層上面）



4層掘削状況（完掘状況）

第15図　14号性格不明遺構（1）



遺構	層位	土色	土性	特徴	備考
SX14	1a	2.5Y5/2 暗灰黄色	砂質シルト	径３cm以内の明黄褐色シルトブロック、炭化物を微量含む	Ⅲ層類似層
	1b	2.5Y5/2 暗灰黄色	砂質シルト	径３cm以内の円礫を少量、径１cm以内の炭化物を少量含む	
	1c	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	径５cm以内の明黄褐色シルトブロックを多量、径３cm以内の炭化物を含む	
	2a	2.5Y5/2 暗灰黄色	砂質シルト	径10cm以内の円礫を少量、径１cm以内の炭化物を微量含む	埋戻し土
	2b	2.5Y5/2 暗灰黄色	砂質シルト	径１cm以内の炭化物を含む	
	2c	2.5Y5/2 暗灰黄色	砂質シルト	径３cm以内の褐色砂質シルトブロック、径１cm以内の炭化物を含む	
	2d	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	径３cm以内のにぶい黄褐色シルトブロックを多量含む	
	2e	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	にぶい黄褐色シルトブロックを含む	
	3a	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	径１cm以内のにぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量、径５cm以内の炭化物を多量含む	若林城期遺物混入層
	3b	10YR6/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	径３cm以内の褐灰色粘土質シルトブロックを多量、径１cm以内の炭化物を微量含む	
	3c	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	径５cm以内のにぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量、炭化物を密に含む	
	3d	10YR6/6 明黄褐色	砂質シルト	径３cm以内のにぶい黄橙色・にぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量含む	
	3e	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	径３cm以内のにぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量、炭化物を少量含む	
	3f	10YR6/6 明黄褐色	砂質シルト	径３cm以内のにぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量、褐灰色砂質シルトブロックを含む	
	3g	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	径５cm以内のにぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量、炭化物を微量含む	
	3h	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	径３cm以内のにぶい黄橙色シルトブロック、径５cm以内の炭化物を多量含む	
	3i	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	径３cm以内のにぶい黄橙色・黄褐色粘土質シルトブロックを含む	
	3j	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	径３cm以内のにぶい黄橙色・黄褐色粘土質シルトブロックを含む	
	3k	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	径３cm以内のにぶい黄橙色・黄褐色粘土質シルトブロックを含む	
	3l	10YR6/3 にぶい黄橙色	シルト	径１cm以内の褐灰色シルトブロックを含む	
	3m	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	炭化物を多量含む	
	3n	10YR6/3 にぶい黄橙色	シルト	径３cm以内のにぶい黄褐色シルトブロックを含む	
	3o	10YR6/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	径３cm以内の褐灰色シルトブロックを多量、径１cm以内の炭化物を微量含む	
	3p	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	径３cm以内のにぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量、炭化物を少量含む	
	3q	10YR6/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	径３cm以内の褐灰色シルトブロックを多量、径１cm以内の炭化物を微量含む	
	3r	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	炭化物を微量含む	
	4a	2.5Y3/2 黒褐色	シルト	径10cm以内の黄褐色シルトブロックを多量含む	埋戻し土
	4b	2.5Y4/4 オリーブ褐色	砂質シルト	径10cm以内の黒褐色シルトブロックを少量含む	

遺構	層位	土色	土性	特徴	備考
SX14	4c	2.5Y3/2 黒褐色	砂質シルト	径10cm以内のオリーブ褐色シルトブロックを層状に、炭化物を少量含む	埋戻し土
	4d①	2.5Y4/4 オリーブ褐色	砂質シルト	径10cm以内のオリーブ褐色シルトブロックを少量含む	
	4d②	10YR4/1 褐灰色	シルト	径３cm以内の浅黄橙色シルトブロックを少量含む	
	4d③	2.5Y3/2 黒褐色	シルト	径10cm以内の暗灰黄色シルトブロックを含む	
	4d④	2.5Y3/2 黒褐色	シルト	暗灰黄色砂質土を部分的に、炭化物を少量含む	
	4e	2.5Y5/2 暗灰黄色	砂質土		
	4f	2.5Y5/3 黄褐色	砂質シルト	径５cm以内の黒褐色シルトブロックを少量含む	
	4g	2.5Y4/4 オリーブ褐色	シルト	径３cm以内のにぶい黄色シルトブロックを多量含む	
	4h	2.5Y3/2 黒褐色	シルト	径10cm以内の黄褐色シルトブロックを多量含む	
	4i	2.5Y3/2 黒褐色	シルト	径10cm以内の黄褐色シルトブロックを多量含む	
	4j	2.5Y5/3 黄褐色	シルト	径３cm以内の黒褐色シルトブロックを含む　鉄分多く含む	
	4k	2.5Y5/3 黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の黒褐色シルトブロックを含む　下部に鉄分多く含む	
	4l	2.5Y3/2 黒褐色	シルト	径10cm以内の黄褐色シルトブロックを多量含む	
	4m	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	シルト	径20cm以内の黄褐色シルトブロックを多量、径１cm以内の炭化物、焼土を少量含む	
	4n	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	シルト	径５cm以内の黄褐色シルトブロックを少量含む	
	4o	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	シルト	径10cm以内の黄褐色砂質シルトブロックを層状に含む	
	4p	2.5Y5/3 黄褐色	砂質シルト	径５cm以内の黒褐色シルトブロックを少量含む	
	4q	10YR7/4 にぶい黄橙色	シルト	径１cm以内の炭化物を少量含む	
	4r	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	シルト	径20cm以内の黄褐色シルトブロックを多量層状に含む	
	4s	10YR3/2 黒褐色	シルト	径10cm以内のにぶい黄褐色砂質シルトブロック、径１cm以内の炭化物を含む	
	4t	10YR3/2 黒褐色	シルト	径20cm以内のにぶい黄褐色砂質シルト、にぶい黄橙色シルトブロックを多量、炭化物を含む	
	4u	10YR3/2 黒褐色	シルト	径10cm以内のにぶい黄褐色砂質シルトブロック、径１cm以内の炭化物を含む	
	4v	10YR3/2 黒褐色	シルト	径20cm以内のにぶい黄褐色砂質シルト、にぶい黄橙色シルトブロックを多量、径１cm以内の炭化物を含む	
	4w	10YR7/3 にぶい黄褐色	シルト	径５cm以内の褐灰色シルトブロックを少量、径３cm以内の炭化物を微量含む	
	4x	10YR4/1 褐灰色	シルト	径３cm以内の明黄褐色シルトブロック、径１cm以内の炭化物を少量含む	
	4y	10YR4/1 褐灰色	シルト	径１cm以内のにぶい黄橙色シルトブロック、径１cm以内の炭化物を少量含む	
	4z	10YR7/6 明黄褐色	シルト	径５cm以内の褐灰色シルトブロックを多量、径１cm以内の炭化物を微量含む	

第16図　14号性格不明遺構（2）

に細分できる。層厚は東側の厚い部分で50㎝あり、東側が厚く中央に向かって薄くなり、西側土坑部分では確認できなかった。

遺物廃棄段階　１・２層の下位にある３層を掘削すると、プランの西半部の掘り方上端の緩傾斜面の0.4～1.8m程度内側に、明らかに壁面立ち上がりが急角度となる異なった掘込みを確認することで、ＳＸ14は明瞭に西側、中央、東側の３つに分かれる土坑状プランとなった。但し西側土坑の西及び北壁にみられる緩傾斜面については、土坑プランを一回り大きくしたものであり、１～３層の性格と堆積状況からみて、この緩斜面部分は本来の土坑形状が後に耕作等により崩れるなどして広がった状況を示すもので、本来の土坑形状ではないと考えられる。

西側土坑の形状は隅丸長方形か楕円形とみられ、緩斜面を除く残存規模は東西6.1m 、南北4.3mである。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は南西隅の一段高い部分以外はほぼ平坦で、下端は楕円形で全体に南に傾斜し、底面標高は10.65～10.82mである。中央土坑の形状は隅丸長方形に近く、残存規模は東西3.8m、南北４ｍである。壁面は急角度で立ち上がり、底面は南東側の一部が舌状に張出す高まりがあるがほぼ平坦で、全体としては南に傾斜し、底面標高は10.72～10.98mである。東側土坑の形状は残存部分のみからみると円形に近く、残存規模は東西6.2m、南北５ｍである。壁面は急角度で立ち上がり、底面には凹凸があり南東側に傾斜し、底面標高は11.04～11.27mと、４層堆積土上面での標高は東側土坑部分が最も高く、西側土坑部分が低くなっている。また西側と中央との間には幅0.2～0.5mほどの土手状の高まりが残存し、両者の間隔が離れているのに対し、中央と東側との間は近接することで土手状とならず、東側の西端を中央の土坑が掘り込むような形状となっている。西側土坑の壁面上部にみられた緩斜面は中央と東側の土坑には確認できない。

３層は多量の遺物や炭化物等を含む層で、炭化物を多く含む層とⅥ層起源のブロック土を多く含む層等の18層に細分できる。中でも西側、中央、東側の各土坑に共通して堆積する層としては３層の中でも下位に位置する3p層があり、中央、東側では3p層が４層直上に載っている。これに対し西側西壁側では3p層下には3p層下位の間層を挟み、また北壁際では3p層の上位層が４層上面を覆っている。３層の層順については土坑内に広く堆積する3p層に対する上下関係は確認できたが、西側土坑と中央土坑の境には3p層のみが堆積する状況から、3p層以外の3層については３つの土坑間での上下関係の確認は難しい状況にあった。したがって各土坑内における層名は西側、中央、東側各々での付番とした。３層全体での層厚は厚い部分で西側が45㎝、中央が55㎝、東側が30㎝である。３層は全体に壁面から底面にかけて堆積しているが、西側北壁部分では３層が壁面に立ち上がっていない。

ＳＸ14から出土した遺物の大半は３層中のものであり、３層はその混入物からみて城内の廃棄物を捨てた層とみられる。堆積状況から３層は３つの土坑の殆どの範囲に確認でき、西側西壁、北壁全体、そして中央部では東側から３層が傾斜する状況は一方向からのみの廃棄では無かったことを思わせる。また西側底面は北壁側まで3p層で覆われておらず、北壁際の最下部の3d～3g層は炭化物を多く含む層とⅥ層ブロック層が交互に堆積している状況から、廃棄行為は数度にわたり行われたとみられる。さらに3d～3g層を掘り込むような形で3c層が堆積している状況をみると、少なくとも西側は初めに廃棄した土壌を均すなどの３層の移動により本来の堆積状態に手が加えられている可能性がある。これは西側の土坑が調査区の位置する張出し部の入口近くに位置することで、塀の可能性の高いＳＡ10・11がＳＸ14の廃棄段階に同時存在した場合、この土坑は入口に接することで最も廃棄が容易な場所となることによるもので、ＳＸ14の西側に溜まった廃棄物を均し、掘り返すことで廃棄場所を整理していることが考えられる。

土取り穴掘削と埋め戻し段階　３層下の４層を掘り上げると、ＳＸ14はⅥ層を壁面・底面とした掘り方となる。掘り方もまた、同様の３つ土坑の形状を見せ、各々の土坑形状や規模には大きな変化は無いが、底面を中心に小規模な窪みが複数見られる。西側は北壁際にテラスを残し、底面中央部分が大きく楕円形に１段低くなっている。段差は30㎝で底面標高は10.22m程度である。中央の底面は北側と南東側に径2.4mと径1.2mの不整楕円形の窪みが掘ら

れており、窪みの深さは両者とも20㎝である。中央の底面は窪みが無い位置では平坦で標高は10.68m程度である。東側の底面には径0.4～2.2mの大小13か所の不整楕円形の窪みが多数掘られ、窪みは深いもので83㎝もある。窪みが無い位置での底面標高は11.12m程度であり、窪み以外の掘り方底面の標高は東側が高くなっている。東側の底面にみられる窪みについては土坑の下端に沿って周って位置している。

窪みとその上部に堆積する４層はⅥ層とみられる黄褐色や、当時の表土とみられるⅤ層の黒褐色シルトブロックなどの混入割合に加え、シルトや砂質、粘質の違いで26の層に細分でき、西側や中央の最下層はグライ化している。層順は西側の最上層が中央土層よりも後に埋め戻されているのを確認したが、それ以外の細分層の間での上下確認は難しく、西側、中央、東側各々の層の上下に従い付番した。４層の層厚は底面の窪み以外の場所での厚い部分で、西側が56㎝、中央が20㎝、東側が10㎝と西側がかなり厚くなっている。また４層は壁面では中央北壁で中位まで埋め戻されているのを確認したが、西側や東側では壁面までの立ち上がりはほとんど確認できず、ほぼ平坦な堆積状況をみせている。このことから４層は初めて土坑を掘り込んだ直後に、掘削土のⅥ層や当時の表土層と考えられるⅤ層を土坑内へ再び埋め戻し、敷き均した層の可能性がある。

各土坑掘り方の残存状況等から推定すると、ＳＸ14の掘り込み自体は東側が最初で、続いて中央、西側の順であるとみられる。各掘り方の形状や規模、そして底面に残る規格性の無い窪みの存在から推定した場合、ＳＸ14は当初、何らかの目的によりこの場所を掘削することで土取りし形成された土坑の可能性が高い。３層の存在からはこの土坑が直後に整備された上、新たに生活用品や食物残滓、そして炭化物等を廃棄するためのゴミ穴として再利用したと考えられる。

出土遺物

遺物は陶器、磁器、瓦質土器、土師質土器皿や焼塩壺、瓦、金属製品、石製品などの他、獣骨や貝殻などの自然遺物が出土した。出土量は接合前で7,705点に及び、本調査の遺物出土量（10,219点）の75.3％を占める。これらの遺物の時期は、若干の例外はあるものの、主に磁器や陶器などの検討から大部分の遺物は16世紀末から17世紀前半の間に求められる。なお採取した土壌からはモモの炭化核やオオムギ、魚類の骨などの食物残滓が検出された。

遺物の出土位置は３つの土坑内にほぼ偏り無く確認できたもので、西側の土坑から4,292点（56.0％）、西側もしくは中央から759点（9.9％）、中央から1,013点（13.2％）、東側から1,593点（20.8％）が出土し、中でも面積の広い西側からが最も多い。ＳＸ14西側は北辺と西辺、中央・東側は北辺の傾斜面から底面にかけての分布が密である。ＳＸ14西側や東側の南部は撹乱を受けていることも影響していると考えられるが、遺物の廃棄は張出し入り口に近い北側や西側から行われていたと考えられる。遺物の種別による分布傾向の違いは顕著には認められないが、西側と中央、東側の各種別の出土点数の比率はおおよそ２：１：１から３：1：１の間であるが、磁器と陶器については約10：２：1となり、西側からの出土が際立っている。

４つの大別層ごとでみると、出土層位を把握できたもののうち１層中から出土したものは510点（6.7％）、２層中からは383点（5.0％）、３層中からは6,657点（86.9％）、４層中からは113点（1.5％）で、大多数の遺物が炭化物と共に３層中から出土している。３層中の主な遺物の量や比率をみると、磁器が85点（1.3％）、陶器が168点（2.5％）、土師質土器皿が5,004点（75.7％）、焼塩壷が590点（8.9％）、鉄釘192点（2.9％）、その他の金属製品が148点（2.2％）、瓦が303点（4.6％）である。量的には土師質土器の皿の出土量が多く、第８次、第９次調査と比較して若林城期の瓦が極めて少ない傾向がある。

３層中での細別層ごとの出土傾向をみると、3p層、3r層といった下位層から出土した個体が88.5％を占めている。両層は特に炭化物を多量に含む層である。３層中出土の土師質土器皿や焼塩壷の破片の中には、西側と中央や中央と東側のように隣接した場所に加え、西側と東側から個別に出土した個体の接合を十数件把握できた。これについては出土点数に対する例の少なさや廃棄後の人為的作用による遺物移動の可能性も考えられるが、遺物の廃棄段階

3層中種類別遺物出土状況

凡　例		
●	土師質土器	皿・耳皿
○	土師質土器	焼塩壷
□	瓦	軒丸瓦・平瓦・丸瓦・菊丸瓦・輪違い・面戸瓦
▲	磁器	碗・皿・鉢・小杯など
	陶器・瓦質土器	碗・皿・鉢・擂鉢など
×	金属製品	鉄釘・銭・煙管など
△	その他の遺物　（土師器・須恵器・漆器・骨など）	

0　2m

第17図　14号性格不明遺構（3）

においては３つの土坑が同時に開口していた可能性と、管理されながらの複数に渡る投棄の在り方を示唆するものと考えられる。

（4）土坑

Ｖ層上面では土坑を調査区のほぼ全面で確認しており、形状は不整形のものが多い。土坑としたものには基本的にＶ層や下層遺構の堆積土を掘り込み、独自の堆積土が入るもの以外に、Ⅲ層に類似した層が入るものがある。またＶ層が確認できない部分で検出したものについてはⅥ層上面の遺構とした。土坑はその性格の判断できるものは殆ど無く、これまでの調査で数多く見られたような耕作時に支障となる礫や瓦片を集め廃棄した土坑も確認できなかった。特徴的な土坑としてはＳＫ406・407・409のように広範囲にブロック土を含むものがあるが、いずれも形状が不整形で底面に凹凸があるため、これらは耕作に伴い深く撹拌された部分である可能性がある。また土坑の中にはⅢ層が残存していない場所にありながらも堆積土にⅢ層類似層を含むものもあることから、これらは本来Ⅲ層上面で検出されるべき遺構の可能性がある。

399号土坑

Y75・76、X36グリッドで検出し、ＳＫ397より古く、北側を撹乱で壊され、形状は不整形とみられる。残存規模は長軸1.3m、短軸0.83m、深さ31㎝である。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は西側の一部が低くなっている。堆積土は３層に分かれ、１層はブロック土を含むⅢ層類似層である。断面ではこの１層が２・３層を掘り込むような堆積状況が見られる事から、２つの土坑が重複している可能性もある。遺物は非ロクロ土師器が出土した。

401号土坑

Y74・75、X36・37グリッドで検出し、ＳＫ395より古く、南側はⅢ層が落ち込んで堆積することから形状は不明である。残存規模は長軸、短軸ともに1.56m、深さ25㎝である。壁面は緩やかに立ち上がり、底面の東壁際には浅い窪みがある。堆積土はブロック土を含むⅢ層類似層の単一層である。遺物は平瓦、非ロクロ土師器が出土した。

403号土坑

Y75、X32・33グリッドで検出し、西側は調査区外へと続き、形状は不整形である。残存規模は長軸1.65m、短軸0.83m、深さ15㎝で、主軸方向はＮ－78°－Ｗである。残存部分での壁面は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。堆積土には下層の竪穴住居跡の堆積土由来とみられる炭化物や焼土が含まれる。遺物は鉄釘が出土した。

404号土坑

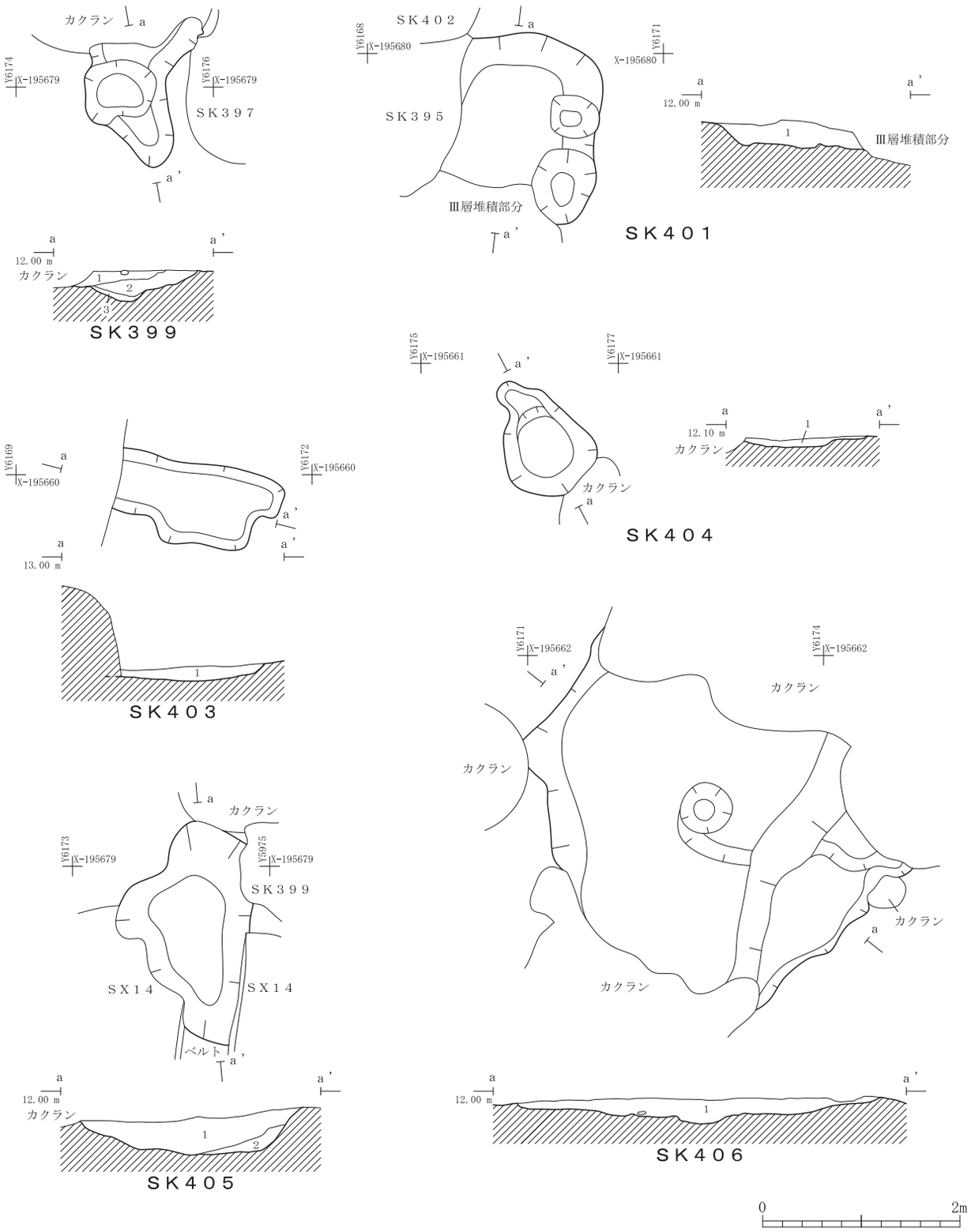
Y76、X33グリッドで検出し、南東側を撹乱で壊され、形状は不整形である。残存規模は長軸1.29m、短軸0.92m、深さ８㎝で、主軸方向はＮ－34°－Ｗである。残存部分での壁面は緩やかに立ち上がり、底面は南東側が１段下がっている。堆積土はⅢ層類似層の単一層である。遺物は鉄釘が出土した。

405号土坑

Y75、X36・37グリッドで検出し、ＳＸ14より新しく、ＳＫ399より古く、北側を撹乱で壊され、形状は不整形である。残存規模は長軸2.27m、短軸1.39m、深さ39㎝である。壁面は北側が緩やか、南側は比較的急な角度で立ち上がり、底面には多少の凹凸がある。堆積土はブロック土による単一層である。遺物は非ロクロ・ロクロ土師器が出土した。

406号土坑

Y75、X33・34グリッドで検出し、南側と北側を撹乱で大きく壊されているため、形状は不明である。残存規模は長軸3.66m、短軸2.96m、深さ24㎝である。壁面は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸があり、南東側が１段高くなっている。堆積土はＶ層を主体としたブロック土による単一層である。浅く広範囲にわたる土坑で、不整形であることから、耕作により生じた痕跡とみられる。遺物は非ロクロ土師器が出土した。



遺　構	層 位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SK399	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径10cm以内の黒褐色シルトブロック、径５cm以内の焼土ブロックを少量含む	―
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径10cm以内のにぶい黄褐色シルトブロックを含む	―
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト		―
SK401	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の褐色シルトブロックを含む	―
SK403	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫、径１cm以内の炭化物、焼土を少量含む	―
SK404	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫、径１cm以内の炭化物を微量含む	―
SK405	1	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	径３cm以内の明黄褐色砂質シルトブロック、径１cm以内の炭化物を含む	―
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	径20cm以内の褐色・暗褐色シルトブロック、径１cm以内の炭化物を含む	―
SK406	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	径10cm以内の黒褐色シルトブロックを多量、径10cm以内の円礫を微量含む	―

第18図　土坑（1）

407号土坑

Y74・75、X35・36グリッドで検出し、ＳＫ394・396、Ｐ１・２より古く、西側と北東側を撹乱で壊され、形状は不整形である。残存規模は長軸3.92m、短軸2.4m、深さ49㎝である。北壁は緩やかに立ち上がるが、南壁は底面から中位までは急角度なのに対し、中位より上は大きく広がっている。底面には凹凸があり、根跡の小穴が見られる。堆積土はブロック土による４層に分かれ、最上層の１層が３・４層を掘り込むような状況もみせており、３・４層部分と１・２層部分とは別遺構の可能性もある。遺物は陶器、非ロクロ・ロクロ土師器、須恵器が出土した。

408号土坑

Y76・77、X34グリッドで検出し、南側を撹乱で壊されているため、残存が極めて悪く、形状は不明である。残存規模は長軸2.26m、短軸0.27m、深さは６㎝と浅い。壁面は急角度で立ち上がり、底面は平坦である。堆積土はブロック土を含むⅢ層類似層の単一層である。遺物は非ロクロ・ロクロ土師器が出土した。

409号土坑

Y76・77、X33・34グリッドで検出し、ＳＫ398・408、Ｐ３・４より古く、南西側を撹乱で大きく壊され、形状は不整形である。残存規模は長軸5.83m、短軸4.25mと大きい反面、深さは16㎝と浅い。壁面の残存が悪いため立ち上がり不明であるが、底面の凹凸が顕著である。堆積土はⅢ層類似層のブロック土を含む単一層で、Ⅲ層耕作に伴うものの可能性が高い。遺物は陶器、磁器、土師質土器、非ロクロ・ロクロ土師器、須恵器が出土した。

411号土坑

Y76、X33グリッドで検出し、東側と南側と北側を撹乱で壊されているが、形状は楕円形とみられる。残存規模は長軸1.84m、短軸0.83m、深さ46㎝で、主軸方向はＮ－81°－Ｗである。壁面は急角度で立ち上がり、底面は平坦で径20㎝の扁平な円礫が１石ある。堆積土は埋め戻し土とみられるブロック土と炭化物を含むややグライ化した土層の単一層である。ＳＫ411は塀跡の可能性があるＳＤ96とほぼ平行し、ＳＤ96南壁と底面円礫の距離は1.2mである。柱穴は確認できなかったが、底面円礫が礎石の可能性があり、ＳＤ96との位置関係からＳＫ411はＳＤ96の控柱跡の可能性もある。遺物は丸瓦、軒平瓦、須恵器、鉄釘、その他鉄製品が出土した。

412号土坑

Y77、X36グリッドで検出し、西側を撹乱で壊され、形状は不整形である。残存規模は長軸0.89m、短軸0.65m、深さ９㎝で、主軸方向はＮ－53°－Ｅである。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は南西側が１段低くなる。堆積土はブロック土と炭化物を含むややグライ化した土層の単一層である。遺物は非ロクロ土師器、鉄釘が出土した。

413号土坑

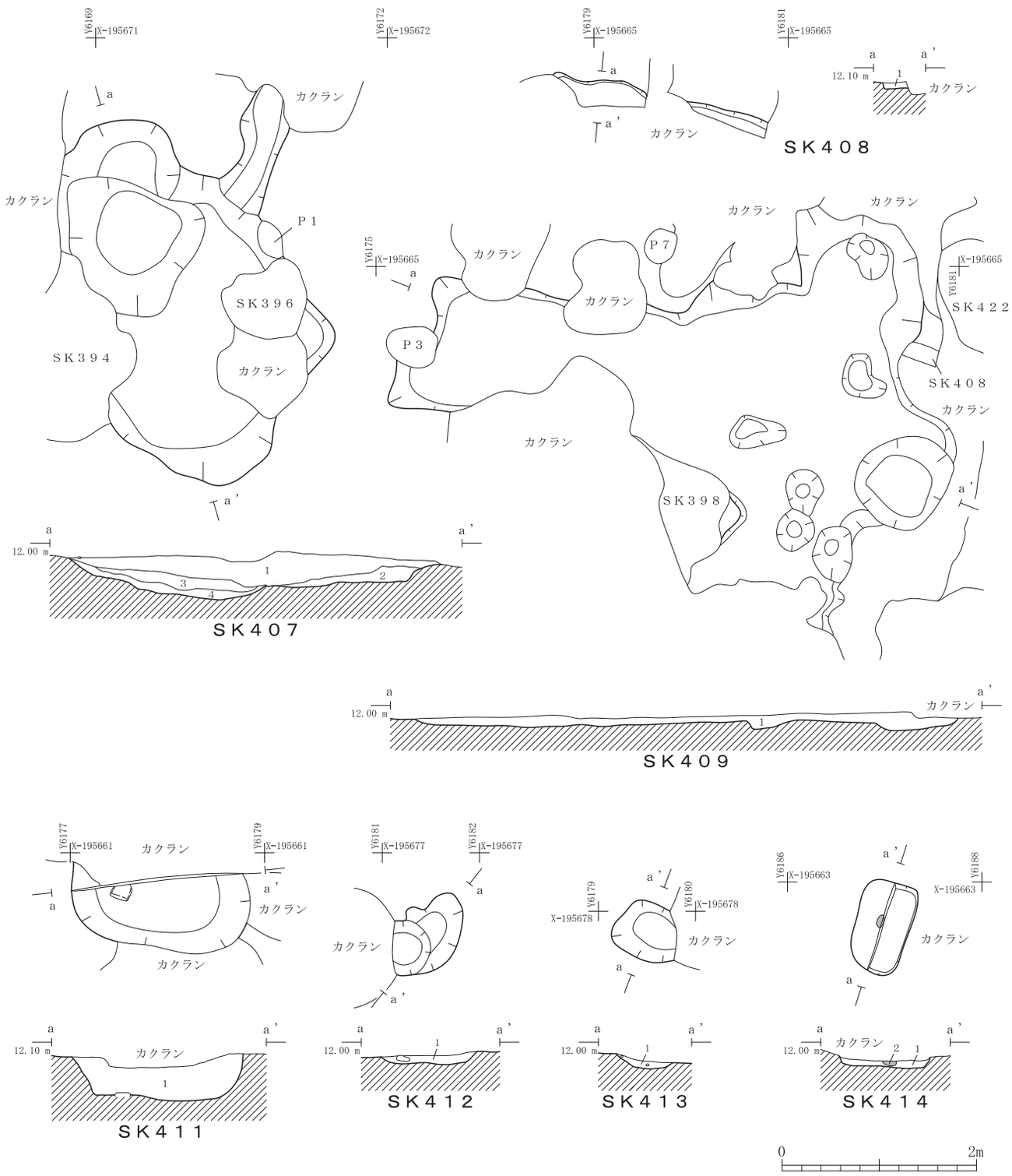
Y76、X36グリッドで検出し、東側を撹乱で壊され、形状は不整円径である。残存規模は長軸0.7m、短軸0.56m、深さ29㎝である。残存する壁面は緩やかに立ち上がり、底面は狭いが平坦である。堆積土はブロック土である。遺物は出土していない。

414号土坑

Y78、X33グリッドで検出し、上面全体を撹乱で壊されている。形状は隅丸長方形で、規模は長軸0.96m、短軸0.58m、深さ11㎝で、主軸方向はＮ－18°－Ｅである。壁面は急角度で立ち上がり、底面は平坦で水平である。断面中央に径0.14m、深さ９㎝の柱痕跡とみられる円形プランを検出した。掘り方埋土の可能性のある１層はブロック土を少量含み、柱痕跡はやや明るいブロック土である。この土坑は柱穴の可能性があるが、他の柱穴よりも極端に浅いものである。遺物は出土していない。

415号土坑

Y76・77、X34・35グリッドで検出し、東側と北西側を撹乱で壊されている。形状は他と比較して形状の整った長方形で、長軸1.93m、短軸1.37m、深さは４㎝と浅く、主軸方向はＮ－４°－Ｅである。残存が悪く立ち上がりは



遺　構	層 位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SK407	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	径５cm以内の褐色・黒褐色シルトブロックを多量含む	―
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	径５cm以内の褐色・黒褐色シルトブロックを少量含む	―
	3	10YR4/6 褐色	シルト	径10cm以内の暗褐色シルトブロックを含む	―
	4	10YR3/4 暗褐色	シルト	径５cm以内の褐色・黒褐色シルトブロックを少量含む	―
SK408	1	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	径３cm以内の黄褐色砂質シルトブロック、円礫を少量含む	―
SK409	1	2.5Y5/1 黄灰色	砂質シルト	径３cm以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロックを少量含む	―
SK411	1	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	径３cm以内の明黄褐色砂質シルトブロックを少量含む	―
SK412	1	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の円礫を少量、径１cm以内の炭化物を微量含む	―
SK413	1	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	径３cm以内の褐灰色砂質シルトブロックを少量含む	―
SK414	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	径３cm以内の褐色シルトブロックを多量、下部に炭化物を含む	掘り方埋土
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	径３cm以内の褐色シルトブロックを少量含む	柱痕跡

第19図　土坑（2）

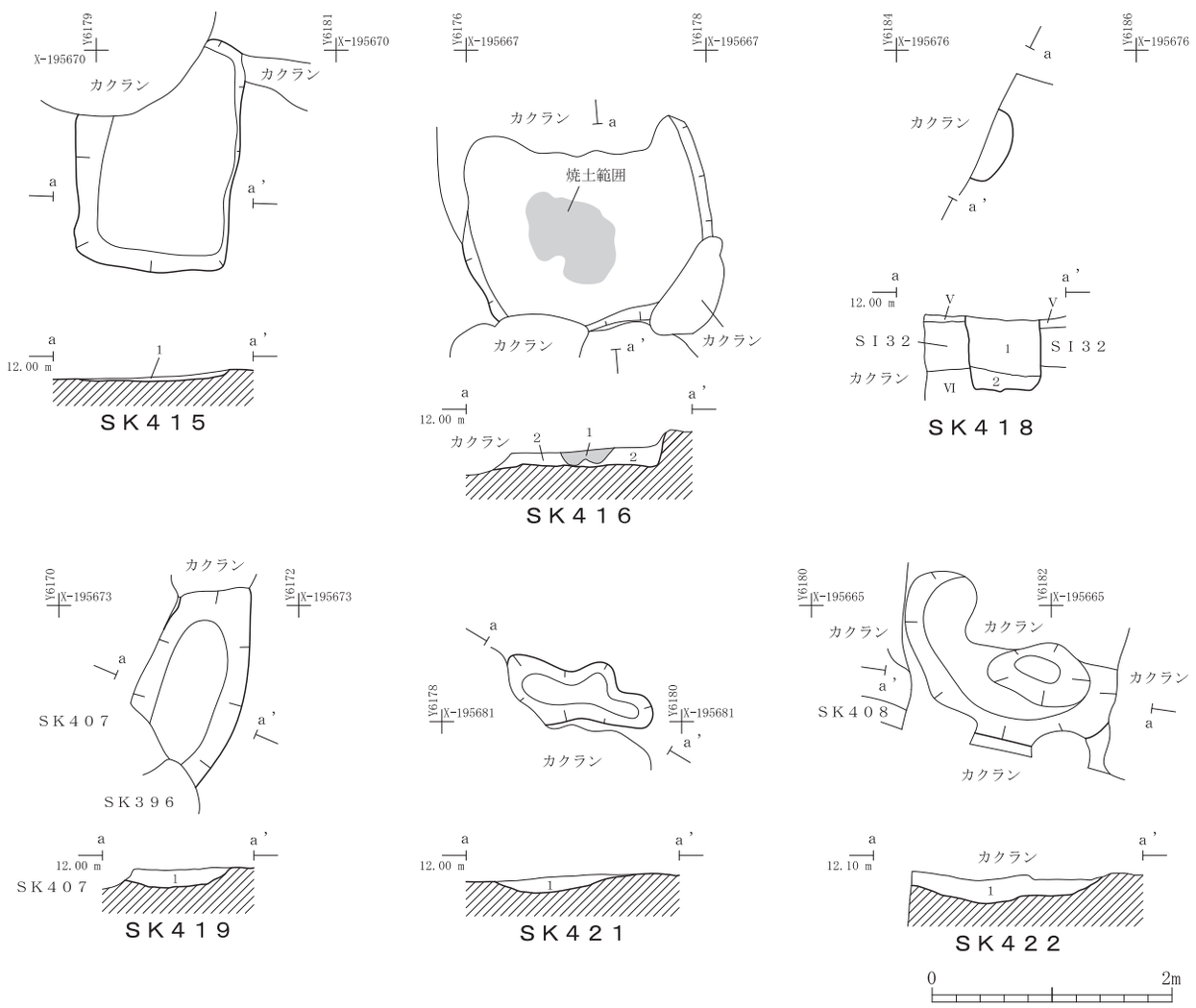
不明で、底面は平坦で水平である。堆積土は砂質シルトの単一層であり、上面に堆積するⅢ層との境には砂粒を多く含んでいる。遺物は出土していない。

416号土坑

Y76、X34グリッドで検出し、南西側、南東側、北側を撹乱で壊されているが、形状は隅丸の方形とみられる。残存規模は長軸2.05m、短軸1.49m、深さ29㎝である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で水平である。堆積土は１層が焼土面であり、２層がブロック土である。焼土面の存在により当初は竪穴住居跡のカマドを想定したが、確認レベルが高く、２層のしまりが悪いことから土坑とした。遺物は陶器、瓦、非ロクロ・ロクロ土師器、須恵器、鉄釘が出土した。

418号土坑

Y77、X36グリッドで検出し、西側を撹乱で壊され、わずかな残存のため形状は不明であるが、円形か楕円形と



遺　構	層 位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SK415	1	2.5Y5/1 黄灰色	砂質シルト	径１cm以内の炭化物を少量含む	―
SK416	1	5YR3/4 暗赤褐色	シルト	径５cm以内の黄褐色シルトブロックを含む	焼土
	2	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	径３cm以内の明黄褐色砂質シルトブロックを含む	―
SK418	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	径10cm以内の黄褐色シルトブロックを少量含む	―
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物を多量含む	―
SK419	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	径５cm以内の黒褐色シルトブロックを少量含む	―
SK421	1	10YR4/4 褐色	砂質シルト	径５cm以内の暗褐色シルトブロックを多量含む	―
SK422	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	径５cm以内の褐色・黒褐色シルトブロックを多量含む	―

第20図　土坑（3）

みられる。残存規模は長軸0.62m、短軸0.21m、深さ６㎝である。壁面は直立し、底面には多少の凹凸がある。堆積土はブロック土の２層に分かれ、下層はⅥ層ブロックを上層よりも多く含んでいる。掘り込んでいないために遺物は出土していない。

419号土坑

Y75、X35グリッドで検出し、ＳＫ396・407より古く、北側を撹乱で壊されているが、形状は楕円形とみられる。残存規模は長軸1.71m、短軸0.87m、深さ14㎝である。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は中央部が深くなる。堆積土はブロック土を含むⅢ層類似層の単一層である。遺物は非ロクロ土師器、須恵器が出土した。

421号土坑

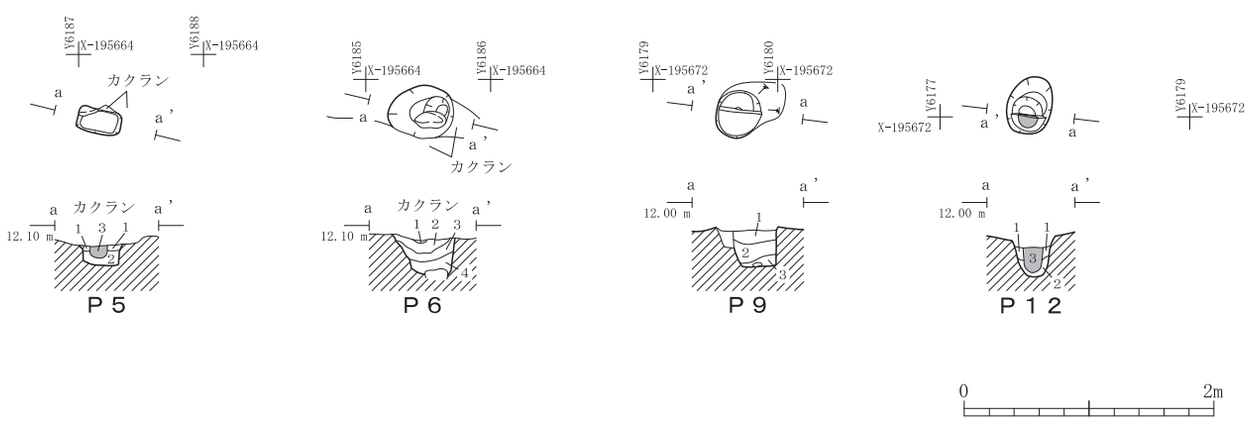
Y76、X37グリッドで検出し、形状は不整形である。残存規模は長軸1.23m、短軸0.48m、深さ12㎝で、主軸方向はＮ－78°－ＥＷである。壁面は全体に緩やかに立ち上がり、底面は狭いが平坦である。堆積土はブロック土を含むⅢ層類似層の単一層である。検出状況ではＳＸ14より古いとみられたが、堆積土からみてＳＸ14の１層が堆積する以前に掘り込まれた土坑とみられる。遺物は出土していない。

422号土坑

Y77、X33・34グリッドで検出し、東側、西側、南側、北側を撹乱で壊されているため、形状は不明である。残存規模は長軸２m、短軸0.95m、深さ20㎝である。壁面は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸があり、一部ピット状に深くなっている。堆積土はⅢ層類似層ブロックを含むブロック土の単一層である。遺物は出土していない。

(5) ピット

Ⅴ層上面ではピットを調査区全体でまばらに９基を確認しているが、南端部でＳＸ14の周辺には確認できない。形状は円形や楕円形のものが多く、径は0.27～0.58m、深さは６～30㎝であり、堆積土はⅢ層類似層かブロック土によるものが多い。ＳＫ407・409と重複するＰ１～４は堆積土がⅢ層類似層であり、一部の土坑同様に耕作に関わるものの可能性が高い。柱痕とみられるものを確認したＰ５・12はＳＡ11の柱穴よりはやや小規模であり、深さも



遺　構	層 位	土　色	土　性	特　徴	備　考
P5	1	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	径１㎝以内の黒褐色シルトブロックを少量含む	掘り方埋土
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径１㎝以内の黒褐色シルトブロックを多量含む	掘り方埋土
	3	10YR3/4 暗褐色	シルト	径５㎝以内の黒褐色シルトブロックを含む	柱痕跡
P6	1	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト		―
	2	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	径３㎝以内の明黄褐色砂質シルトブロックを含む	―
	3	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	径５㎝以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロックを多量含む	―
	4	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	径１㎝以内のにぶい黄橙色砂質シルトブロックを微量含む	―
P9	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	径５㎝以内の褐色砂質シルト・黒褐色シルトブロックを多量含む	―
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	径３㎝以内の褐色シルトブロックを少量含む	―
	3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	径３㎝以内の褐色シルトブロック、径10㎝以内の円礫を少量含む	―
P12	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	径３㎝以内の暗褐色シルトブロックを含む　炭化物を多量含む	掘り方埋土
	2	10YR3/4 黒褐色	シルト	径５㎝以内の灰黄褐色シルトブロックを多量含む	掘り方埋土
	3	10YR4/4 褐色	砂質シルト	径10㎝以内のにぶい黄橙色・黒褐色シルトブロックを多量含む	柱痕跡

第21図　ピット

浅い。Ｐ５の西へ1.74m離れたところにＰ６を、Ｐ12の東に2.01m離れたところにＰ９を確認しており、２基のピットを結ぶ軸はそれぞれＮ－79°－Ｗ、Ｎ－81°－Ｗとなり、若林城跡の東西軸とほぼ同様である。これらのピット群はＳＡ11同様に２基により構成された塀跡の一部の可能性もあるが、これ以上の東西への延びは確認できなかった。また若林城跡と軸方向が同様であることから、遺構の時期は若林城期かそれ以降とみられ、塀跡のＳＡ10～14以外にも、別の塀跡などの簡易な構築物が存在した可能性もある。

遺　構	検出地区		平面形状	規模（m）			土　色	土　性	特　徴
				長軸	短軸	深さ			
SK402	Y74	X36	不明	1.82	0.97	0.11	10YR6/4　にぶい黄褐色	砂質シルト	径３㎝以内の褐灰色粘土質シルトブロックを多量含む
SK420	Y78	X36	隅丸方形	0.69	0.53	－	10YR3/3　暗褐色	シルト	径５㎝以内の褐色シルトブロック、径１㎝以内の炭化物を少量含む
P1	Y75	X35	不明	0.41	0.13	0.10	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径１㎝以内の炭化物を少量、径５㎝以内の小礫を少量含む
P2	Y75	X35	楕円形	0.45	0.34	0.05	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	径２㎝以内のにぶい黄褐色粘土質シルトブロックを多量含む
P3	Y76	X34	不整形	0.52	0.43	0.28	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	径２㎝以内の黄褐色砂質シルトブロック、径0.5㎝以内の炭化物を微量含む
P4	Y76	X34	円形	0.27	－	0.06	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径３㎝以内のにぶい黄褐色砂質シルトブロック、径５㎝以内の炭化物を微量含む
P28	Y77	X36	不整楕円	0.58	0.37	－	10YR3/4　黒褐色	シルト	径３㎝以内のにぶい黄褐色砂質シルト・黒褐色シルトブロックを多量含む

※ 規模は残存値

第３表　その他のＶ層上面検出遺構一覧

第４節　Ⅵ層上面の遺構

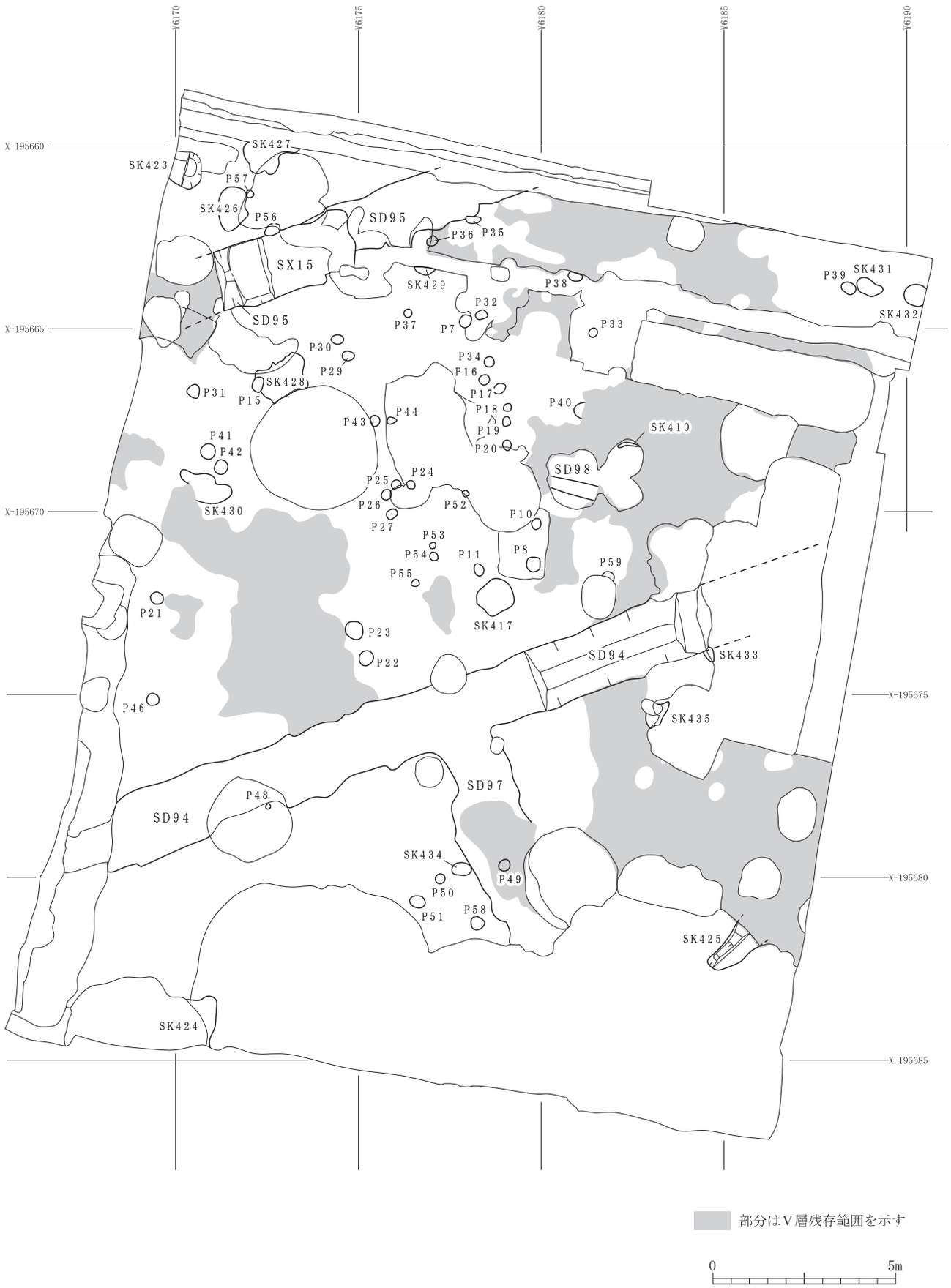
Ⅵ層上面では竪穴住居跡20軒以上、溝跡４条、溝跡内に重複して掘り込まれた性格不明遺構１基、土坑、ピットを確認した。Ⅵ層上面で確認した遺構は基本的には掘り込みを行わないため、上面を覆うＶ層が後世の耕作や撹乱により失われた部分でのみ平面的な確認を行った。また堆積土の状況は平面的な観察の他に数多くの撹乱の壁面を利用して観察した。遺構を概観すると、確認遺構中では最も古い竪穴住居と、竪穴住居跡を壊して掘り込んだ３条の溝跡、性格不明遺構、土坑、ピットに時期的に分けられ、Ⅵ層上面検出の遺構は大きく２時期の遺構群があるとみられ、さらに後者は性格不明遺構と溝跡の時期に細分できると考えられる。但し竪穴住居跡の堆積土上面で確認した土坑や柱穴については、Ｖ層が失われているため不明であるが、本来Ｖ層上面で確認される遺構も含まれている可能性もある。

（1）溝跡

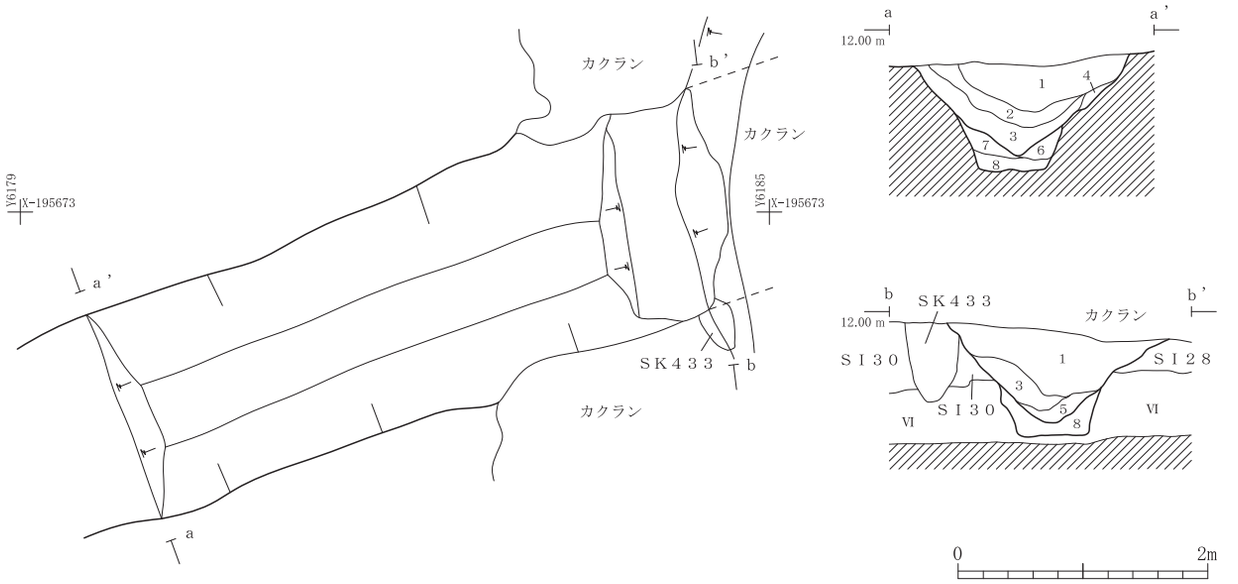
Ⅵ層上面で検出した溝跡は４条である。これらの溝跡は若林城跡とは遺構軸が全く異なり、特にＳＤ94・95・97については明らかにＶ層下での確認のため、若林城以前に機能した溝と考えられる。

94号溝跡

Y74・75・76・77・78、X35・36グリッドで検出した南西－北東方向の溝跡で、重複する全ての竪穴住居跡より新しい。西端は撹乱で壊されているが、調査区外へ延びるとみられ、東端も調査区外へと続いている。形状は直線的に延び、確認長は22.2m、掘り方幅は1.74～1.97m、深さは91～93㎝で、軸方向はＮ－69°－Ｅである。溝跡の東半部の一部を掘削したところ、壁面は底面から中位までは急角度で立ち上がり、中位からは上は大きく開く形状である。底面は平坦で、底面標高は西側断面部分で10.86m、東側断面部分で10.99mと東側の底面が高くなっている。また底面で半円形の道具痕跡を確認している。堆積土の最上層はブロック土による人為的埋め戻し土で、その下はブロックを含むシルト層と砂質シルト層からなり、底面近くはグライ化し砂を含んでいる。３層と５層の下面をみると、下位の６～８層をＶ字形に掘り込んでいることから、ＳＤ94は当初壁面が急角度で立ち上がる溝であったものが、埋没過程で深さ80㎝とやや浅い溝を開削し直したとみられる。また最上層がブロック土であることから掘り直し後の溝が埋没した後に、最終段階で埋め戻されたと考えられる。遺物は陶器、非ロクロ・ロクロ土師器、須恵器が出土した。陶器は在地の甕で13世紀後半～14世紀前半のものである。



第22図　Ⅵ層上面遺構配置図



遺　構	層 位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD94	1	10YR3/1 黒褐色	シルト	径10㎝以内のにぶい黄褐色・灰黄褐色シルトブロックを多量含む　径１㎝以内の炭化物を含む	―
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	径１㎝以内の黒褐色シルトブロックを少量含む	―
	3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	径10㎝以内のにぶい黄褐色・黒褐色シルトブロックを多量含む	―
	4	10YR4/4 褐色	砂質シルト	径10㎝以内の灰黄褐色シルトブロックを含む	―
	5	10YR3/3 暗褐色	シルト	径５㎝以内の灰黄褐色シルトブロックを含む	―
	6	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	灰黄褐色シルト層状に入る	―
	7	10YR4/2 灰黄褐色	粘質シルト	にぶい黄褐色砂質シルト層状に入る	―
	8	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	径10㎝以内の灰黄褐色・黒褐色シルトブロックを含む	―

第23図　94号溝跡

97号溝跡

Y76・77、X36・37グリッドで検出した南東－北西方向の溝跡で、竪穴住居跡より新しく、北側でＳＤ94とほぼ直角に接続していることから、ＳＤ97とＳＤ94は同時に機能した一連の溝と考えられる。南端はＳＸ14に壊されている。確認長は6.4m、掘り方幅は1.56～2.0m、掘り込んでいないため深さは不明である。軸方向はＮ－20°－Ｗである。堆積土の最上層はＳＤ94同様にブロック土層で、上部をＶ層が覆っている。ＳＸ14の壁面で確認したＳＤ97はＳＤ94に比べ浅く、底面標高は11.57mである。断面形状は壁面は急角度で開き、底面は平坦で東側に傾いているものとみられる。掘り込みを行っていないため遺物は出土していない。

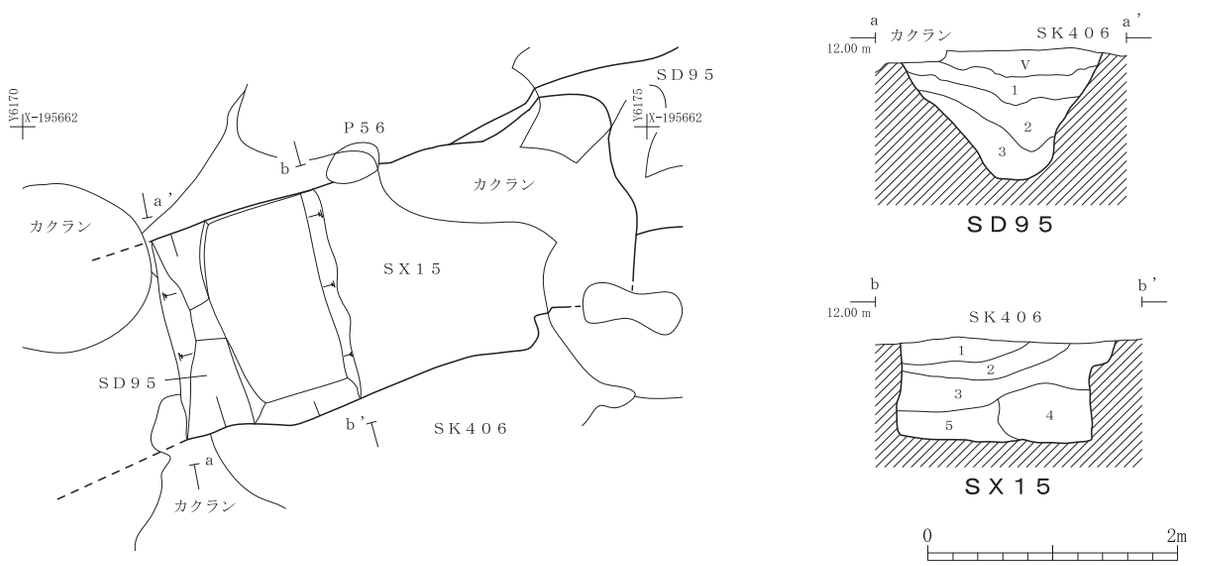
95号溝跡

Y75・76、X33グリッドで検出した南西－北東方向の溝跡で、竪穴住居跡より新しく、ＳＸ15よりも古く、西端と東端は撹乱で壊されているが、調査区外へ延びるとみられる。形状は直線的であり、確認長は8.8m、掘り方幅は1.61m、深さは103㎝である。軸方向はＮ－69°－Ｅと、ＳＤ94と同一でほぼ並行関係にある。一部を掘り込んだ結果、南壁は大きく開き、北壁は底面から中位までは急角度で立ち上がり、中位から上は大きく開いている。底面は平坦で、底面標高は10.86mである。堆積土の最上層にはＶ層が入り込み、溝が完全に埋没する前にＶ層が形成されたと考えられる。下には２層の人為的な埋め戻し土とみられるブロック土層が堆積し、３層は砂質シルト層で底面付近はグライ化し、粘質土が混じっている。２層は砂質シルト層である３層をＶ字形に掘り込んでいることから、ＳＤ94同様に掘り直した可能性もある。ＳＤ95はＳＸ15よりも底面標高がやや高く、またＳＸ15底面にはＳＤ95の底面痕跡が完全に残っていないことから、ＳＤ95は東側の底面が高く、ＳＤ94同様に東から西へ傾斜しているとみられる。ＳＤ94とＳＤ95は13.3m離れており、堆積土の状況や方向からみても同時期に存在した一連の遺構と考えられる。遺物は鉄製品が出土した。

（2）性格不明遺構

15号性格不明遺構

Y75、X33グリッドで検出した遺構で、ＳＫ406より古く、ＳＤ95より新しく、北東側を撹乱で壊されている。ほぼＳＤ95と重なって検出したが、溝跡より僅かに幅が広く、東側ではＳＤ95とずれている。形状は形状の整った隅丸長方形で、残存規模は長軸3.42m、短軸1.8m、深さ82㎝で、主軸方向はＮ－70°－Ｅであり、ＳＤ95とほぼ同様である。当初はＳＤ95との区別ができなかったことから、遺構西側を同時に掘り込んだ。壁面は全周してほぼ垂直に立ち上がり、隅部が明瞭で、南壁の上位には段が付いている。底面は平坦で、底面標高は10.90mである。堆積土は全てブロック土による埋め戻し土で、褐色、暗褐色、黒褐色シルトから成るブロック土の５層に分かれる。堆積土は一時期に埋められたと見られ、底面では掘削時の道具痕とみられる半円形のプランを複数確認している。ＳＸ15は平面プランがほぼＳＤ95と重複する状況から、ＳＤ95がほぼ埋まった時点の窪みに掘り込まれた可能性があるが、溝との関係は不明である。また底面や周囲の検出面には柱穴等のピットは確認できず、現時点で遺構の性格は不明であるが、何かしら特殊な遺構と考えられる。遺物は非ロクロ・ロクロ土師器が出土した。



遺　構	層 位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SD95	1	10YR2/3 暗褐色	シルト	径10㎝以内の黒褐色・褐色シルトブロックを多量含む	―
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	径10㎝以内の黒褐色・褐色シルトブロックを少量含む	―
	3	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト		―
SX15	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	径５㎝以内の褐色・黒褐色シルトブロックを含む	―
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	径５㎝以内の褐色・黒褐色シルトブロックを少量含む	―
	3	10YR3/4 暗褐色	シルト	径10㎝以内の褐色・黒褐色シルトブロックを多量含む	―
	4	10YR3/4 暗褐色	シルト	径５㎝以内の褐色・黒褐色シルトブロックを多量含む	―
	5	10YR4/4 褐色	シルト	径５㎝以内の暗褐色・黒褐色シルトブロックを多量含む	―

第24図　95号溝跡・15号性格不明遺構

（3）竪穴住居跡

竪穴住居跡は調査区のほぼ全面に確認しており、壁面等のプランを確認したものだけでも27軒以上を数える。竪穴住居跡はＶ層の残存部分では平面的に確認できなかったが、撹乱等の壁面で断面や一部平面を確認しており、これに住居跡間に挟まれた堆積土のみの確認を含めると数的にはそれを上回る軒数となる。

竪穴住居跡は住居同士の重複や、Ｖ層や撹乱により全体規模や形状を確認できたものは少ないが、残存状況からは規模が１辺3.2～6.9m程度、形状は方形で、深さは確認できた部分で40㎝～60㎝程度、床面もしくは掘り方底面の標高は11.15～11.50m程度である。竪穴住居跡の軸方向はほぼ南北軸を持つもののほか、やや傾くものがある。

第25図　竪穴住居跡配置図

掘り込みを行っておらず、平面と撹乱断面を中心とした観察であるが、中にはカマド、煙道、周溝、貼床、柱穴等の住居内施設を確認している。また堆積土中に多量のブロック土が含まれているものがあり、竪穴住居跡の中には自然に埋没したのではなく、埋め戻されたとみられるものが多くあるとみられる。遺物は遺構検出時に主に堆積土中から非ロクロ土師器や須恵器が出土している。

15号竪穴住居跡

Y75・76、X33・34グリッドで検出し、ＳＤ95に北側を壊されており、ＳＩ19・23・24・36より新しい。形状は隅丸方形とみられ、残存規模は東西4.6～5.2m、南北5.3m以上、南北軸方向はＮ－１～９°－Ｗである。撹乱の壁面での観察では、堆積土は３層に分かれ、１層は明色のブロック土を少量含み、２層はブロック土で床面は２層上面とみられる。床面までの深さは40㎝である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、掘り方底面はほぼ平坦である。掘り方の深さは45㎝で、底面標高は11.42mである。住居北東側の堆積土中に平面的に煙道を確認しているが、これは北側のＳＩ18の施設の可能性があり、ＳＩ15の煙道やカマドは確認できなかった。掘り込みを行っておらず遺物は確認できなかった。

16号竪穴住居跡

Y75・76、X36・37グリッドで検出し、ＳＸ14に南側を壊されており、ＳＩ17・20より古く、ＳＩ35より新しい。形状は隅丸方形とみられ、残存規模は南西－北東6.5m以上、北西－南東5.7m以上、方向は残存の良好な北東壁でＮ－45°－Ｗである。堆積土は２層に分かれ、１・２層はブロック土である。壁面・底面状況は不明であり、ＳＸ14の壁面観察から掘り方底面にはやや凹凸がある。煙道やカマドは確認できなかった。掘り込みを行っておらず遺物は確認できなかった。

17号竪穴住居跡

Y74・75、X37グリッドで検出し、ＳＩ16・20、ＳＩ20との間に堆積土のみ確認した竪穴住居跡より新しく、西側と南側は調査区外に続いている。形状は隅丸方形とみられ、残存規模は東西4.4m以上、南北４m以上、南北軸方向はＮ－７°－Ｅである。堆積土は５層に分かれ、１層にはブロック土を少量含んでいる。５層はブロック土で床面は５層の上面とみられ、床面までの深さは41㎝である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、掘り方底面状況は不明である。撹乱で掘り下がった西側部分の北壁で周溝を確認している。また調査区西壁際に径0.5m程度の円径の柱穴を３基確認し、北側２基の柱穴は重複しているが、造り直しかは不明である。住居跡と並びが沿ったＰ13とＰ47の柱間の距離は2.6mである。また北壁側中央付近でカマドを確認した。カマド袖は明黄褐色砂質土で、規模は袖の厚さは幅15㎝、幅は外側で94㎝、内側で68㎝、奥行き55㎝で、燃焼部西側には焼面がみられる。煙道は確認できなかった。遺物は非ロクロ・ロクロ土師器が出土しており、カマド内の堆積土から非ロクロ土師器の坏が出土した。

18号竪穴住居跡

Y74～76、X32・33グリッドで検出し、ＳＤ95に南側を壊されている。平面的に確認できず、堆積土のみの確認のため形状は不明で、残存規模や方向も不明である。撹乱壁面での観察では堆積土を７層確認したが、いずれもブロック土であることから多くを埋め戻されたとみられる。また堆積土中で確認した凝灰岩の礫はカマドの天井石に利用されたものの可能性がある。壁面や掘り方底面状況は不明で、煙道やカマドは確認できなかった。遺物は非ロクロ土師器が出土した。

19号竪穴住居跡

Y75・76、X34～36グリッドで検出し、ＳＩ15より古く、北側のＳＩ25、東側のＳＩ29、西側のＳＩ36より新しい。北側のＳＩ15とのわずかな間には付番は行わなかったが竪穴住居跡の堆積土とみられるブロック土を確認している。形状は隅丸方形とみられ、残存規模は東西6.8m、南北6.3m以上で、南北軸方向はＮ－４°－Ｅである。平面で壁面ラインは全く確認できず、撹乱断面から堆積土は１～５層と６～11層が重複するように大きく上下に分かれ

ることから、これらは別々の住居跡か、または同じ住居での造り直しの可能性がある。上部の１～５層部分をみると、２層は炭化物や焼土ブロックを多量に含み、３層は焼土面であることから、この部分は新しい時期のカマド近くの可能性がある。また５層が周溝の可能性があるが詳細は不明である。下部に位置する６～11層では８層は６層との境に炭化物と焼土が多く、カマドに近い位置の堆積土の可能性があり、９層は周溝で10層上面が最初の時期の床面であった可能性がある。上位の床面とみられる５層上面までの深さは16㎝で、下位の床面とみられる10層上面までの深さは35㎝である。壁面は急角度で立ち上がり、掘り方底面状況は不明である。撹乱底面で径45㎝のピットを１基確認したが、これが柱穴かどうかは判断できない。煙道やカマドは平面的に確認できなかった。掘り込みを行っておらず遺物は確認できなかった。

20号竪穴住居跡

Y74・75、X35～38グリッドで検出し、ＳＩ17より古く、ＳＩ16・41より新しい。西半部は調査区外となっている。東側には付番は行わなかったが、ＳＩ41とは異なる竪穴住居跡の堆積土とみられるブロック土を確認している。形状は隅丸方形とみられ、残存規模は東西4.6m以上、南北6.6～6.9m、南北軸方向はＮ－19°－Ｗである。撹乱壁面での観察では堆積土は３層に分かれ、１・２層はブロック土で、１層は堆積土のほとんどを占め、２層は壁際には確認できないが薄く、１層と比較して暗色である。３層はブロック土で床面は３層の上面とみられる。床面までの深さは46㎝である。壁面は急角度で立ち上がり、掘り方底面状況は不明である。煙道やカマドは確認できなかった。遺物は非ロクロ土師器が出土した。

21号竪穴住居跡

Y76・77、X33・34グリッドで検出し、ＳＩ22・23・25より新しい。形状は隅丸方形とみられ、残存規模は東西3.2～3.5m、南北3.9mと、今回の調査で確認した竪穴住居跡の中では小型である。南北軸方向はＮ－２°－Ｅである。堆積土は最上層となるブロック土１層のみの確認のため、底面や掘り方状況は不明である。煙道やカマドは確認できなかった。掘り込みを行っておらず遺物は確認できなかった。

22号竪穴住居跡

Y76・77、X33・34グリッドで検出し、ＳＩ21・25・26より古いとみられる。形状は隅丸方形とみられ、残存規模は東西4.5m、南北3.2m以上と、隣接するＳＩ21同様に小型とみられる。南北軸方向はＮ－４°－Ｅである。撹乱壁面での観察では、堆積土は５層に分かれ、１層には少量のブロック土を含んでいる。東壁と南壁の２・３層は周溝とみられ、幅0.25～0.3m、深さ20～25㎝である。また５層はブロック土の掘り方埋土で、床面はこの層の上面とみられるが、一部残存する４層が床面最上層の可能性がある。床面の深さは35㎝である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、掘り方底面は南側に下がり傾斜し、深さは60㎝、底面標高は11.32mである。煙道やカマドは確認できなかった。掘り込みを行っておらず遺物は確認できなかった。

24号竪穴住居跡

Y76、X33・34グリッドで検出し、ＳＤ95に北側を壊されており、ＳＩ15より古く、ＳＩ23より新しい。形状は隅丸方形とみられ、残存規模は東西1.6m以上、南北2.9m以上で、東壁でみた南北軸方向はＮ－４°－Ｅである。堆積土は最上層の明色ブロック土１層のみ確認している。壁面、掘り方底面状況は不明で、煙道やカマドは確認できなかった。掘り込みを行っておらず遺物は確認できなかった。

25号竪穴住居跡

Y75・76、X34グリッドで検出し、ＳＩ19・21・29より古くＳＩ26より新しいが、ＳＩ23との関係は不明である。形状は方形とみられ、残存規模や方向は不明である。残存する南西－北東辺の南東壁面の方向はＮ－60°－Ｅである。堆積土は最上層の暗色のブロック土１層のみ確認している。壁面、底面状況は不明で、煙道やカマドは確認できなかった。掘り込みを行っておらず、遺物は確認できなかった。

26号竪穴住居跡

Y76・77、X34グリッドで検出し、ＳＩ25・29より古く、ＳＩ22より新しい。堆積土のみの確認のため形状のみならず、残存規模や方向も不明である。撹乱壁面の観察で堆積土は３層に分かれ、１層はブロック土を多量含み、２層はブロック土で、３層はややグライ化している層であるが、床面は３層の上面とみられ、床面の深さは32㎝である。壁面状況は不明であるが、掘り方底面は平坦で、深さは39㎝、底面標高は11.50mである。北西側に煙道を確認したが、これはＳＩ25または、ＳＩ21・25の下部に存在するが確認できなかった住居跡のものの可能性があり、ＳＩ26の煙道やカマドは確認できなかった。掘り込みを行っておらず遺物は確認できなかった。

27号竪穴住居跡

Y78・79、X33・34グリッドで検出し、ＳＩ28より古い。形状は隅丸方形とみられ、残存規模は南西－北東４ｍ以上、北西－南東5.3m以上、残存の良好な北西壁面での方向はＮ－70°－Ｅである。撹乱壁面の観察では堆積土は４層に分かれ、１層はブロック土で、２層は１層との境には炭化物を多く含むことから２層上面が床面とみられる。南西壁の３層は周溝ないしは掘り方埋土とみられ、幅0.2～0.25m、深さ10～20㎝である。壁面は他の竪穴住居跡よりは緩やかな角度で立ち上がり、掘り方底面は壁面近くに沿って下がり、深さは50㎝、底面標高は11.45mである。煙道やカマドは確認できなかった。掘り込みを行っておらず遺物は確認できなかった。

28号竪穴住居跡

Y77・78、X34・35グリッドで検出し、ＳＩ27・29より新しく、東側を撹乱で壊されている。形状は隅丸方形とみられ、残存規模は南西－北東5.7m、北西－南東2.2m以上、残存の良好な北西壁面の方向はＮ－66°－Ｅである。撹乱壁面の観察では、堆積土は４層に分かれ、１層はブロック土を少量含み、北東壁面の２層は周溝とみられ、幅0.3mである。また３層はブロック土で、床面は３層上面とみられ、床面までの深さは33㎝である。３層の下にはグライ化した掘り方埋土を確認している。壁面は急角度で立ち上がり、掘り方底面は平坦で、深さは55㎝、底面標高は11.45mである。煙道やカマドは確認できなかった。掘り込みを行っておらず遺物は確認できなかった。

29号竪穴住居跡

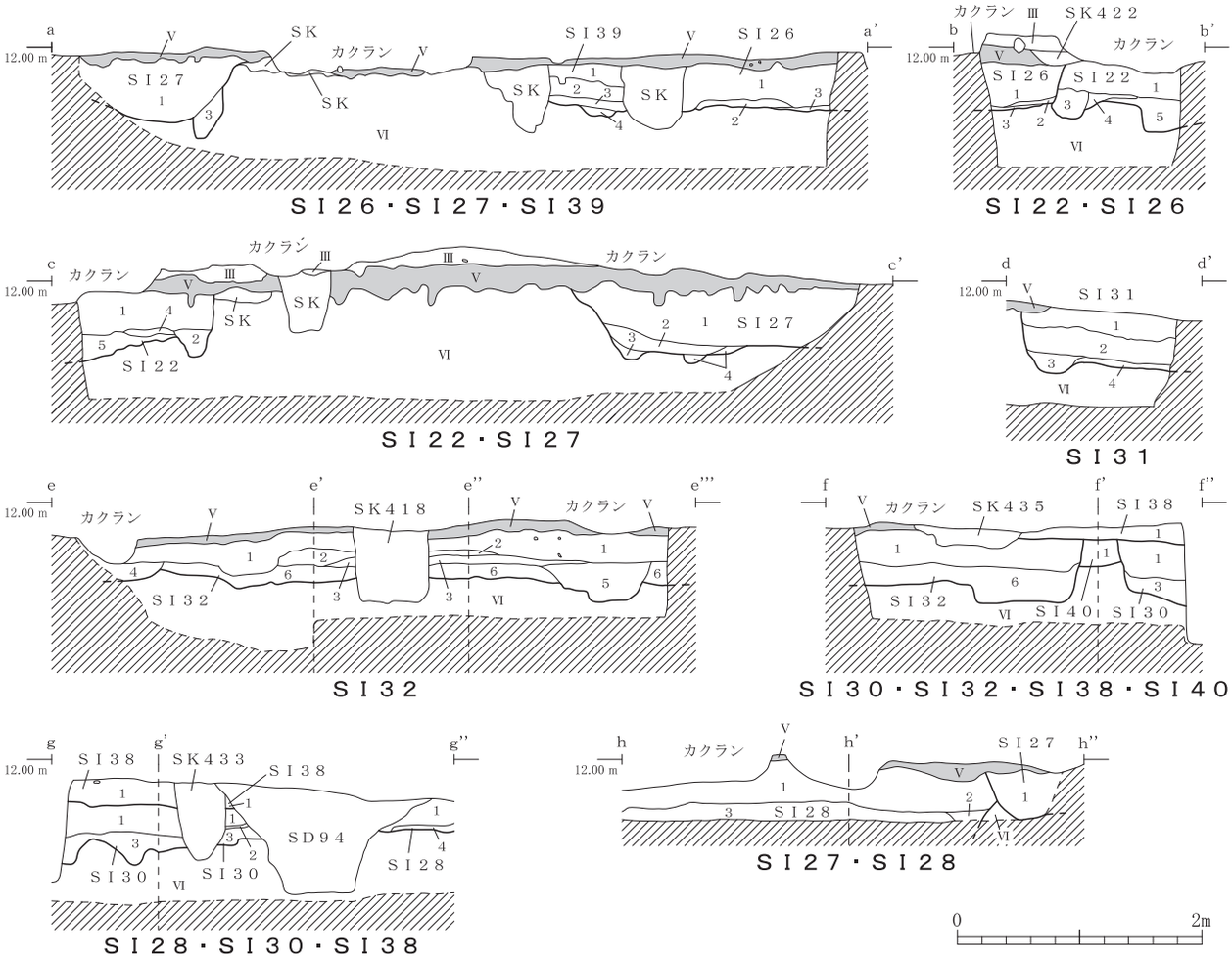
Y76・77、X34・35グリッドで検出し、ＳＤ94に南側を壊され、ＳＩ19・28より古く、ＳＩ25・26より新しい。形状は隅丸方形とみられ、残存規模は東西3.5m以上、南北4.8m以上で、残存する北壁の方向はＮ－85°－Ｗである。堆積土は３層に分かれ、１層はブロック土を含み、２層は遺物をまばらに含んでいる。ＳＤ94壁面での断面観察からみると、壁面は急角度で立ち上がり、底面には凹凸があり、東壁側が幅広の溝状にくぼむとみられる。煙道やカマドは確認できなかった。掘り込みを行っておらず遺物は確認できなかった。

30号竪穴住居跡

Y77、X35グリッドで検出し、ＳＤ94に北側を壊され、上部にＳＩ38があり、東側と南側を撹乱に壊されている。断面のみでの確認のため、形状は不明であり、残存規模や方向も不明である。堆積土は３層に分かれ、１層、３層はブロック土で床面は３層上面とみられる。床面までの深さは30㎝である。壁面は緩やかに立ち上がり、掘り方底面は凹凸があり、深さは50㎝、底面標高は11.15mである。煙道やカマドは確認できなかった。掘り込みを行っておらず遺物は確認できなかった。

31号竪穴住居跡

Y76・77、X35・36グリッドで検出し、ＳＤ94に北側を、ＳＤ97に西側を壊されている。平面でプランは確認できなかったため形状は不明であり、残存規模や方向も不明である。ＳＤ94壁面での観察から堆積土は４層に分かれ、１・２層が堆積土、３層は周溝とみられ、４層はブロック土で床面は４層上面とみられる。床面までの深さは36㎝である。壁面は急角度で立ち上がり、掘り方底面は平坦で、深さは42㎝、底面標高は11.34mである。煙道やカマドは確認できなかった。掘り込みを行っておらず遺物は確認できなかった。



遺　構	層 位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SI22	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径５cm以内の黄褐色シルトブロックを少量含む	堆積土
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径３cm以内の黒褐色・黄褐色シルトブロックを多量、径１cm以内の炭化物、焼土を少量含む	周溝
	3	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径３cm以内の黒褐色・黄褐色シルトブロックを多量、径１cm以内の炭化物、焼土を少量含む	
	4	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径３cm以内の黒褐色・黄褐色シルトブロックを多量含む	掘り方埋土
	5	10YR5/6 黄褐色	シルト	径３cm以内の黄褐色シルトブロックを少量含む	掘り方埋土
SI26	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	径５cm以内の褐色シルトブロックを少量含む　下部に炭化物を多量含む	堆積土
	2	5Y3/2 オリーブ黒色	シルト	径１cm以内の黒色シルトブロックを少量含む	
	3	5Y3/2 オリーブ黒色	シルト	褐色・灰オリーブ褐色シルトブロックを多量含む	掘り方埋土
SI27	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	径10cm以内の黄褐色シルトブロックを少量、径１cm以内の炭化物を少量含む	堆積土
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	部分的に黄褐色砂質シルトブロックを多量、上部に炭化物を多量含む	
	3	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	径３cm以内の黄褐色シルトブロックを少量含む	周溝
	4	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	径３cm以内の黄褐色シルトブロックを少量含む	掘り方埋土
SI28	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径10cm以内のにぶい黄褐色砂質・黒褐色シルトブロックを多量含む	堆積土
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径５cm以内のにぶい黄褐色シルトブロックを少量、径１cm以内の炭化物、焼土を多量含む	周溝
	3	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	径５cm以内の黒褐色シルトブロックを少量含む	掘り方埋土
	4	N7/0 灰白	粘土質シルト	径５cm以内の黒褐色シルトブロックを少量含む	
SI30	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	径１cm以内のにぶい黄褐色・褐色シルトブロックを多量含む	堆積土
	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	径１cm以内の黒褐色シルトブロックを少量含む	
	3	10YR4/4 褐色	シルト	径10cm以内の暗褐色・黒褐色シルトブロックを多量含む	掘り方埋土
SI31	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径５cm以内の褐色・黒褐色シルトブロックを多量含む	堆積土
	2	10YR4/4 褐色	シルト	径５cm以内の褐色・黒褐色シルトブロックを多量含む	
	3	10YR4/4 褐色	シルト	径５cm以内の褐色・黒褐色シルトブロックを含む	周溝
	4	10YR3/4 暗褐色	シルト	径５cm以内の褐色・黒褐色シルトブロックを含む	掘り方埋土
SI32	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	径10cm以内の黄褐色シルトブロックを少量含む	堆積土
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	炭化物を多量含む	
	3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	径３cm以内の黄褐色シルトブロックを少量含む　径１cm以内の炭化物を少量含む	
	4	10YR4/4 褐色	シルト	径５cm以内の黒褐色シルトブロックを少量含む	周溝？
	5	10YR3/3 暗褐色	シルト	径５cm以内の褐色シルトブロックを含む	土坑？
	6	10YR4/4 褐色	シルト	径３cm以内の暗褐色シルトブロックを少量含む	掘り方埋土
SI38	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径１cm以内の黒褐色シルトブロックを少量含む	堆積土
SI39	1	10YR3/2 黒褐色	シルト	径５cm以内の褐色シルトブロックを少量含む　下部に炭化物を多量含む	堆積土
	2	5Y3/2 オリーブ黒色	シルト	径１cm以内の黒色シルトブロックを少量含む	
	3	5Y3/2 オリーブ黒色	シルト	褐色・灰オリーブ褐色シルトブロックを多量含む	掘り方埋土
	4	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径３cm以内の黒褐色・黄褐色シルトブロックを多量含む	土坑？
SI40	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径１cm以内の黒褐色シルトブロック、炭化物、焼土を含む	堆積土

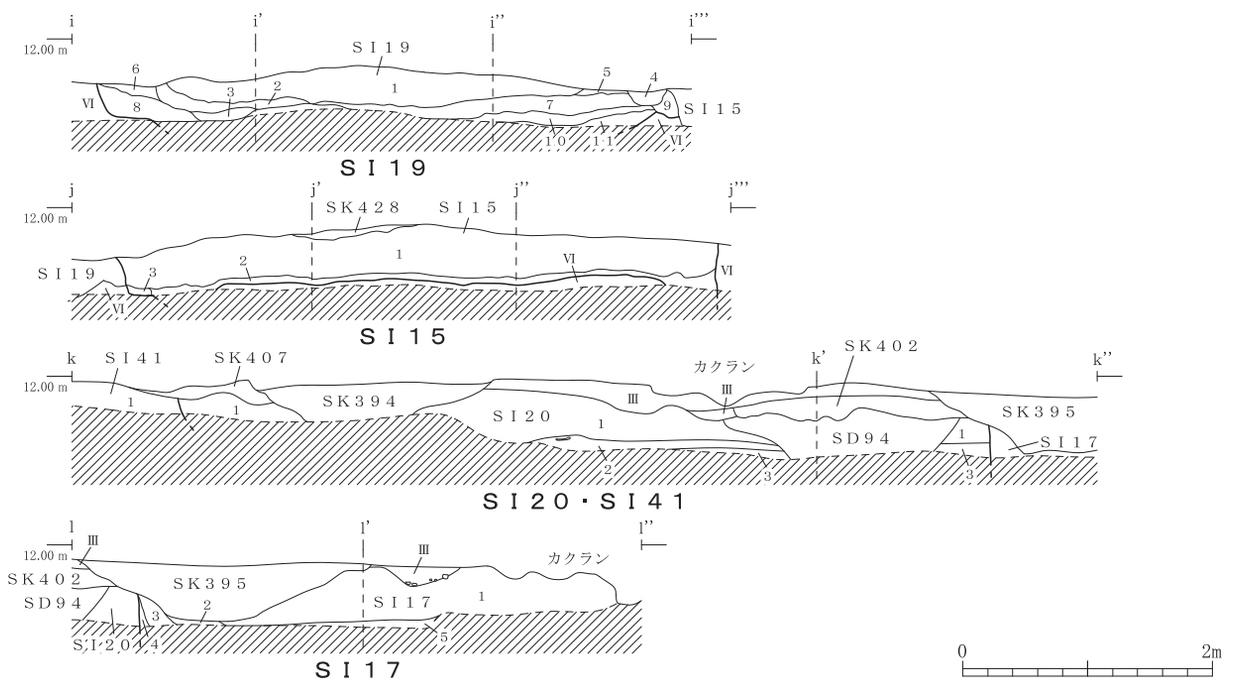
第26図　竪穴住居跡（1）

32号竪穴住居跡

Y77・78、X35・36グリッドで検出し、ＳＩ34より新しく、北側を撹乱で大きく壊されている。形状は不明であり、残存規模や方向も不明である。撹乱壁面での観察では、堆積土は６層に分かれ、１層はわずかにブロック土を含み、２層は炭化物を多く含む層である。６層はブロック土で床面は６層上面とみられ、床面までの深さは30㎝である。断面のみからみると４層と５層は６層を掘り込んだ形となっており、壁面との位置関係から４層部分は東壁の周溝、また５層部分は床面上の土坑等の施設の可能性がある。壁面は緩やかに立ち上がり、掘り方底面は東壁側が高くなっており、北壁側は幅広く窪む他はほぼ平坦である。深さは40㎝、底面標高は11.40mである。煙道やカマドは確認できなかった。掘り込みを行っておらず遺物は確認できなかった。

33号竪穴住居跡

Y76、X36・37グリッドで検出し、ＳＤ97に東側を壊されている。東側のＳＩ31との重複関係は不明である。形状は隅丸方形とみられ、残存規模は東西１m以上、南北4.7mである。南北軸方向はＮ－27°－Ｗである。堆積土は



遺　構	層 位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SI15	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径５㎝以内の褐色シルトブロックを含む	堆積土
	2	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	径５㎝以内の褐色シルトブロック、径１㎝以内の炭化物を含む	掘り方埋土
	3	10YR4/4 褐色	砂質シルト	径５㎝以内のにぶい黄褐色シルトブロックを含む	
SI17	1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	径３㎝以内の明黄褐色砂質シルトブロックを多量含む	堆積土
	2	5YR5/8 明赤褐色	砂質シルト	径１㎝以内の明黄褐色砂質シルトブロックを微量含む	堆積土(焼土)
	3	10YR7/6 明黄褐色	砂質シルト	径１㎝以内のにぶい黄褐色砂質シルトを含む	カマド構築土
	4	10YR6/6 明黄褐色	砂質シルト	径10㎝以内の灰黄褐色砂質シルトブロックを含む	掘り方埋土
	5	10YR6/6 明黄褐色	砂質シルト	径１㎝以内の褐灰色粘土質シルト、砂質シルトブロックを多量含む	
SI19	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	径３㎝以内の炭化物、焼土を少量含む	堆積土
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	褐色シルトブロックを少量、炭化物、焼土を多量含む	
	3	5YR3/2 暗赤褐	シルト	径３㎝以内の炭化物、焼土を含む	焼土
	4	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径３㎝以内の褐色・黒褐色シルトブロックを多量含む	周溝？
	5	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径３㎝以内の褐色・黒褐色シルトブロックを多量含む	掘り方埋土
	6	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	径10㎝以内のにぶい黄褐色・暗褐色シルトブロックを含む	堆積土
	7	10YR3/3 暗褐色	シルト	径３㎝以内のにぶい黄褐色・褐色砂質シルトブロックを多量、径１㎝以内の炭化物を含む	
	8	10YR4/4 褐色	砂質シルト	径１㎝以内の黒褐色シルトブロックを少量含む	
	9	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径３㎝以内の褐色・黒褐色シルトブロックを多量含む	周溝?
	10	10YR4/4 褐色	砂質土	径５㎝以内のにぶい黄褐色・暗褐色砂質シルトブロックを多量含む	掘り方埋土
	11	10YR4/4 褐色	砂質シルト	径10㎝以内のにぶい黄褐色・暗褐色シルトブロックを含む	
SI20	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	径１㎝以内の明黄褐色砂質シルトブロック、炭化物を少量含む	堆積土
	2	10YR6/6 明黄褐色	砂質シルト	径１㎝以内の褐灰色粘質シルト・明黄褐色砂質シルトブロック、径１㎝以内の炭化物を微量含む	
	3	10YR6/6 明黄褐色	砂質シルト	径１㎝以内の灰白色砂質シルトブロックを少量含む	掘り方埋土
SI41	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	径１㎝以内の明黄褐色砂質シルトブロック、炭化物を少量含む	堆積土

第27図　竪穴住居跡（2）

最上層のブロック土１層のみ確認している。壁面や掘り方底面状況は不明である。煙道やカマドは確認できなかった。掘り込みを行っておらず遺物は確認できなかった。

（4）土坑

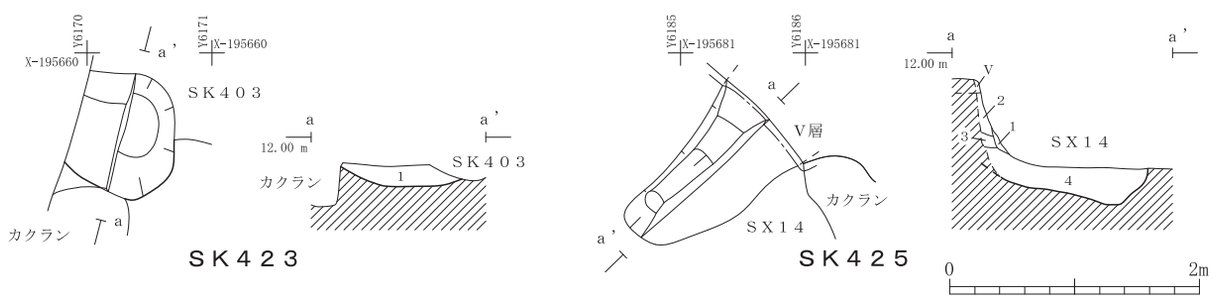
Ⅵ層上面で確認した土坑は大半が竪穴住居跡の堆積土上に掘り込まれており、竪穴住居跡より後世の遺構とみられる。調査区の北東部では撹乱壁面のＶ層下面には土坑状となる何らかの柱穴を確認しており、掘立柱建物の存在が想定されるが、Ｖ層下であり平面的に建物の規模等は確認できなかった。土坑の分布は北西部に多く、南西部では１基を確認したのみである。また掘り込みを行っていないために下記では一部の記載に止める。

423号土坑

Y74・75、X33グリッドで検出し、ＳＫ403より古く、西側は調査区外へと続き、南側を撹乱で壊されている。形状は不整形で、残存規模は長軸0.98m、短軸0.84m、深さ16㎝である。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。堆積土はブロック土の単一層である。遺物は非ロクロ土師器、須恵器が出土した。

425号土坑

Y77・78、X37グリッドで検出し、ＳＸ14より古く、北端はＶ層の下へ続いており不明である。形状は楕円形を短軸方向で切ったような形で、残存規模は長軸1.33m、短軸0.88m、深さ89㎝と細長く深い。残存する壁面は急角度で立ち上がり、底面は南側に傾いている。堆積土はブロック土から成る４層に分かれ、１層は僅かな残存であり、２層に対して３層は明色で層状となり、４層はグライ化している。遺物は非ロクロ土師器、土製品が出土した。



遺　構	層 位	土　色	土　性	特　徴	備　考
SK423	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径５㎝以内の褐色シルトブロックを含む	―
SK425	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径３㎝以内の褐色シルトブロックを少量含む	―
	2	10YR3/3 暗褐色	シルト	径３㎝以内の褐色シルトブロックを少量含む　径１㎝以内の炭化物、焼土を含む	―
	3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	径５㎝以内の褐色・にぶい黄褐色シルトブロック、径１㎝以内の炭化物を含む	―
	4	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径３㎝以内の褐色シルトブロックを少量含む	―

第28図　土坑

（5）ピット

Ⅵ層上面ではピットを52基確認している。大半のピットは同じⅥ層面で確認した竪穴住居跡の堆積土上で確認していることから、土坑同様に竪穴住居跡よりも後世の遺構とみられる。確認はＶ層が失われた範囲でのもののため、調査区北西部に多く、特にＳＤ94と95の間に集中している。ピットの形状はやや不整形の円形または楕円形のものが多く、径は0.13～0.54mで一定せず、深さは掘り込んでいないため不明である。堆積土はⅢ層や竪穴住居跡堆積土と比較して暗色のものが多く、これは当時の表土に関係するものとみられる。ピット同士の重複や一定間隔で並ぶような配置は確認できなかったが、ピットの中には柱痕跡を有するものもあることから、これらにより掘立柱建物や塀が構成される可能性もある。

遺　構	検出地区		平面形状	規模（m）			土　色	土　性	特　徴
				長軸	短軸	深さ			
SI16	Y75・76	X36・37	隅丸方形？	6.50	5.70	－	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径５cm以内の褐色シルトブロックを含む
SI18	Y74・75・76	X32・33	不明	－	－	－	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径５cm以内のにぶい黄褐色・暗褐色シルトブロックを多量含む
SI21	Y76・77	X33・34	隅丸方形	3.70	3.20	－	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径5cm以内の褐色シルトブロックを含む
SI23	Y76	X33・34	不明	－	－	－	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径10cm以内のにぶい黄褐色シルトブロックを多量含む
SI24	Y76	X33・34	隅丸方形	－	－	－	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径3cm以内のにぶい黄褐色・暗褐色シルトブロックを多量、径1cm以内の炭化物、焼土を少量含む
SI25	Y76・77	X34	不明	－	－	－	10YR3/3　暗褐色	シルト	径５cm以内のにぶい黄褐色シルトブロック、炭化物、焼土を多量含む
SI29	Y76・77	X34・35	隅丸方形	－	－	－	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径５cm以内の褐色シルトブロックを含む
SI33	Y76	X36・37	不明	－	－	－	10YR6/6　明黄褐色	砂質シルト	径５cm以内の褐灰色砂質シルトブロックを少量含む
SI34	Y78・79	X36	不明	－	－	－	2.5Y5/1　黄灰色	シルト	径５cm以内のにぶい黄橙色シルトブロックを少量含む
SI35	Y75・76	X36・37	不明	－	－	－	10YR4/4　砂質シルト	シルト	径５cm以内の暗褐色・黒褐色シルトブロックを多量含む
SI36	Y74・75	X34	不明	－	－	－	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径10cm以内のにぶい黄褐色シルトブロックを多量含む
SI37	Y75	X32	不明	－	－	－	10YR4/4　褐色	シルト	径５cm以内のにぶい黄褐色・暗褐色シルトブロックを含む
SD98	Y77	X34	直線状	1.27	0.39	－	10YR3/3　暗褐色	シルト	径３cm以内の褐色シルトブロックを多量含む
SK410	Y77	X34	不明	0.61	0.08	0.39	1　10YR3/3　暗褐色	シルト	径3cm以内の褐色シルトブロックを少量、径1cm以内の炭化物を少量含む
							2　10YR3/4　暗褐色	シルト	径3cm以内の褐色・暗褐色シルトブロックを多量、径1cm以内の炭化物、焼土を少量含む
SK417	Y76	X35	不整形	0.96	0.90	－	10YR3/2　黒褐色	シルト	径１cm以内の炭化物、焼土を含む
SK424	Y75	X37	不明	1.47	0.72	－	10YR4/2　暗オリーブ褐色	砂質シルト	径３cm以内の褐色砂質シルトブロックを多量含む
SK426	Y75	X33	不整楕円形	1.21	0.73	－	10YR3/4　暗褐色	シルト	径５cm以内の褐色シルトブロックを少量含む
SK427	Y75	X32・33	不整形	1.44	0.81	－	10YR3/4　暗褐色	シルト	径５cm以内の褐色シルトブロックを少量含む
SK428	Y75	X34	不明	1.43	0.89	－	10YR3/2　黒褐色	シルト	径10cm以内の褐色砂質シルトブロックを含む
SK429	Y76	X33	半円形に残存	0.60	－	－	10YR3/3　暗褐色	シルト	径１cm以内の褐色シルトブロックを多量含む
SK430	Y75	X34	不明	1.51	0.79	－	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	径10cm以内の黄褐色シルトブロックを少量含む
SK431	Y78	X33	不整形	0.69	0.42	－	10YR3/3　暗褐色	シルト	径10cm以内の褐色シルトブロック、炭化物を含む
SK432	Y78・79	X33	円形	0.59	－	－	10YR3/2　黒褐色	シルト	径10cm以内の褐色砂質シルトブロックを含む
SK433	Y77	X35	不明	0.44	0.25	－	10YR3/3　暗褐色	シルト	径３cm以内の褐色シルトブロック、径１cm以内の炭化物、焼土を少量含む
SK434	Y76	X36	楕円形	0.53	0.35	－	10YR2/2　黒褐色	砂質土	径３cm以内の褐色シルトブロックを少量含む
SK435	Y77	X36	不明	0.88	0.48	－	10YR4/4　褐色	砂質シルト	径５cm以内の暗褐色シルトブロックを多量含む
P7	Y76	X33	不整楕円形	0.36	0.31	－	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の灰黄褐色砂質シルトブロックを含む
P8	Y76	X35	隅丸方形	0.37	－	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径３cm以内の明黄褐色砂質シルト、径１cm以内の炭化物を少量含む
P10	Y76	X35	不整円形	0.31	0.26	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径３cm以内の明黄褐色砂質シルト、径１cm以内の炭化物を少量含む
P11	Y76	X35	不整楕円形	0.35	0.26	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径３cm以内の明黄褐色砂質シルト、径１cm以内の炭化物を少量含む
P13	Y74	X37	不整円形	0.47	－	－	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径３cm以内の褐色シルトブロックを少量、径１cm以内の炭化物を含む
P14	Y74	X37	楕円形	0.49	0.35	－	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径10cm以内の褐色砂質シルトブロックを多量含む
P15	Y75	X34	不整楕円形	0.42	0.27	－	1　10YR3/4　暗褐色	シルト	（柱痕跡）
							2　10YR3/4　暗褐色	シルト	径５cm以内の黒褐色シルトブロックを少量含む（掘り方埋土）
P16	Y76	X34	円形	0.29	－	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径１cm以内の明黄褐色砂質シルトブロック、炭化物を少量含む
P17	Y76	X34	不整楕円形	0.36	0.26	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径１cm以内の明黄褐色砂質シルトブロック、炭化物を少量含む
P18	Y76	X34	不整形	0.20	－	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径１cm以内の明黄褐色砂質シルトブロック、炭化物を少量含む
P19	Y76	X34	不整形	0.26	0.20	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径１cm以内の明黄褐色砂質シルトブロック、炭化物を少量含む
P20	Y76	X34	不整楕円形	0.29	0.23	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径１cm以内の明黄褐色砂質シルトブロック、炭化物を少量含む
P21	Y74	X35	不整円形	0.35	－	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径１cm以内の炭化物を少量含む
P22	Y76	X35	円形	0.42	－	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径１cm以内の炭化物を少量含む
P23	Y75・76	X35	不整円形	0.54	0.45	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径１cm以内の炭化物を少量含む
P24	Y76	X34	不整円形	0.25	－	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径１cm以内の明黄褐色砂質シルトブロック、炭化物を少量含む
P25	Y76	X34	不整円形	0.26	－	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径１cm以内の明黄褐色砂質シルトブロック、炭化物を少量含む
P26	Y76	X34	円形	0.27	－	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径１cm以内の明黄褐色砂質シルトブロック、炭化物を少量含む
P27	Y76	X34・35	不整形	0.31	0.23	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径１cm以内の明黄褐色砂質シルトブロック、炭化物を少量含む
P29	Y75	X34	楕円形	0.32	0.27	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径１cm以内の明黄褐色砂質シルトブロック、炭化物を少量含む
P30	Y75	X34	楕円形	0.34	0.25	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径１cm以内の明黄褐色砂質シルトブロック、炭化物を少量含む
P31	Y75	X34	不整形	0.35	0.33	－	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	径３cm以内の褐色シルトブロックを含む、径１cm以内の炭化物を含む
P32	Y76	X33	不整楕円形	0.30	0.24	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径１cm以内の明黄褐色砂質シルトブロック、炭化物を微量含む
P33	Y77	X34	円形	0.23	－	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径１cm以内の明黄褐色砂質シルトブロックを含む
P34	Y76	X34	円形	0.27	－	－	10YR3/3　暗褐色	砂質シルト	径５cm以内の褐色シルトブロックを含む
P35	Y76	X33	不明	0.41	0.19	－	10YR4/4　褐色	シルト	径１cm以内の褐色シルトブロックを少量含む
P36	Y76	X33	不整形	0.31	0.24	－	10YR3/3　暗褐色	シルト	径５cm以内の褐色シルトブロックを含む
P37	Y76	X33	円形	0.22	－	－	10YR2/2　黒褐色	シルト	径５cm以内の褐色シルトブロックを含む
P38	Y77	X33	円形	0.38	0.23	－	10YR3/2　黒褐色	シルト	径３cm以内の灰黄褐色シルトブロックを多量含む
P39	Y78	X33	不整楕円形	0.41	0.27	－	10YR3/3　暗褐色	シルト	径10cm以内の褐色シルトブロック、炭化物を含む
P40	Y77	X34	半円形に残存	0.45	－	－	10YR3/2　黒褐色	シルト	径３cm以内の褐色シルトブロック、炭化物を含む
P41	Y75	X34	円形	0.40	－	－	10YR4/4　褐色	シルト	炭化物を多量含む
P42	Y75	X34	不整円形	0.40	0.35	－	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	径３cm以内の褐色・黒褐色シルトブロックを多量含む
P43	Y76	X34	楕円形	0.30	0.26	－	10YR3/3　暗褐色	シルト	径５cm以内の褐色シルトブロックを含む
P44	Y76	X34	不明	0.26	0.16	－	10YR4/4　褐色	シルト	径５cm以内の黒褐色シルトブロックを少量含む
P45	Y75	X34	不整円形	0.40	－	－	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径10cm以内のにぶい黄褐色・暗褐色シルトブロックを含む
P46	Y74	X36	円形	0.34	－	－	10YR3/3　暗褐色	シルト	径３cm以内の褐色シルトブロックを少量、炭化物を含む
P47	Y74	X37	不明	0.36	0.32	－	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	径３cm以内の褐色シルトブロックを少量、径１cm以内の炭化物を含む
P48	Y75	X36	円形	0.13	－	－	2.5Y3/3　暗オリーブ褐色	シルト	径３cm以内の褐色シルトブロックを含む
P49	Y76	X36	不整円形	0.30	－	－	10YR3/3　暗褐色	シルト	径５cm以内の黒褐色シルトブロックを含む
P50	Y76	X36・37	円形	0.26	－	－	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	径３cm以内の褐色シルトブロック、炭化物を少量含む
P51	Y76	X37	不整楕円形	0.43	0.33	－	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	径３cm以内の褐色シルトブロック、炭化物を少量含む
P52	Y76	X34	不整形	0.16	0.15	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径３cm以内のにぶい黄褐色シルトブロックを含む
P53	Y76	X35	不整円形	0.17	－	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径５cm以内の黄褐色シルトブロックを含む
P54	Y76	X35	不整円形	0.22	－	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径５cm以内の黄褐色シルトブロックを含む
P55	Y76	X35	不整円形	0.22	－	－	10YR4/1　褐灰色	砂質シルト	径５cm以内の黄褐色シルトブロックを含む
P56	Y75	X33	楕円形	0.44	0.30	－	10YR5/1　褐灰色	砂質シルト	径１cm以内の炭化物を少量含む
P57	Y75	X33	円形	0.22	0.21	－	10YR3/4　暗褐色	シルト	径５cm以内の褐色シルトブロックを少量含む
P58	Y76	X37	不整円形	0.37	－	－	10YR4/2　灰黄褐色	シルト	径10cm以内の褐色シルトブロックを含む
P59	Y77	X35	半円形に残存	0.33	－	－	10YR5/1　褐灰色	シルト	径３cm以内のにぶい黄橙色・褐灰色シルトブロックを微量含む

※ 規模は残存値

第４表　その他のⅥ層上面検出遺構一覧

第５節　出土遺物

本調査では、縄文土器、土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦、金属製品、石製品などが出土し、現地調査終了時の出土数量は遺物収納用コンテナで40箱となった。接合作業前の総点数は10,216点で、このうち75.3％をＳＸ14からの出土遺物が占めている。ＳＸ14は遺物を廃棄した大型の土坑であり、若林城期の多様な遺物を包蔵している。なお、以下に示す遺物の出土点数は、ことわりがない限り接合前の点数を示している。

遺物の図化を行うにあたっては、磁器や中世以前の土器については形状が判別可能なものを中心に行い、また陶器や鉄製品、焼塩壺、瓦等についてはは形態的な特徴を示す遺物を中心に紹介している。以下では若林城期の遺物を中心に、種別ごとに概観する。

（1）陶器

陶器の出土点数は234点である。時期別にみると16世紀末以降ものが192点で全体の83.1％を占め、16世紀末以前のものが21点、時期不明のものが21点出土している。

ＳＸ14の出土遺物は203点（86.8％）とほとんどを占め、遺物の時期としては若林城が機能していた近世初期かそれに近い時期に限定される。産地・器種の組成については、食膳具は瀬戸美濃の志野、織部や唐津が主体である。中でも岐阜県可児市に所在する弥七田窯で製作されたと考えられる織部皿は、これまで出土例がほとんど無いために希少な資料である。擂鉢は瀬戸美濃、岸窯系、丹波があり、中でも丹波が主体で45点出土しているが、擂目があまり磨り減っていないものが多い。

（2）磁器

磁器の出土点数は102点で、ほとんどが小破片である。時期は16世紀末から17世紀代に属するものが97点で全体の94.1％と陶器とほぼ同様の割合を占めている。その他には近現代のものが１点、16世紀中のものが4点出土した。これらのうちＳＸ14からの出土は98点で97.1％を占めている。

産地ごとの内訳は、最も多い中国が96点、次いで肥前が3点、瀬戸が１点、国内の産地不明が１点ある。中国のものは若林城の時期に該当するもので、青花が施されるものが多く、他には中国の青磁と白磁が僅かにある。器種は碗、皿、小坏、鉢、瓶類などで、器形を確認できたものは全て食膳具である。

（3）瓦質土器

瓦質土器の出土点数は26点である。大きな破片は無く、確認できた器種は擂鉢などの鉢類で、時期は16世紀末以降と考えられるものであり、城内で使用されていたものと考えられる。

（4）土師質土器

土師質土器の出土点数は6,047点で、種別ごとでは最も多い点数である。このうち97.8％がＳＸ14から出土している。ロクロ土師器との判別が難しいもののうち、内面に黒色処理が施されていないものを土師質土器として扱った。器種には皿と焼塩壺のみであり、出土点数は皿が5,394点、焼塩壺が653点で、皿が大多数を占めており、皿には耳皿が含まれている。

皿はロクロナデ成形され、底部には糸切り痕が残るのが特徴である。法量は口径が約７㎝～17㎝、底径が約4.5㎝～９㎝、器高が約２㎝～４㎝の範囲にある。中には体部外面や底部にミガキやナデ調整により器面を平滑にし、糸切り痕を消した上で体部と底部の境を明瞭にしたものが一定量確認できるほか、口縁部の内外面に厚めの煤が付着したものが相当数あり、また器体全体が黒色化したものもある。

煤の付着は登録した222点のうちの36.0％に認められた。煤は口縁部のみならず見込みに確認できるものもあり、その付着状況から、今回出土した皿の約４割は灯明皿として使用されたと考えられる。また２点のみではあるが、欠損した口縁部を芯の受けとしていたと考えられるものもあった。

焼塩壺は全てロクロ成形され、手づくねによるものや外面を叩きにより二次成形したものは確認できない。体部下端には横位または斜位のヘラケズリやナデによる粗い面取りが施されたものとロクロ成形のみのものがあり、二次被熱により内外面全体が赤色化しているのが特徴である。形状は直立気味のもの、内傾し直線的に立ち上がるもののほか、特徴的なものとして体部下半から段を境に上半部が狭まるものがある。ほとんどのものは最大径が体部下半部にあり、幅に大きな差が無いのに対し、底部の厚さは極端に厚いものがある。

(5) 瓦

瓦の出土総点数は782点で、ＳＸ14からの出土が444点（56.8％）、それより時期が下るとみられるＳＫ396からの出土が115点（14.7％）である。瓦は長さと幅が計測可能なものを中心に図化した。

若林城期の瓦は本瓦葺のもので、555点出土した。種類は軒丸瓦（10点）、丸瓦（126点）、軒平瓦（５点）、平瓦（274点）、熨斗瓦（55点）、輪違い（11点）、菊丸瓦（２点）、面戸瓦（５点）である。瓦の出土数は第８次、第９次調査での出土総点数（15,531点）と比べると、数は極めて少ない状況である。

軒丸瓦は瓦当文様が判明したものは無い。丸瓦では通常より胴部が長いもの型式を確認した。熨斗瓦は平瓦をニ分割するため、平瓦破片との区別が難しいものがあり、分割線を確認できたものは熨斗瓦とし、他は平瓦に分類した。軒平瓦は0.9％、平瓦は49.4％、熨斗瓦は9.9％を占めるが、小片で図化していない。輪違いは2.0％、面戸瓦は0.9％を占める。両者とも丸瓦を素材に分割するものであることから、丸瓦との区別が困難なものがある。また瓦当部は欠損しているが、挿込み形状から菊丸瓦と考えられるものが２点ある。

古代の瓦は平瓦９点、丸瓦１点が出土した。焼成は良好で、凸面に縄目、凹面に布目が認められる。桟瓦は155点（19.8％）、軒桟瓦は34点（4.4％）出土した。なお、種類が不明なものが28点ある。これらのうち瓦当文様が認められる６点を図化した。瓦当文様は四心葉唐草文や三花弁唐草文などがある。

(6) 金属製品

金属製品は398点出土し、このうち鉄製品は316点、銅製品は71点、その他は11点ある。ＳＸ14からの出土は346点（86.9％）である。

鉄釘は226点ある。頭部は巻かれているものがほとんどで、平たく伸びたままのものは極僅かである。古銭は開元通寶や北宋銭など52点ある。中には複数枚が重なって出土したものもある。鉄釘や銭貨以外では、火箸や鋏、小柄、煙管、鍋の弦、錠前などのほか、用途不明のものがあり、生活用品の出土が目立っている。また少量ではあるが鍛冶関係遺物として鉄滓などが出土している。

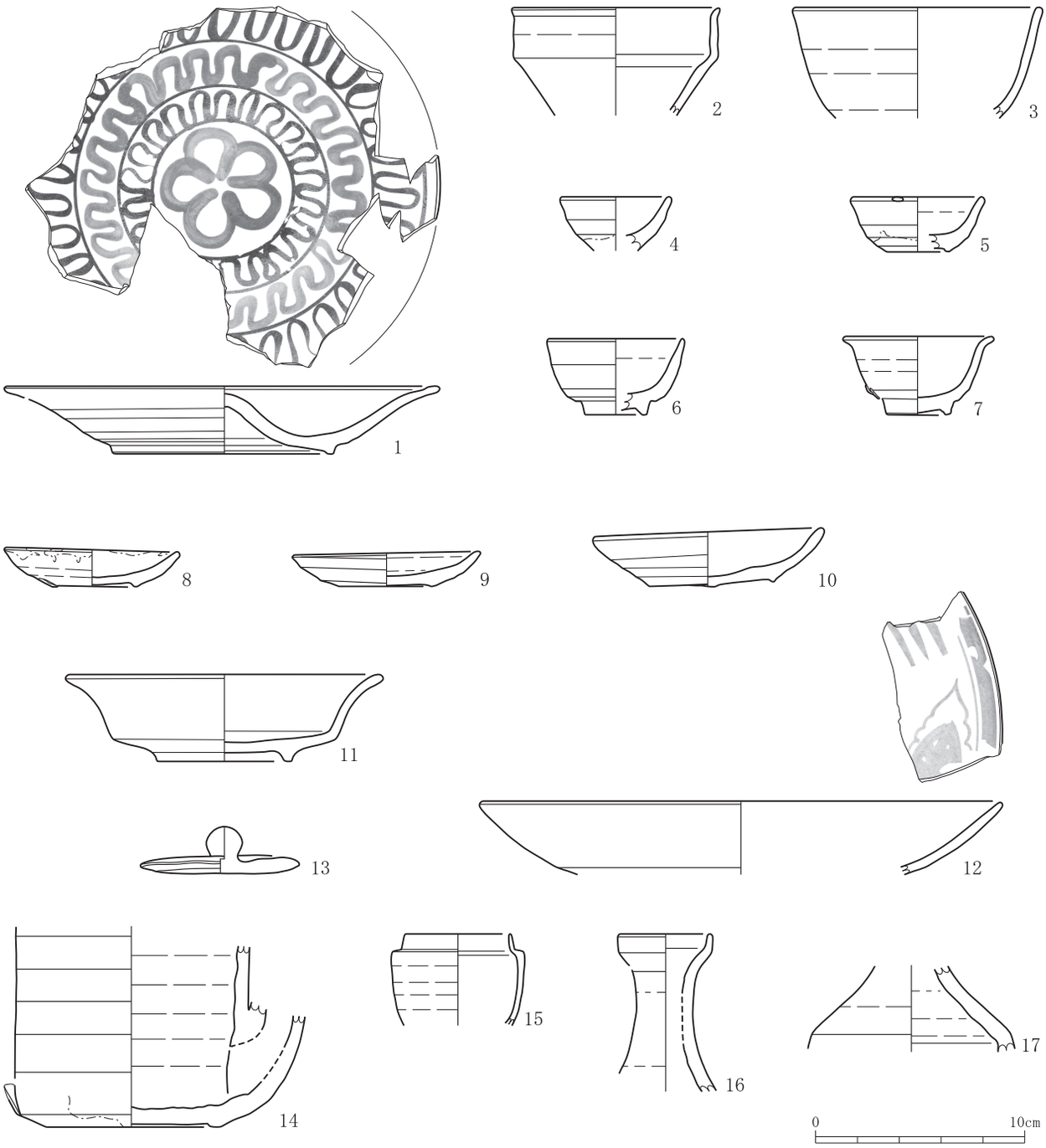
(7) 石製品・木製品・土製品

石製品は砥石と考えられるものが１点、用途不明のものが２点、その他が２点ある。木製品にはＳＸ14から漆器椀の漆皮膜部分が残存したものがある。

(8) 中世以前の土器

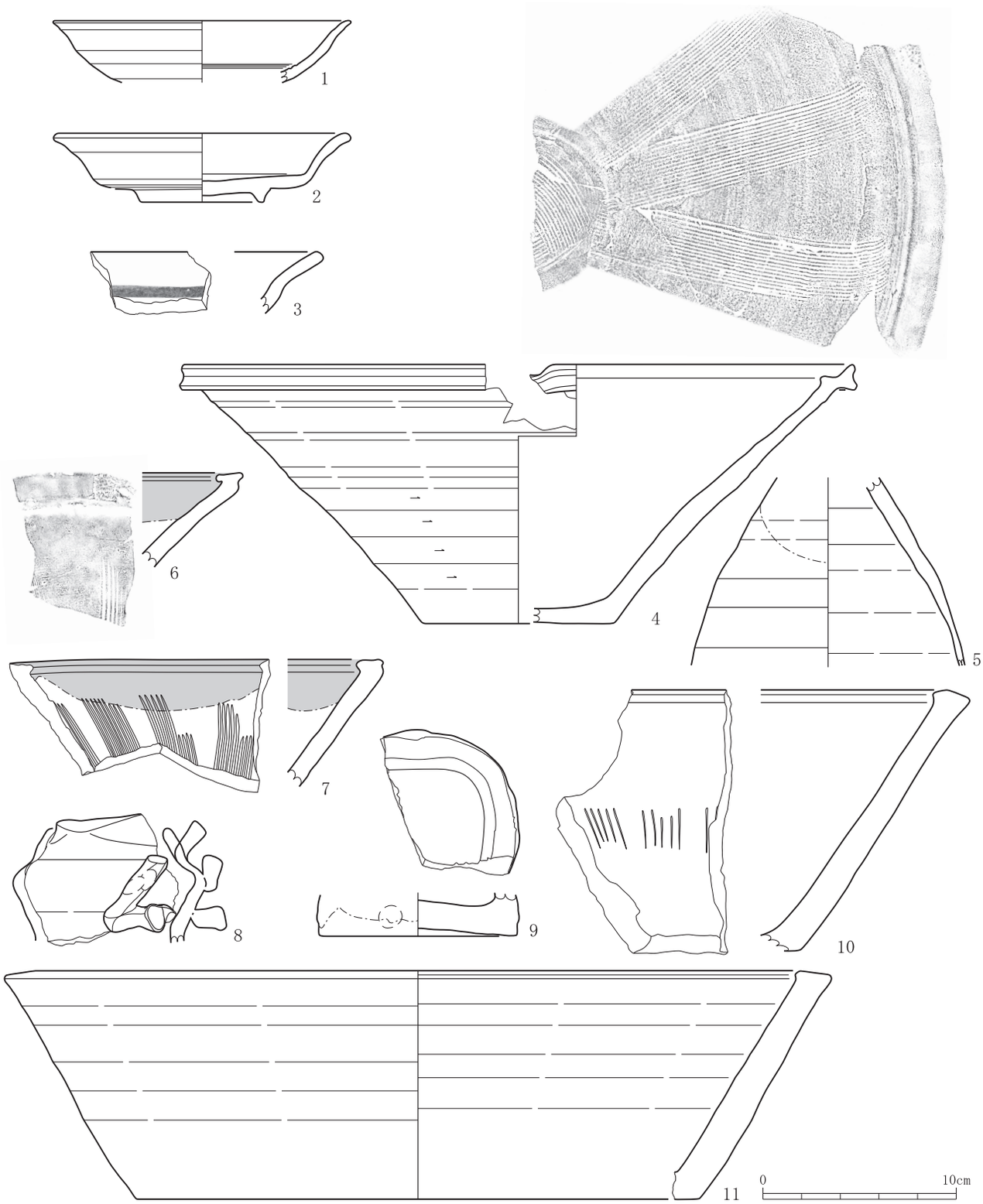
中世以前の土器には縄文土器、非ロクロ・ロクロ土師器、須恵器、中世陶器などがある。今回の調査では若林城期の表土層にあたるＶ層下部にある遺構については、原則として検出と一部の掘り込みに止めたことから、中世以前の遺物はＶ層の存在しない範囲で検出した遺構の確認作業時に出土したものが多い。

非ロクロ土師器は1,996点出土し、器種は坏、高坏、壺、甕類などがある。坏、高坏と一部の壺とみられるものの内面には黒色処理が施されており、時期は８世紀前半が中心と考えられる。ロクロ土師器は186点あり、器種は坏や甕などがある。須恵器は238点あるがほとんどが小破片である。器種は坏、甕、瓶類などがあり、時期は土師器同様に７～８世紀と考えられる。中世以前の陶器には13世紀末～14世紀中頃と考えられる瓶類、灰釉陶器など９点がある。灰釉陶器は９世紀第３四半期のものと考えられ、内面底部には金が付着している。この他に青磁碗や鞴の羽口などがある。



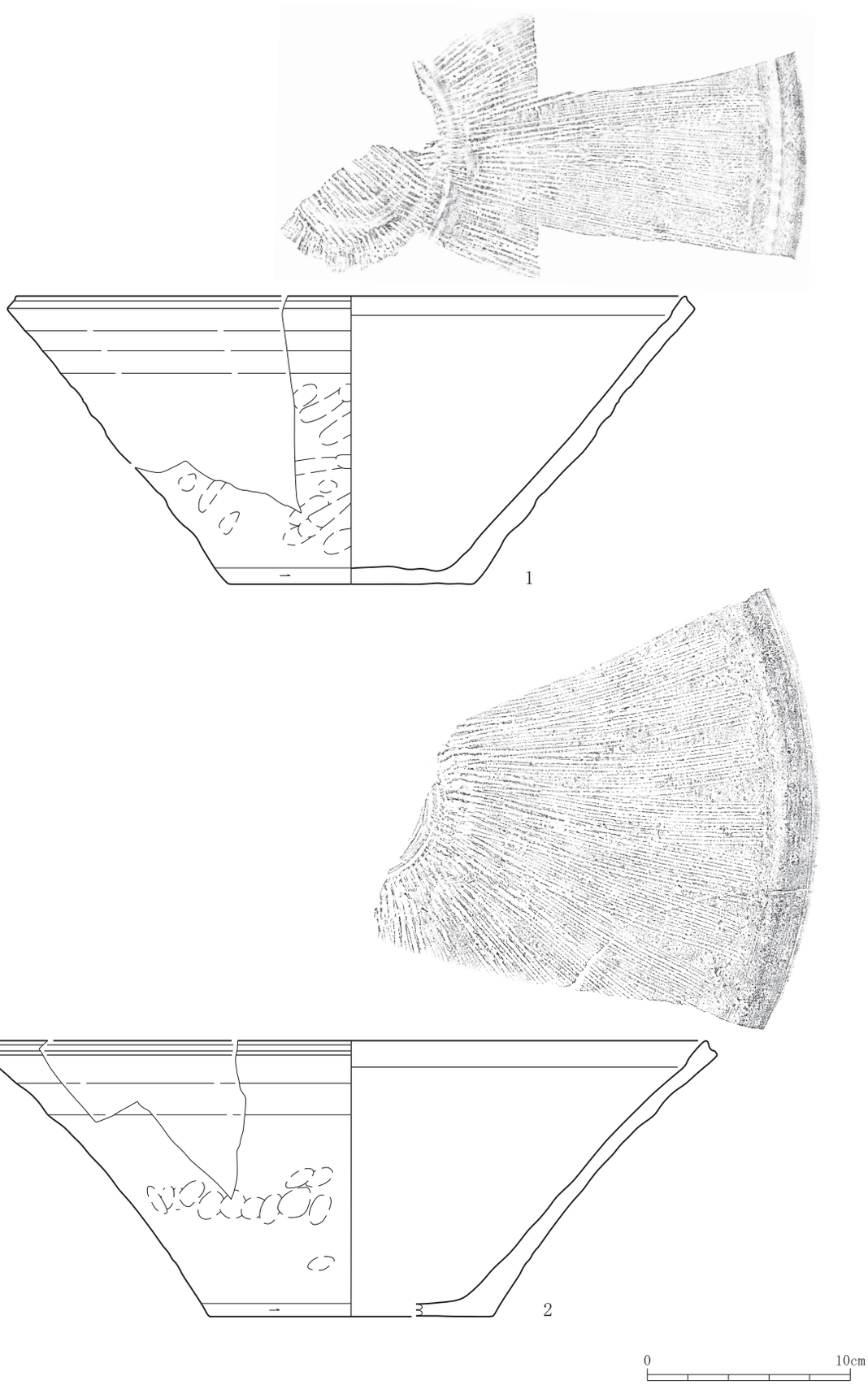
図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・層位	法量(cm)			産地	時期	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	I24	陶器	皿	SX14西 3,3e,3p層	(20.9)	10.6	3.3	美濃(織部)	17C前半	鉄釉で絵付け後長石釉、波状文三段、底部隆起	19-1
2	I63	陶器	天目茶碗	SX14西中 1c,3層	(10.0)	-	-	美濃	17C前半	灰釉	19-2
3	I54	陶器	丸碗	SX14西 3,3r層	(12.0)	-	-	美濃	17C初頭	灰釉	19-3
4	I121	陶器	小坏	SX14中 2e,3p層	(5.4)	-	-	瀬戸美濃	17C前半	灰釉	19-4
5	I130	陶器	小坏	SX14中 3層	(6.4)	(3.0)	2.7	瀬戸美濃	17C前半	灰釉	19-5
6	I128	陶器	小坏	SX14中 3層	(6.6)	(3.0)	3.7	志野	17C前半	長石釉	19-6
7	I9	陶器	小坏	SX14西 1a層	(7.2)	3.1	3.9	瀬戸美濃	17C前半	灰釉	19-7
8	I55	陶器	小皿	SX14西 3r層	8.3	4.2	1.9	瀬戸美濃	17C前半	灰釉	19-8
9	I27	陶器	丸皿	SX14中 3p層	9.0	4.3	1.7	志野	17C前半	長石釉	19-9
10	I126	陶器	丸皿	SX14中 3,3p層	11.0	6.0	2.8	志野	17C前半	長石釉、煤付着	19-10
11	I12	陶器	皿	SX14西 1b層	(15.2)	(6.4)	4.2	美濃	17C前半	長石釉	19-11
12	I32	陶器	皿	SX14西中 3,3p層	(25.0)	-	-	美濃(志野織部)	17C前半	鉄釉で絵付後長石釉、口縁部に圏線＋植物文？	19-12
13	I39	陶器	水注蓋	SX14西 3p層	7.8	-	2.3	瀬戸美濃	17C初頭	灰釉	19-13
14	I22	陶器	水注	SX14西 3b層	(11.3)	8.4	-	美濃(織部？)	17C前半	長石釉後一部に銅緑釉	19-14
15	I31	陶器	棗	SX14西 3p層	(5.0)	-	-	瀬戸美濃	17C前半	鉄釉、茶入れの可能性もあり	19-15
16	I38	陶器	徳利	SX14西 3p層	(4.6)	-	-	織部	17C前半	長石釉	19-16
17	I48	陶器	徳利？	SX14西 3r層	-	-	-	瀬戸美濃	17C初頭	灰釉	19-17

第29図　出土遺物　陶器（1）



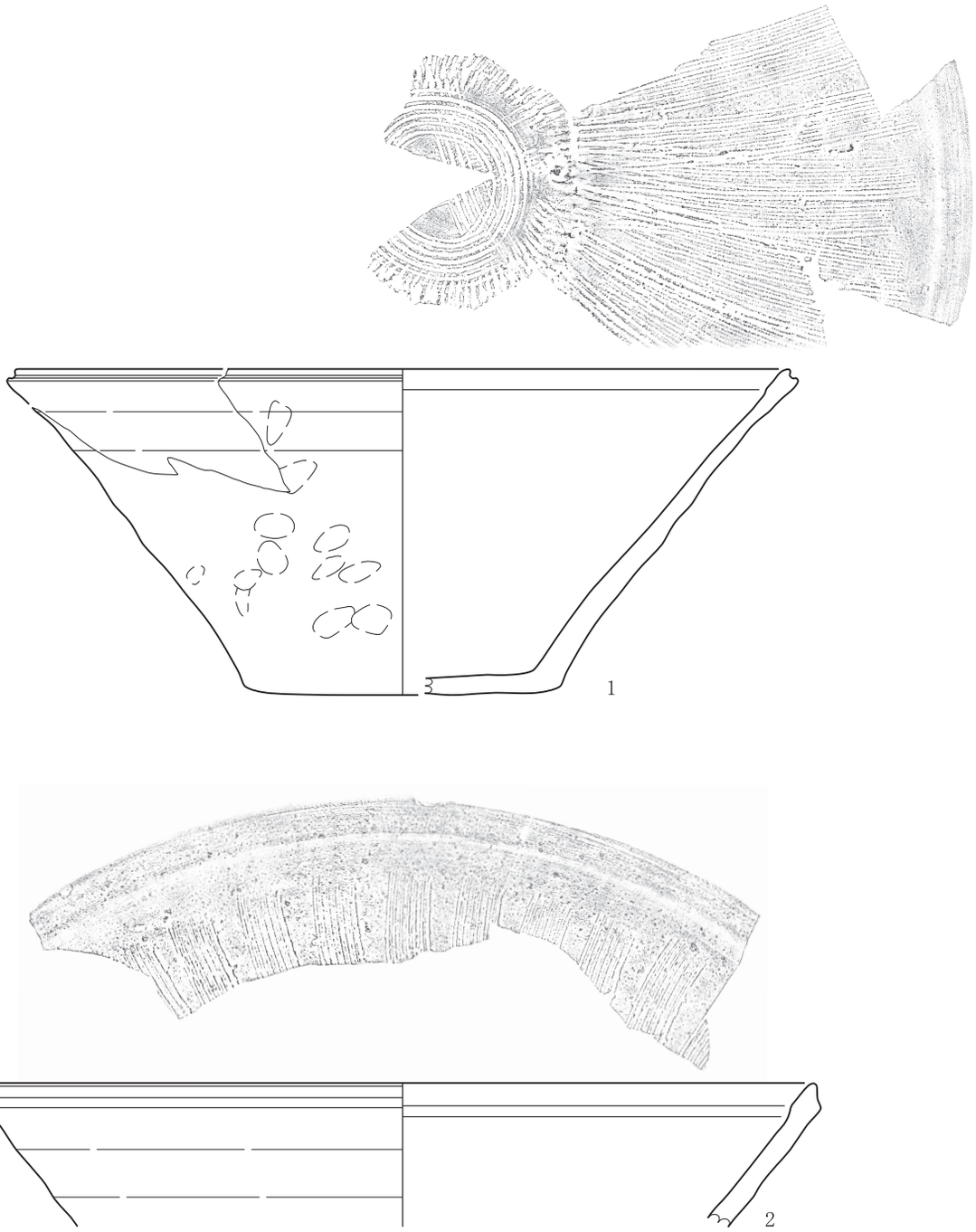
図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・層位	法量(cm)			産地	時期	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	I143	陶器	平碗	SX14中,東1層	(15.4)	－	－	(不明)	(不明)	長石釉、唐津もしくは朝鮮か瀬戸美濃	20-1
2	I11	陶器	端反皿	SX14西 1b,3,3g層	(15.4)	6.4	3.6	唐津	17C初頭	長石釉	20-2
3	I77	陶器	鉢	SX14西 3層	－	－	－	唐津	16C末～17C初頭	長石釉・鉄釉、折縁、絵唐津	20-3
4	I10	陶器	擂鉢	SX14西,西中	(34.4)	(10.0)	13.4	瀬戸美濃	16C末～17C初頭	鉄釉、擂目(16本、幅3.1cm) 1b,1c,3e,3p,3r,3層から出土	20-4
5	I36	陶器	徳利	SX14西,中 3,3p層	－	－	－	志戸呂	17C前半	鉄釉(上部は2度掛け？)	20-7
6	I80	陶器	擂鉢	SX14西 3層	－	－	－	岸窯系	17C前半	口縁部に灰釉、体部に錆化粧、擂目(6本以上、幅1.3cm以上)	20-8
7	I42	陶器	擂鉢	SX14西 3p,3r層	－	－	－	岸窯系	17C前半	口縁部に灰釉、体部に錆化粧、擂目(9本、幅2.0cm)	20-9
8	I78	陶器	花入れ	SX14西 3層	－	－	－	岸窯系	17C前半	鉄釉系の黒釉、釘かけの穴あり	20-6
9	I43	陶器	花入れ？	SX14西 3p層	－	10.2	－	岸窯系？	不明	鉄釉系の黒釉	20-5
10	I40	瓦質土器	擂鉢	SX14西 3p層	－	－	13.5	在地	16C末～17C初頭	擂目(5本、幅2.0cm)	24-3
11	I87	瓦質土器	鉢？	SX14西,中 3,3p層	(42.8)	(29.2)	11.8	在地	16C末～17C初頭		24-4

第30図　出土遺物　陶器（2）



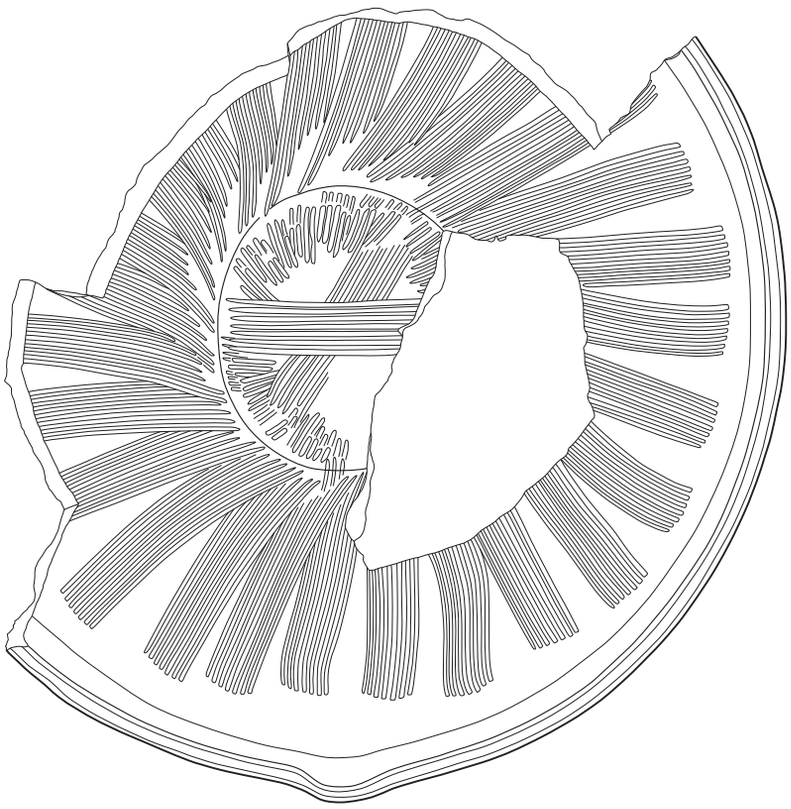
図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・層位	法量(cm)			産地	時期	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	I123	陶器	擂鉢	SX14中,東 3m,3p層	(33.8)	(12.0)	14.2	丹波	17C前半	擂目(8本、幅1.9cm)、擂目はほとんど磨耗していない、押圧痕あり	21-1
2	I116	陶器	擂鉢	SX14西中,中 3,3p層	(36.0)	(14.0)	13.6	丹波	17C前半	擂目(7本、幅2.1cm)、押圧痕あり	21-2

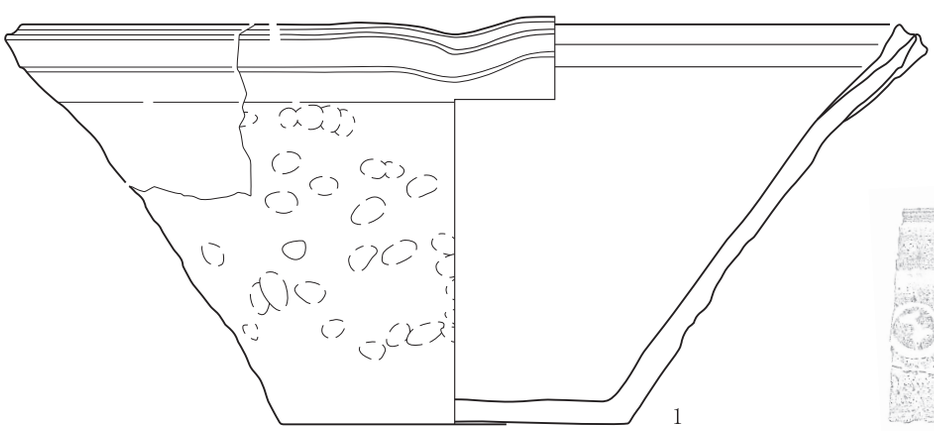
第31図　出土遺物　陶器（3）



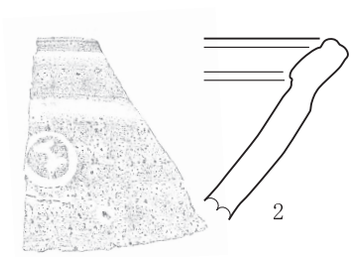
図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・層位	法量(cm)			産地	時期	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	I34	陶器	擂鉢	SX14西,西中,中 3,3p,3r層	(34.1)	(14.0)	14.4	丹波	17C前半	擂目(7本、幅2.1cm)、擂目はほんとんど磨耗していない、押圧痕あり	22-1
2	I142	陶器	擂鉢	SX14東 3p層	(37.0)	−	−	丹波	17C前半	擂目(7本、幅1.9cm)、擂目はほとんど磨耗していない	22-2

第32図　出土遺物　陶器（4）

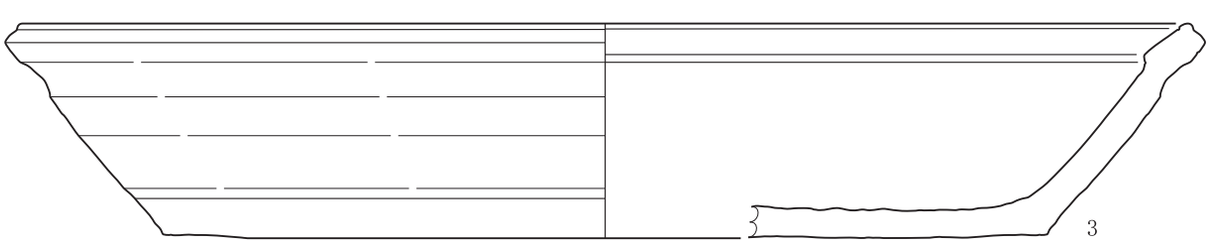




1



2

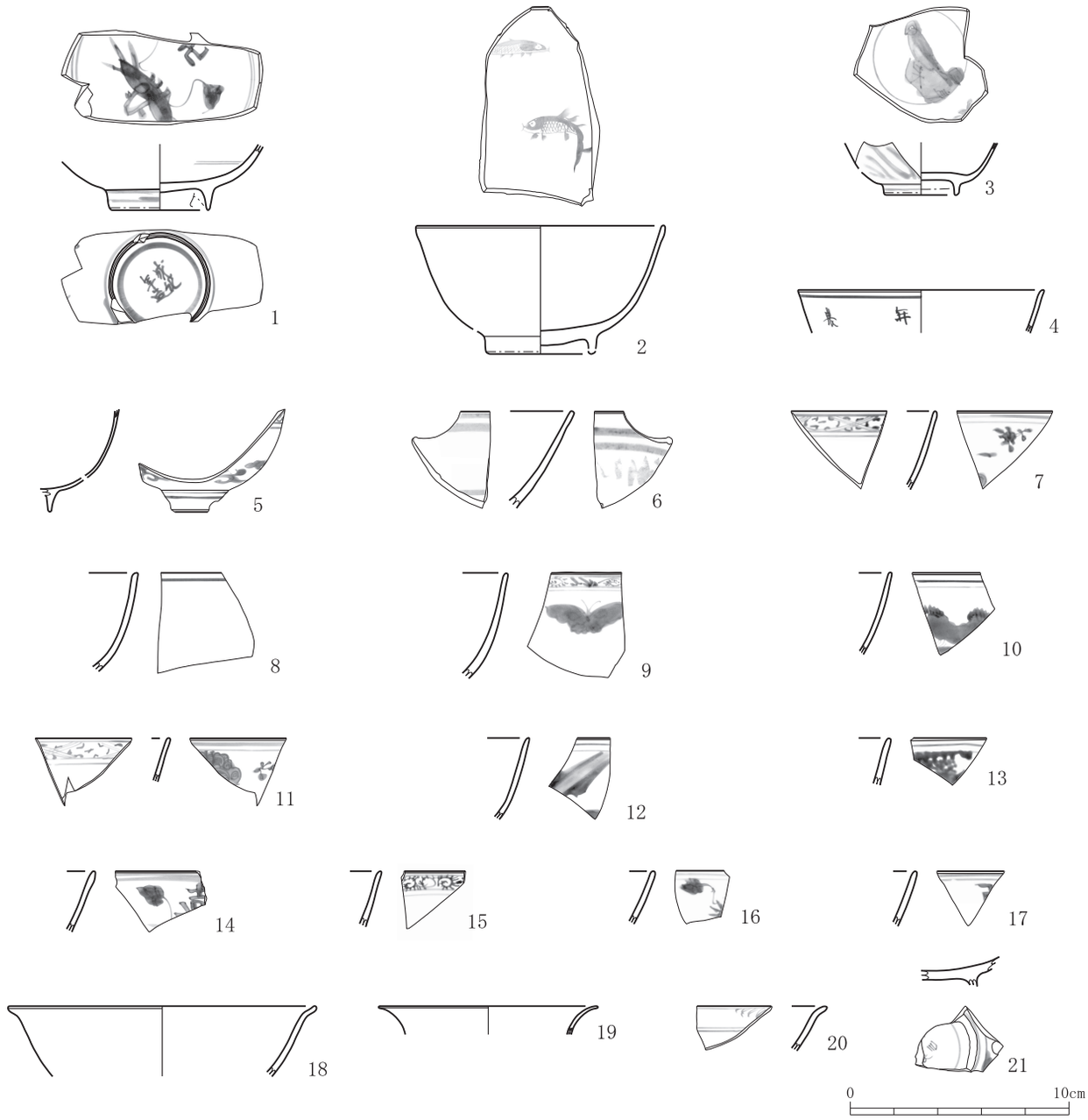


3

0　10cm

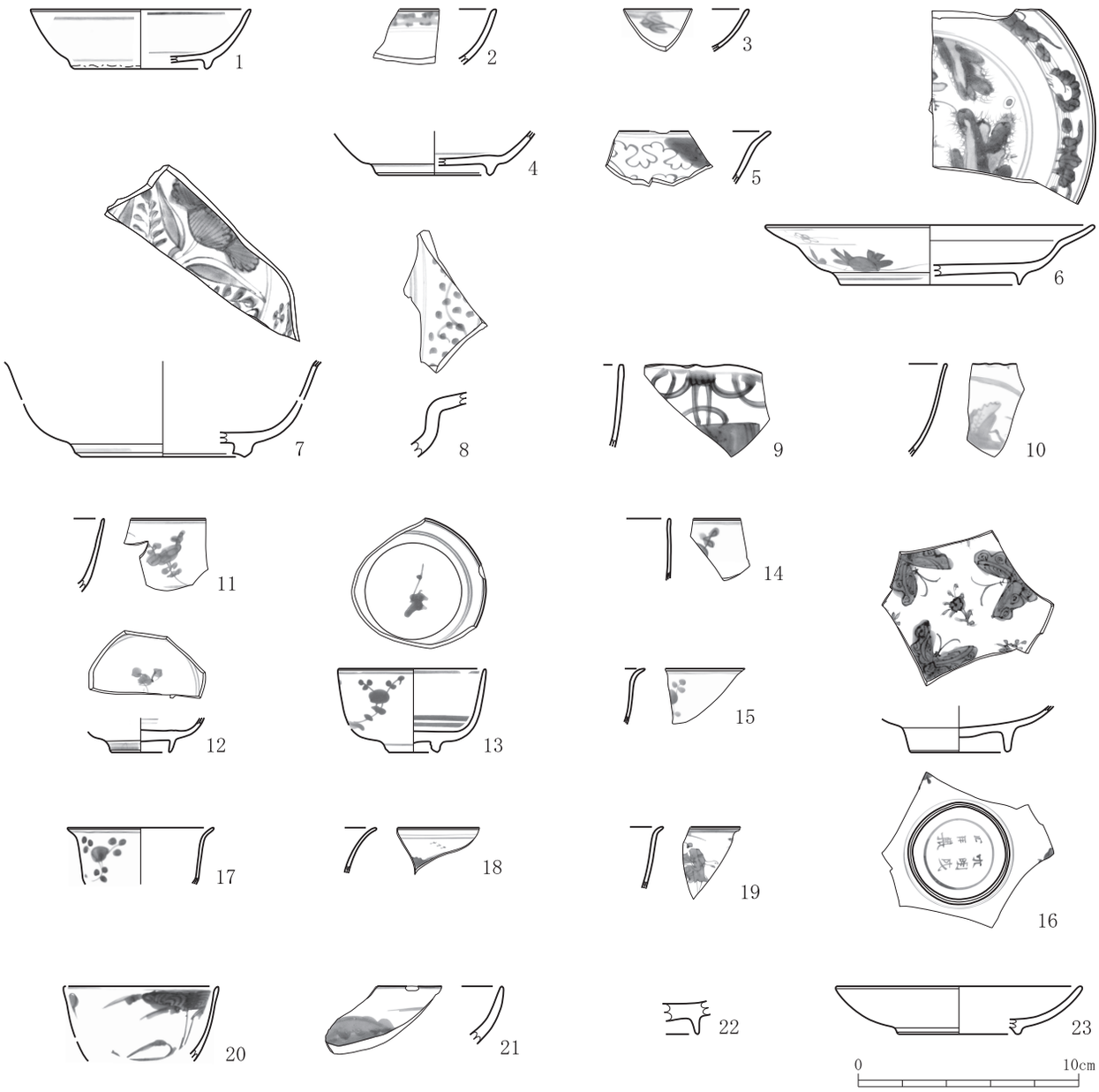
図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・層位	法量(cm)			産地	時期	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	I44	陶器	擂鉢	SX14西 3,3p,3r層	(36.5)	(14.0)	16.3	丹波	17C前半	擂目(7本、幅1.9cm)、擂目は磨耗していない、押圧痕あり	23-1
2	I28	陶器	平鉢	SX14西 3p層	-	-	-	丹波	17C前半	外面に自然釉？、刻印あり	24-2
3	I141	陶器	平鉢	SX14東 3p層	(46.8)	(35.4)	8.6	丹波	17C前半		24-1

第33図　出土遺物　陶器（5）



図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・層位	法量(cm)			産地	時期	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	J43	磁器	碗	SX14西,3層	－	4.4	－	中国	16C末～17C初頭	青花(外面：「成化年造」、内面：卍＋動物文？)、景徳鎮系	25-1
2	J26	磁器	碗	SX14中 3r層	(11.4)	5.0	5.9	中国	16C末～17C初頭	赤絵(内面：魚文)	25-2
3	J17	磁器	小碗	SX14西,3p,3r層	－	3.3	－	中国	16C後半～末	青花(外面：植物文＋圏線、内面：鳥？＋圏線)	25-3
4	J23	磁器	碗	SX14西 3r層	(11.2)	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花(外面：圏線＋文字「農年」)	25-4
5	J40	磁器	碗	SX14西 3層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花(外面：唐草文＋圏線)、景徳鎮系	25-5
6	J2	磁器	碗	SX14西,東 1b層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花(外面：圏線＋？、内面：圏線)、河南系	25-6
7	J66	磁器	碗	SX14中 3p層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花(外面：草花文、内面：四方襷文)	25-7
8	J55	磁器	碗	SX14西 3層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花(外面：圏線)、景徳鎮系	25-8
9	J51	磁器	碗	SX14西 3層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花(外面：蝶文＋草花文？)、景徳鎮系	25-9
10	J75	磁器	碗	SX14中 3層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花、景徳鎮系	25-10
11	J69	磁器	碗	SX14中 3p層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花(外面：草花文、内面：四方襷文)	25-11
12	J21	磁器	碗	SX14西 3r層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花	25-12
13	J12	磁器	碗	SX14西 3p層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花	25-13
14	J77	磁器	碗	SX14東 2e層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花(外面：草花文＋文字文)、景徳鎮系	25-14
15	J45	磁器	碗	SX14西 3層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花	25-15
16	J20	磁器	碗	SX14西 3r層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花	25-16
17	J57	磁器	碗	SX14西 3層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花	25-17
18	J71	磁器	端反碗	SX14中 3p層	(14.1)	－	－	中国	16C末～17C初頭	白磁	25-18
19	J87	磁器	端反碗	SX14東 2e層	(10.0)	－	－	中国	16C末～17C初頭	外面：褐釉、内面：透明釉	25-19
20	J53	磁器	端反碗	SX14西 3層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花	25-22
21	J84	磁器	碗	Ⅲ層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花(外面：圏線＋銘文)	25-23

第34図　出土遺物　磁器（1）



図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・層位	法量(cm)			産地	時期	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	J13	磁器	皿	SX14中,西 2d,3c層	(10.0)	(6.0)	(2.7)	中国	16C末～17C初頭	青花(外面：圏線、内面：圏線)	25-20
2	J36	磁器	皿	SX14西 3層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花	25-21
3	J28	磁器	皿	SX14西 3層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花	26-1
4	J78	磁器	皿	SX14東 2e層	－	(5.0)	－	中国	16C後半～末	青花(外面：圏線、内面：圏線)、漆接ぎ痕あり	26-2
5	J64	磁器	端反皿？	SX14中,東 3p,3k層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花、景徳鎮系	26-3
6	J9	磁器	折縁皿	SX14西 3c層	(15.0)	(8.2)	2.7	中国	16C末～17C初頭	青花(外面：草花文、内面：動物＋植物文？)	26-4
7	J81	磁器	端反鉢	SX14東 3p層	(14.8)	(7.4)	－	中国	16C末～17C初頭	青花(外面：草花文)	26-5
8	J7	磁器	折縁鉢	SX14西 1層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花(内面：圏線＋？)、河南系	26-7
9	J18	磁器	輪花鉢	SX14西 3p層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花	26-8
10	J32	磁器	輪花鉢	SX14西 3層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花、景徳鎮系	26-9
11	J39	磁器	小坏	SX14西 3層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花、景徳鎮系	26-11
12	J48	磁器	小坏	SX14西 3層	－	2.6	－	中国	16C末～17C初頭	青花、景徳鎮系	26-12
13	J10	磁器	小坏	SX14西 3c層	(6.7)	(2.2)	3.8	中国	16C末～17C初頭	青花(外面：草花文)	26-10
14	J8	磁器	小坏	SX14西 3c層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花	26-13
15	J67	磁器	端反小坏	SX14中 3p層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花(外面：草花文、内：四方襷文)	26-14
16	J72	磁器	小坏	SX14中 3p層	－	4.6	－	中国	16C末～17C初頭	青花(外面：「大明成化年製」、内面：花蝶文)、景徳鎮系	26-6
17	J27	磁器	端反小坏	SX14西,中 3k,3r層	(6.6)	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花(外面：圏線＋草花文？)	26-15
18	J60	磁器	端反小坏	SX14西中 3層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青花	26-16
19	J65	磁器	端反小坏	SX14中 3p層	－	－	－	中国	16C末～17C初頭	青化(外面：人物文)、景徳鎮系	26-17
20	J38	磁器	小坏	SX14西 3層	(7.0)	－	－	肥前	17C	染付	26-18
21	J85	磁器	皿	撹乱	－	－	－	肥前	17C	染付、釉薬にムラあり	26-19
22	J61	磁器	皿	SX14中 1b層	－	－	－	肥前	17C	染付	26-20
23	J86	磁器	皿	撹乱	(11.2)	(5.6)	(2.2)	国産	近現代	白磁	26-21

第35図　出土遺物　磁器（2）